

東京專門學校
西洋教育史
中島半次郎

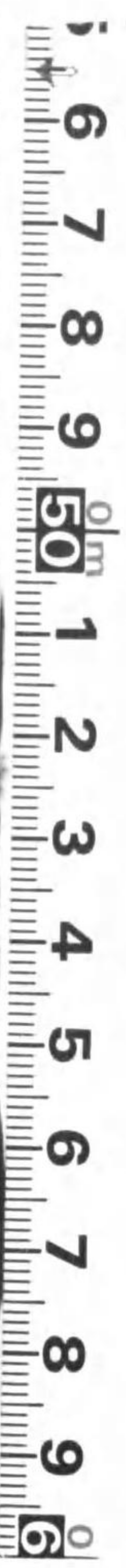
62-385



1200701676932

62
385

東京
專門
學校
西洋
教育
史
藏



始



西洋教育史

中島半次郎 講述



總論 教育史とは何ぞや

第一節 教育史の定義 教育史とは、前時代の者が、一定の目的と方法と制度とを具して、後時代の者を教育し、遂に今日の教育を爲すに至らしめたる経過を記載するものを言ふ。蓋し今日の教育は、一朝一夕に成りたるものにあらず、實に過去數千年間の遺産にして、吾人は此遺産の賜に依りて今日の教育を爲しつゝ、あれば、吾人は其家に屬して其家系を知り、其國民となりて其國家の歴史に通ずべきが如く、苟も教育に從來する以上は、此教育の變遷に明ならざるべからず。

第二節 教育史の淵源 其教育は、恐らく人ありてより直ちに始まりしことならむ。社會學にて、社會進化の順序を、家族、一族、部族、國家と進化せしやうに説明するが、教育は、其第一の社會組織たる家族に於て、子を生むや、直ちに始まりしことならむ。其一族となり、部族となり、國家となるに至りては、教育はいよゝゝ大切の事業

となり、遂に一種の専門の事業となるに至りしは、一般の歴史上に記載せらるゝ所なり。實に教育といふことは、人間社會の一大事業にして、教育は他の社會事業と均しく、一般の歴史、殊に開化史に記載せらる。従つて教育史は、開化史の一部と見做すことを得べし。しかも開化史の務は、社會百般の事に涉り、教育の變遷にのみ明なること能はざるが故に、別に教育史を調ぶる必要あり。

教育が、歴史殊に開化史の一部として記載せらるゝに至りしは、社會が、猶家族、一族、部落を爲し、時代にあらざして、實に國家を爲し、時代にあり。それ迄は、教育といふことは、ありしことは拒むべからざるも、こゝに教育史に卜し、定義の如く、一定の目的、方法、制度を具して、個人修養の爲め、社會進歩の爲めに爲すといふ如き教育の立派なる形を備へざりき。故に教育史の淵源は、遠く溯れば、人間が初めて一家を爲して、子を生みし時に始まるも、精密に之を言へば、國家ありて、教育を經營するに至りし時に始まるとするを至當とすべし。

第三節 教育史に記載すべき事柄 教育史の淵源は、此くの如く、人間が國家を組織し、其國家經營の一大事業として、之を事實の上に現はし、時に始まるが、其國家な

る社會にて、教育を施すには、無論其國家の自然の境遇に適する如き教育を施したる。此故に、教育史は、第一に其國の氣候、其種族、其風儀、其社會的狀態、其政治的組織、其宗教的信仰等が、如何に教育に其影響を及ぼし、反對に又如何に其社會を改善したるかを注意せざるべからず。而して又かゝる國家は、其國家に適すべき人を作る爲めに、制度を布き、學校を起し、教師に其教育を托したるを以て、教育史は、第二に教育制度につき、如何なる教育法會、如何なる學校組織、如何なる教師待遇が行はれたるかを記載せざるべからず。かくして教育を實施する上に、哲學者は、之を人生の問題より考へ、教育家は、又人生の目的と國家の必要とに應じて、之を教育すべき教育至極の理想を立てたるを以て、教育史は、第三に、教育の理想の歴史、即教育學說史を記載し、古來教育の理想が、如何に論究せられ來りたるかを見ざるべからず。而して教育家、哲學家が、かくして教育の理想を論定して、然る後、幼者を教授し、訓練したるを以て、教育史は、第四に、教育訓練の實施せられし歴史を記載せざるべからず。之に加ふるに、教育は、かくの如き方面に、それゝの偉人の力を得て發達せしものなるを以て、教育史は、第五に、教育行政家、哲學者、科學者、及び教育家の傳記、其内

部的生活、其著述等を記載せざるべからず。

之を要するに、教育史は、一面現實の開化史と關し、他面理想の哲學史と手を携へ、教育に興味を有する偉人の手を借りて、遂に今日の教育と發達せしものゆゑ、開化史と哲學史との間を縫ひ、其間のあらゆる關係を、洩れなく記載せざるべからず。世の歴史を記載するもの、現實の開化に重きを置きて、理想の學說の力を輕んじ、或は時勢の人を作るを説きて、個人の方を小さく見るが如き弊あるが、教育史に於ては、よく此弊に鑑み、以上の五つの事柄に涉り、理論と實際時勢と個人との關係を、能く見るにあらざれば、遂に眞に史を解すべからず。實に是等は、何れも有機的關係を有して、相共に教育を進歩せしむるものなれば、教育に於ける是等の關係は、極めて仔細に觀察せむことを要す。

教育史に記載する事柄を、以上の五項とする時は、教育史と教育學史との區別は、之を明瞭に了解することを得べし。教育史は右の五項を併せ記するもの、教育學史は、旨と教育學思想の變遷を示すものなり。こゝに講ぜむとするは教育史にして、教育學史にはあらず。廣く教育一般の變遷を示し、其中に教育學思想の變遷をも

示す所の教育史なり。

余は、今後、此五つの點より、教育の變遷を記載し、考察し、批評し行くべきが故に、能く此點を了得あるべし。

第四節 教育史研究の精神 教育史は、以上五つの事柄を記載すべきものなるが、其關係變遷を説くに當り、之を一の哲學的立脚點、一の宗教的信仰よりすることを許さず。ヘーゲル派の哲學者ローゼンクランツは、其一系統としての教育學の第三部に、教育の變遷を叙し、其師ヘーゲルの歴史哲學の見解を持ち來り、教育の變遷を、普遍理性の發現、教育に現はれては人道の發展を觀せり。而してカール・シュミットは、其教育史に於て、神が此世界を指導し、其次第々々の妨げられざる發達に依りて、一層大なる敎知、自由、止善に進む道を記載するもの、即ち教育史なるが如く叙せり。かゝる説き方は、教育の變遷を總括して、其變遷の關係精神を説明するには、便利なるれども、動もすれば、歴史の真相を、理論もて、無理に律し去るの嫌なきにあらず。この故に、余は本講義に於て、一に史的敘述の精神を守り、科學的精神を躰して、公平に其事實を調べ、其事實に依りて其關係を見、且つ之を批評せむことを力むべし。

其史的研究の結果として、教育史は、人道の發展とか、神の意志の發現とかの結論に達することあるかも計られざれど、これ始めより假定して掛るべきことにあらず。第五節 教育史研究の利益 教育史は、かく教育と社會との關係、其制度、其學說、其實際、及び其事業に力を盡したる偉人の傳を含み、遂に今日の教育を爲したる經過を説明するものなれば、之に依るにあらずば、今日の教育を理解すること能はざるなり。今日の教育に従事しながら、今日の教育の發達に明なるにあらずば、教育の主要の點に着眼すること能はざるのみならず、又未來にかけて、如何に之を導くべきかを知ること能はず。教育史を研究するに依りて、吾人は教育と社會との親密なる關係、廣大なる教育制度、高遠なる教育理想、聰明なる教育方法を了解し、同時に教育界の偉人に接して、其撓むなき精神に接し、大に教育に奮勵する志を起すべし。歴史は常に成功を語り、又失敗を語る。教育史も、一面には教育が成功して遂に今日の教育を發達したる道を語れども、他面には、之が失敗したる跡を示して、吾人によき教訓を與ふ。吾人は須らく其成功に照し、其失敗に鑑み、教育に盡しし偉人の心事を追ひて、教育に奮勵せざるべからず。吾人は教育史に依りて、教育上の幾多

の疑問を解くことを得べし。多くの高尚なる心事を有せし人に遭遇することを得べし。多趣なる教育的文學に通ずることを得べし。教育學や教育の實際の大體に通ずることを得べし。要するに教育史を解するに依りて、教育事業の大半に通ずることを得べし。殊に教育史に依りて吾人の得る所は、吾人が教育上に盡し、効績は、一の史的潮流の中に其生命を托し、折々に其光を發して、國家民人の發達を助くるを得との確信を抱くを得ること是なり。教育史は、過去の功過録なると共に、又未來の闇を照す燈となり、かねて吾人を愚喩獎勵する所の氣力の授與者となるものなり。

第六節 本講義講述の順序 教育史に記載せらるべき時代は、前に言へる如く、社會が國家を爲したる時より始まるが、猶之に記載せらるべき國は、今日一般の教育を進むるに與りて力ありたる國ならざるべからず。これ猶万國史に於て、世界の氣勢に關せざる國の歴史は記載せざると均し。此故に本講義に於ては、古代國家を持して、それ／＼の教育を施し、支那、印度、波斯、バビロニヤ、アッシリヤ、フェニシヤ、エテヤ及びエジプトの教育をも記載せず。これ今日の教育に、左程の影響を與へ、

りしを以てなり。此中印度支那は、吾人特別に東洋教育の變遷を調ぶる必要より、研究すればすべて、ユダヤは、後に基督生まるゝに至り、教育史中の國となる。此理由よりして、本講義は、筆を希臘に起し、左の順序を追ひて、今日までの教育の變遷を尋ねべし。

- 第一章 希臘時代の教育
- 第二章 羅馬時代の教育
- 第三章 基督教の新精神
- 第四章 中世紀の教育
- 第五章 文藝復興時代宗教改革時代の教育
- 第六章 十七世紀の教育
- 第七章 十八世紀の教育
- 第八章 十九世紀の教育
- 第九章 教育變遷の概見

第十章 今後の教育

第一章 希臘時代の教育

第一節 希臘の風土及宗教等 物論に述べし如く、教育の發達を見るには、一面は其の國の風土、其社會的事情に注意せざるべからず。今希臘の地勢を見るに、地中海に突出して、海運上エジプト、フェニシヤと交通して、其文化を取り入るゝに適し、又其内地は、山岳崔嵬として、數多の小地方に分れ、互に競争するの便宜を有せり。殊に此地氣候温和にして國を建つるに適せるを以て、ドリセン種族とアイオニセン種と族浸入し來りて、都府言ひ換ふれば國を立てたり。甲の立てたるものスバルタ、乙の建てたるものアゼンスにして、此他にも、猶小都府ありしも、希臘の羈權は、右の兩都府に握られたり。甲は武を以て勝り、乙は文を以て立ち、甲は貴族政治の模範を示し、乙は民主政治の標本となれり。

此希臘の國民に最も偉大なる影響を與へたるものは宗教なり。希臘の宗教は、多神教にして、ツェウス、ポセイドン、アポローン、アルテミス、ヘフェイストス、ヘルメス、ヘテ

アーレス、アテナ、ヘスチヤ、デミートル、アフロディテの十二座あり。是等の神、色々の動作を爲すが、即ち希臘の神話にして、希臘の文學は、實に是より生れ出で、ホーマー（紀元前千〇四十四年頃の人といふ）ヘシオッド（紀元前八百五十年頃の人）之を詩に咏じ、此時大に教育に影響せり。殊に又是等の神を察る爲めに、「オリムピック」、「ピシヤン」、「イシミアン」、「テメセン」の四個の國祭ありて、此國祭には、希臘各都府の人民、一緒に集り來りて、相共に神の威徳を稱し、文武の演技を爲して、祝意を表し、暗々に希臘全軀の統一を計り、希臘の社會教育を爲せり。

第二節 希臘教育史に記載する時代 希臘の治世は、紀元前殆んど一千年間を占め、之を分ちて、第一期紀元前千百年より五百年まで、第二期五百年より三百三十八年まで、第三期三百三十八年より百四十六年までの三期に分つが、教育の盛んなりし時期は、第一期の後半より、第三期の末、希臘が羅馬に征服せらるゝに至るまでの間とす。此間、希臘の羈權を握りしは、前に言ふ如くスバルタとアゼンスとの二國にして、希臘の教育と言へば、殆んど此二國の教育を指す。しかも其後世に最も偉大なる影響を及ぼしゝものはアゼンスなり。今は先づ其一方のスバルタより述

ぶべし。

第三節 スバルタの教育 スバルタはドリヤン種族の一部が、希臘北部の山間より浸入し來り、南部ペロポネサスに入りて其居民を征服し、其上に立ちて、專制の權を振ひしものなり。其戰勝者九千家族共凡三万人ありて、之が士族となり、其下に平民と奴隸とありき。スバルタは、かく下には士民を抑へ、外には敵國の扣ふるあるを以て、此士族の教育は、一致團結を其精神とし、一身の利害を棄て、公に奉ずる公共心強く、個人の權利、個人の個性を棄て、飽くまで其國家の勢力を張らむと力めたり。ライカルガスの法律は、此點を看取して立てたるものにて、紀元前八百二十一年に、一の法律を發し、奢侈を禁じ、懦弱を誡めたるが中に、教育に關する條項として、男女結婚するには、必ず國家の承認を経べく、其間に生れたる子の健康は、亦國家の檢閲を受けざるべからざる旨を規定せり。こゝを以て、其兒女若し懦弱ならむか、タイグタス山の谷に棄つるを例とし、其強壯なるものゝみ、養育せしむ。右の如くして、國家の承認を経たる子女は、七歳まで、之を、母の子として、母の手に養育せしむ。されど此時より、鹿衣鹿食に慣れ、後には獨りにて寝ねしむ。母は此時

より、既に敬神の念と、侯國の精神とを鼓吹して之を教育す。七歳よりは、國家の子となり、兒童訓練者といふ、國家の教育者の監督に屬し、其年に應じたる武藝を學び、道德上の訓練を受け、又讀み書きの初步と、ホーマーの「イリヤッド」や、インソフ物語の中の記憶すべき條項を覚え、かねて其訓練者より、古英雄の傳を聞き、一軀の行儀作法や、士族の心得を學ぶ。此訓練者は、常に鞭を持てる使丁に伴はれ、若し兒童武藝を忘るか、又は卑劣なる舉動を爲す者あらば、之を罰し、往々血を見るに至り、中には聲を出すを耻ぢて、遂に死に就きしものさへありきといふ。かくて十二歳に及ぶ。十二歳よりは、軀操場(Gymnasium)に出で、規則立ちたる武藝を學ぶ。武藝は、競走、角力、飛躍、内盤投、槍投の五種にして、之を「ペンタスロン」(pentathlon)と呼ぶ。此時に及びては、讀み書きは一層其歩を進め、天文學、幾何學の初步をも學び、又神や古英雄を讚美せる唱歌を學ぶ。音樂は、之を以て神の榮光を讚するに用ひ、又勇壯の氣を鼓舞するものとして用ひられたり。但しアゼンスにて、音樂を教育に用ひたる精神は之に異なり。

此時の訓練は、一層嚴格となり、飢渴を忍び、寒暑に慣れ、如何なる困難にも堪ふる習慣を付け、鹿衣鹿食は前の時期よりは一層甚しく、沐浴はユーロタス河に於てし、其河の岸に生ふる葦の穂を取り來りて之を蒲團に入れ、其上に眠るを例としたり。此間常に竊盜を爲すことを許さる。竊盜は、之を以て己の欲を充すにあらず、全く戰畧に習ひ、機敏熟練を獎勵するにあるを以て、若し露顯する時は、嚴罰に處せらる。かくの如くして、此時期の少年は、同一の寄宿舎に、同一の訓練者に従ふ間に、其訓練者より、士族としての修養と、處世上の訓練とを受け、女々しからぬ氣象を養ひ、長者を敬し、同胞相親む風習に慣れ、高潔にして力ある言語を使ふことを學ぶ。寄宿舎教育の効力あるは、實にスバルタが夙に經驗せし所なり。かくて此寄宿舎教育の結果として、自然に威嚴備はり、相當の判斷力に富み、共同一致の精神、何時とはなしに養成せられ、何時にても、己の身を以て國家の急に赴く素養を爲す。要するに、神を敬し、槍を投ぐることは、其修養の大本にして、勇敢にして且つ從順ならむことは、其最も獎勵せし美德なりき。かゝる訓練を受けて十八歳に至れば、是より一人前の士族となりて、護國の任に當り、政務に參與す。しかも其後といへど、軀操場には出入す。

スパルタに於ては、女子の教育も怠られざりき。これ健全にして強壯なる國民を作らむとの要求より、自然に出で來れるなり。こゝを以て、スパルタの女兒は、平生母の傍にありて、宗教を學び、裁縫料理のこゝを習ふといへども、亦躰操場に出で、躰力を練り、訓練者より、相當の女子の心得を學びて、女子も亦國家の運命を荷ふとの意識と熱情とを有しき。もとより其躰操場は、男子のとは區別せられき。かくてスパルタの婦人は、其子の初陣に臨み、勝つて歸らば楯に乗つて歸れとの壯辭を以て之を送り、平生其子や其夫の戦死に逢ひて、少しも心を動かさざる如き素養を爲しき。しかも優美といふことも忘れられたるにあらず。アゼンス人も、スパルタ婦人の發達、強壯、優美には感服したり。

第四節 ピタゴラス スパルタの、此教育の精神を自己の理想に寫し、以て一の學校を起し、一の學派を立てしものをピタゴラスと爲す。

ピタゴラスは、サモス島に生れたる人にて、紀元前五百四十年より、五百年頃に勢力ありきと傳へらる。早く埃及に遊び又スパルタに來りて、ライカルカスの法律を研究して、其精神に服し、希臘領南方伊太利のクロトナに一の學校を開き、一の盟社

を組織して、大なる勢力を振へり。アゼンスかソクラテス、プレト、アリスト、トルを有したる如く、スパルタは、ピタゴラスを有せり。

ピタゴラスの哲學は、調和を本とし、而して其調和は、數の比例に依りて成るとし、之を以て天地と人生とを説けり。謂へらく、此宇宙の根原に一大中央火ありて、之より光明、温氣、生命出で、數の比例に依りて、此天地人生成り、而して此宇宙は、一大音樂を爲しつゝ、運轉しつゝありと。氏は此思想を以て、進んで人生を説き、之を以て教育の主義とし、躰と精神、父と子、治者と被治者、人と神との調和を計るを教育の目的とし、人は生れながら、惡に傾き易き性あれば、之を矯め、之を調和して、純潔と爲し、知見を開きて、感覺的欲望の奴隸的羈絆より、精神を自由にし、其圓滿の發達を爲し、以て神との調和を保たしむべしとし、此點より、氏は大に節制の徳を重んぜり。

ピタゴラスの學校は、之を分ちて、豫科 (Exoteric) と本科 (Esoteric) との二つと爲し、豫科を卒るにあらずば、本科に入るべからざる規定なりき。學科は、數學、物理學、地理學、哲學、及び醫學にして、就中數學は、其最も重んぜしものなりき。生徒は、スパルタ風に、すべて之を同一の寄宿舎に入れ、すべて共同の費用を以て之を維持し、朝、晝、夜

の三回に必ず神に祈禱を捧げて唯一の神を念ぜり。訓練すべて嚴肅にして、一時校風肅然として起れり。氏が言ふことは殆んど絶對の權利を有し、生徒は一切之を疑ふべからずとせり。其徳として尙びし所、節制、從順、眞實、及び清潔にして、是等は説明の上より、實行の上より、獎勵せられ、若し背く者あれば嚴罰を課したり。かくて、此學派は、一大勢力を爲し、清淨と嚴肅とを以て名ありしが、其理想に馳せて、クロトナの土民と衝突せしため、賤民より火を放たれて、此學校は灰燼に委するに至れり。氏が此際遁れ出でたるか、或は火中に葬られたるかは明ならず。従つて此後此學派は勢力なかりき。氏が嚴肅なる教育を施し、獨斷的の教義を以て其生徒を化し、一躰に制風貴族風ありしは、十分にスバルタ風を帯びしものと見るべし。氏は平生調和を唱へて、自らは衝突に終り、而して其學說の根本思想とせし火の爲めに焼き打ちにせられたるは、奇縁といふべきか。

第五節 アゼンス教育の物説 希臘に於て、常にスバルタの競争相手となりしものを、アゼンスを爲す。アゼンスはアイオニヤン種族が、希臘の地中海に突出せる目星しき土地、アチカの一部に建てたる都にして、空前の文化を開き、爲めにアゼン

スは、希臘の眼にして、美術辯論の花、かねて又才智者の本土と呼ばるゝに至れり。歐洲今日の文化は、實にアゼンスの文化に負ふ所多く、アゼンスありて、始めて世界に文化を煥發したり。従ひてアゼンスの教育も、亦教育史上に重要な位置を占む。今日吾人を動かしたつゝある精神も、アゼンスに其源を發せるもの多く希臘の教育と言へば、スバルタは差し置きて、先づアゼンスの教育を意味す。

アゼンス人は、其性質優美にして、夙に人間の自由を尙び、人の人たる高尚の氣韻を帯び、政體に於ては、民主政治の主義を取り、教育上には、修養といふことの眞義を唱へ出せり。スバルタを觀察したる眼を轉じて、アゼンスに向へば、恰も冬の枯野を去りて春の野邊に來りし觀あり。スバルタは、すべて國家主義にして、人民の自由を認めず。教育に於ても、萬民を同一の型に鑄込まむとするに、アゼンスは個人主義を取り、個々人の特性を延ばすを其要旨とせり。其他あらゆる點に於て、此兩國が、兩々相反對せる觀あるは、以下説く所を見て之を明にすることを得べし。尤も此兩國に通じて、希臘的の所なきにもあらず。之も亦以下説く中に明なるべし。

第六節 アゼンスの政體と立法者 アゼンスは始めの間は、スバルタ同様、君主專

制國にして、紀元前六百二十四年ドラコーが制定したる法律は、大に君主の權を重んじ、此君主權を重んずる爲め、非常に苛酷なる法令を布き、爲めにドラコーの法律は、墨を以て書かれたるにあらざ、血を以て書かれたるなりと言はれし程なりしが、希臘の最賢人と云はるゝソロン、其弊を認め、紀元前五百九十四年にアゼンスの憲法を改正して、之を民主政治と爲し、以てアゼンス隆盛の基を開けり。ソロンは此憲法に於て、父母の其子女を賣買するを禁じ、他方に實業を奨励し、同時に教育に關しては、父母は其子を教育すべき義務あり、若し之を怠るものあらば、老後其養を受くべき權利なしと規定し、又躰育のみを重んぜず、精神の教育にも大に注意すべきことを規定せり。アゼンスに於て、父母が進んで其子の教育を奨励し、又アゼンスに於て、大に文學榮えて、精神の修養の頗る高尚なる點に達したるもの、此憲法に其基を有せり。スパルタに於ては、教育は一切國家の干渉せし所、而して其教育は、精神の修養をも、身躰鍛練の犠牲とせしが、アゼンスにありては、教育は父母が進んで其子に與ふる所にして、身躰の鍛練は、精神修養の爲めに、初めて重要視せられたり。殊にスパルタにありては、教育は士族の階級に限られしが、アゼンスにありては、之

を平民にまで及ぼしたるは、頗る注目すべき事柄なり。

但しこゝに附け加へ置くべきは、アゼンスは民主政躰を取りしとは言へど、國家の隆盛の爲めに教育を奨励すべしとの國家主義は、スパルタと同様に取しし所に於て、ソロンの憲法には此精神十分に籠れり。後に説くプラトンの教育意見にも、亦大に國家主義の籠れるを認むることを得べし。此點に於ては、此兩國殆んど一様の精神を持したるものにして、物じて希臘の教育は國家主義を取れりといふことを得べし。されどスパルタは、一切各人の權利、自由、獨立を認めず、之を同一の型に入るゝを以て國家隆盛の基と信じ、アゼンスは、十分に各人の權利、自由、獨立を伸ばして以て國家を盛んならしめんと試みたり。此點より言はば、スパルタは國家主義を取り、アゼンスは個人主義を取りしものと見ることを得べし。

第七節 アゼンス兒童の教育 アゼンス兒童の教育は、スパルタ同様、生れてより七歳までは親の許にて養育す。母は乳母に其養育を托し、乳母は之に毬や笛や、女子ならば人形を與へ、又昔物語や俗歌を歌ひ聞かす。此乳母は、多くスパルタより備ひ入れたり。アゼンスの兒童は皆頸に御守を掛けて魔除けと爲し、己が心の儘

に遊び、決してスバルタの兒女の如く其自由を束縛せらるゝとなし。かくて七歳となれば、乳母の手を離れ、教僕 (Pedagogue) と呼ぶ奴隸の教師兼從者の手に渡り、パレストラ (Palestra) と呼ぶ兒童の躰操學校に通學す。此教僕の務は、其主人の子を保護し、監督し、又補助するにありて、常に躰操學校に伴し、課業終れば又家に伴ひ歸る。而して此教僕は、スバルタの兒童訓練者の如く鞭を持てる使丁に伴はるゝなどの事なし。アゼンスの兒童には、躰罰を課すること極めて稀なりき。躰罰は寧ろ兒童の名譽を毀損して、却りて悪しき感情を起さしむるが如く思はれたり。かくの如くして十二歳、十四歳、若しくは十六歳に及ぶ。それよりは少年の躰操學校 (Gymnasium) に通學す。パレストラとギムナジウムとは、豫科本科の如き關係を有し、課業も殆んど同一にして、唯簡單なると複雑なるとの差あるのみ。

此間、兒童少年共通じて課せらるゝ課目は、躰操、音樂、文典の三科にして、躰操は之をパレストラ、ギムナジウムにて、スバルタ同様、五藝を學ばしめ、又此外殊に游泳を重んじたり。此躰操を課する趣意は、前にも注意せし如く、スバルタと違ひ、人間活動力の發達の必要なる根據として注意せられたり。音樂は、之をパレストラ又はギ

ムナジウムにて學ぶものにあらず、主として私塾につきて學ぶものにして、唱歌と箏を彈ずることゝを教ふ。初めには耳を慣し、次に喉を練り、手を練り、進んで調音の理に及べり。此音樂を課したる趣旨も、スバルタと同じからず。スバルタにては、唯之を神を讚美し、勇壯の氣を鼓舞するものとして課したるが、アゼンスにては、正しき感情を養成し、兒童の人柄の上に、善と美とを現はす爲めの必要なる教科としたり。文典は、初めに字母を教へ、次に其結合抑揚より朗讀法に及び、其間に言語の學理的説明を與へたり。教科書としては、ホーマー、ヘシオッドの詩、イソップ物語、及びソロン^{ソロン}の法律を用ひ、是等は何れも知力道德の養成に缺くべからざる者とせられ、ホーマーは殊に重んぜられたり。此文學的の修養、亦これスバルタと違ひたる所にして、アゼンス人の特色と見るべく、之によりて以て、アゼンスは歐洲文學の源泉となれり。習字、美術は之を天文學の中に附屬せしめて、僅に其初歩を教へたり。其他數學、天文學、物理學、修辭學、哲學の如きは、教育の課程として皆私塾にて教へたり。

パレストラ及びギムナジウムの長は、毎年一回人民より互選する所にして、ギムナ

ツウの長は、之を體操所長 (Gymnastarch) といふ。此外ギムナツウムには、行儀監督者と衛生上の注意を爲す者とありき。而して其教師につぎては、體操の教師はギムナステス (Gymnastes) といひ、音樂の教師はシサリスト (Citharist) と言ひ、文典の教師は之をグラムマチステス (Grammatistes) と言へり。前にも言へる如く、音樂文典等の學科は私塾にて教へし所なるが、體操は公立のバレストラ又はギムナツウムにて教へ、而して此ギムナツウムには、庭園、廊廓、大廣間等ありて、諸神諸勇士の像を以て美しく獎飾し、此所にては體操を習練するのみならず、同時に社交の中心とし、アゼンス人は、成丁に至りし後といへども絶へず此所に入らせり。音樂教師、文典教師には、學校を有せしものありしも、多くは一の小さな塾を有し、中には天幕を張りて教授し、甚しきは街頭青天の下、石に踞して兒童を身邊に集めて教授し、雨降れば課程を休みたる者ありきといふ。教授の時間は文典の教授は大抵早朝、體操は午後にして音樂は其間に隨意に之を學べり。

是等の教育は、多くは自由市民に限りしが、アゼンスは其政體よりして民主的なるだけに、自由市民の外、實業者、労働者の子弟なども自然體操場や音樂文典の私塾に遊びき。奴隸に至りては、全く教育の恵に與らざりき。要するに、其教育の及びし階級、スバルタの如くには嚴重ならざりき。

女子の教育は殆んど等閑に附せられ、スバルタとは全く反對の觀を爲せり。これ婦人の智力修練を爲すは、やがて其淑徳と優美とを損ふ所以なりと信ぜられたるがゆゑなり。

第八節 アゼンス人の教育理想 以上アゼンス兒童の教育狀況を述べたる所に、略々アゼンス人の教育の理想を伺ふことを得るが、之を約して言へば、美なる身體に美なる精神を宿さしめむこと、これを主要なる目的とせし所にして、此目的は一方には體操を課し、他方には音樂と文典とを獎勵して其知と情とを練ること、依りて達せらると思惟せり。アゼンス人は、實に美といふ點に重きを置きて、之を善と同一視し、善美兼備の修養ある人を作るを教育の主要なる目的とし、修養といふとに非常の重きを置けり。此點より、アゼンス人は、修養の爲めに教育を受くるものと、糊口の爲めに教育を受くる者とを嚴重に區別し、前者は自由市民の學ぶべき精神にして、後者は實業者及び奴隸輩の務むる所とし、所謂學問の自由を唱へて、

文雅教育の眞義を發揮せり。學問既に自由市民に取りては糊口の資にあらず、又實利の爲めにあらざるを以て、アゼンス人は體操にても、音樂にても、文典にても、其達人藝人たるを要せず、唯依りて以て其品性の修養に資するを以て足れりとし、學問を實利に關係せしむることを非常に攻撃せり。詭辯學派が、アゼンス市民の嫌惡を受けたる主要の原因は其束修を收め月謝を取りたる點にありき。而して其學問を以て品性の修養に資すとは如何なるとなるかと言へば、修養を積みたる者は内心堅固、思慮常に健全にして、容易に外物の爲めに動かされず、始終欣然として樂む所あるを意味しき。アゼンスにありては、かく善美を盡せる市民を養成し、アゼンスをして希臘全國の花たらしめむと力め、アゼンスは遂に希臘の花たりしのみならず、廣く世界文化の上に非常なる影響を及ぼせり。今日の希臘文學とし、希臘哲學とし、残り、今日猶世人を動かしつゝあるもの、かゝる教育の結果なり。而して希臘人の彫刻の今日に残れる者を見るに、顔容圓滿、身體調齊實に人としての圓滿なる相を現はせるは、以て如何に、其心身圓滿の人を作らんと志したるかを見るに足るべし。之を要するに、アゼンス人の教育の理想は、之を社會的の方面より

見ればアゼンスをして希臘全國の花たらしむるに足る國民を養成せむと力め、之を個人の方面より言へば、心身の相調整して圓滿の發達を遂げ、高尚なる品位を有する人を作らんと力めたるものと見るべし。

第九節 アゼンスの哲學者 アゼンス人の此教育理想を一層明瞭に掲げ出し、自らアゼンス人を教育して其文化を進め、其教育を高めたる三人の哲學者あり。ソクラテス、プレト、アリストートル是れなり。此三人は哲學發達の上に非常なる影響を及ぼし、のみならず、又教育の發達にも偉大の影響を及ぼせり。但し此三人が、アゼンス人の思想の教導に力を盡したるは、希臘治世の第二期より第三期に及べる間と知るべし。

第十節 ソクラテス ソクラテスは、紀元前四百六十九年アゼンスに生れぬ。父はソプロニコスと言ひて彫刻を業とし、母はフィナレーテと言ひて産婆を業とせり。家貧しかりしかば、父母は氏に一通りの教育を受けしめたりと傳ふれど、其十分ならずりしは明なり。初めの間は父の業を繼ぐ爲めに彫刻を習ひしが、幸に此町の富豪クリト、といふ人、氏を此苦境より救ひ出して勉強せしめしかば、氏は一

般の教育の外に、數學、物理學、幾何學の大體を伺ひ、詭辨學派の者につきては、知識を研き、又先賢の著書を讀むことを得たり。ホーマーの詩は殊に其愛讀せし所なりき。

氏が前半の生活につきては、ボチディア地方の戦に出で、大に武勇を現はし、此間屢々艱難に堪へたること、後に希臘の有名なる政治家となりしアルシピヤデスといふ少年を重圍の中より救ひて、己が得べかりし感狀を之に與へたること、アゼンス共和政府の會議の席に列して、己が所見を任せざりしこと、及びクザンチックといふ怒り易き婦人を娶りて三子を擧げしことなどの傳説あるのみ。

氏が教育に立ち障るに至りしは、四十歳前後、デルハイの神殿の宣託を受けたる時にあり。曰く、ソクラテスは人の中の最も賢き者なりと。氏は平生己れの心の中に神の聲ありて、吉凶禍福を告げ知らせ給ふと信せし位に、敬神の念厚かりければ、此宣託を受けて不思議に感じ、若し己れ人の中にて最も賢きものならば、今アゼンスの町にて賢人と言はるゝ人に劣ることあるべからずと思ひ、直ちに名高き人々の許に行きて色々の事を問答するに、皆氏に言ひ込められ、一人も相手となり得る

者なく、平生物議を以て任せるもの、實は何物をも知らざる似而非者なることを發見せり。氏屢々繰り返して言へり。余は余が何物をも知らぬといふことを知れる外には何物をも知らず。さりながら、多くの人は此事すらも知れる者少しと。氏はかくて世人が案外無知なることを發見し、さらば己れ之を教育し遣らんと、是より二十年一日の如く教育を以て己が任となし、晨より夕に至るまで、ギムナシウムや、市場や、職工場や、店頭にさまよひて、見る人毎に談論を試みて之を教育し、就中青年を愛し、自ら、青年の戀人と稱せり。氏が容貌は醜穢にして、奇僻に富み、常に跣足にして泥沙を踏み、一領の弊衣を纏ひて、アゼンスの町より町へとさまよひ、其容貌の穢醜なるに似ず、清朗にして、冴へ渡る強き調子の言葉もて、老若男女の嫌なく問答を試みたり。氏が説話は、實に人の腸に浸み入り、時には人をして大笑せしめ、時には涙襟を濕さしめしが、殊に其天才の嘲弄に上る時は、何人も之に敵し得るものなかりき。當時アゼンスの町を距る二十哩許の所に、メガラといふ町あり。此町アゼンスと、怨を構へ、メガラ人のアゼンスに來るもの、命を取らるゝ掟なりしが、其町のユークリッドは、夜女装して氏の許に來り教を受けたり。實に氏の教育に依

りて人と爲りたるもの幾許ありしか知るべからず。

氏が人を教育するや、先づ始むるに問答法を以てし、自ら愚者の位置に立ち、次第々々に問答して之を追窮する結果、遂に向うの人を無知と悟らしめ、さて無知と悟りたらば、是より共に真正の知識に達せんとて之を導けり。故に氏の間答法には二重の方面あり。其一面は、氏か其天才の嘲弄的辯舌を以て、向うの人を辯難攻撃し、遂に今まで知れりと思ひしことも、實は知らざりしことなりと白状せしむ。此點より言へば、氏の教授法は破壊的、消極的にして之を名づけて、ソクラテスの反問法 (Socratic orony) といふ。然れども、氏はかく破壊し了るものにあらず、更に一步を進めて他方面に向ひ、是迄知れりと思ひしとも、實は知らざりしとなれば、是より共に真正の知識に達せんとて、色々の事例を引き來りて、次第に其心を引き出し、導き立て、自ら其事に關する一の纏りたる知識、言ひ換ふれば概念、定義に達せしむ。之を名づけて産婆術 (Maieutics) といふ。氏此教授法を言ひ現はして曰く、余は知識を與ふるにあらず、知識を産ましむる産婆なりと。此方法は、實に教授の眞諦に達せるものにて、氏を開發主義の祖先とするも此故なり。

第十一節 ソクラテスの知徳同歸論 ソクラテスが、弊衣徒跣、二十年一日の如く右の間答法を用ひてアゼンス人を教育したるは、一は其抱く知徳同歸論より出で、一は其力をもてアゼンスの腐敗を救ひ、アゼンス國を新なる基礎の上に建設せんとする愛國の精神より出でたり。こゝに先づ其知徳同歸論の根據を尋ねべし。

ソクラテスは其以前の哲學者が、天然自然を攻究せしに反し、一に人事を攻究せり。其弟子クセノフォン記して曰く、ソクラテスは世界の如何にして生じたるか、如何なる法則にて運行するかを思考せず、却りてさる思考を爲す人々が、自身人間の事につき、幾何の事を知れるかを詮索せんと力めたりと。

ソクラテス、既に當時の人が、人間の事につきて、何事をも能く知らざるを悟り、多くの人はいれの無知なるを知らず、得々として知ある者の如く思へるを憂ひ、自らも亦明白なる知識を有せざるを感じ、常に研究的態度を取り、希臘古來よりの格言「汝自らを知れ」を以て學問の第一歩とせり。人も我も能く考ふれば、知識言ひ換ふれば明白なる意識なくして事を處するゆゑ、事々物々失敗と誤謬とに終る。其適々成立するは僥倖のみ。故に吾人は須らく明白なる知識を有し、世の俗説の如何

に拘はらず、自身の悟れる所に依りて行爲せざるべからず。自身に悟れる所の知識に依りて身を處するに至り、始めて眞の徳行を爲すことを得べし。この故に、徳行の本は先づ知見を開くにあり。徳の何なるかを明知するにあり。知見判断なき行爲は盲目の行爲にして、畢竟善惡の行は、知見の明なると明ならぬとに本づく。人の惡を爲すは誤りたる判断よりするが故にして、人誰か知りつゝ自ら惡を爲す者あらむや。其知りつゝ惡を爲すといふもの、實は猶其知見の明ならぬ所あるなり。眞に徳をすれば直に徳を行はざるを得ず。この故にソクラテスは、徳は知なりと言へり。

こゝを以て、知見は唯に徳を修むるに必要なものみならず、知見あらば誰しも徳を行はざるものなし。徳は吾人に取りて最上のよきもの、人は常に其よきものを求めつゝあれば、苟も此最上のよきものを知らば、之を行はざる筈なく、之を取らず、又誤りて之を爲すは、畢竟これ無知なるが故にして、無知は即ち不徳の本なり。人は知見明なれば徳行自ら修る。此故に、徳は教ふべく、又學び得べきものなり。言ひ換ふれば、人を導きて之を徳に進ましむることを得べし。教育こゝに於て必要あり。

り。教育の効力は、無知にして惡を爲さんとする者を轉じて、明知にして徳ある者と爲すことを得。而して教育の目的は明知にして徳ある者を作るにあるなり。氏はかく知見を尙ぶあまり、知りつゝ詐るか、或は他の惡事を爲すものは、知らずして之を爲すものよりも勝れりとの奇言を吐くに至れり。

斯くの如き知見ある人世に立つに至り、世は始めて開明を來す。ソクラテス此希望を言ひ現はして曰く、知者とは明白なる判断力、完全なる記憶力を有し、有用の知識を持つる人の謂にして、人若し其知れる所を能く牒認し、人間につきての諸の知識を活用するに至らば、斯くの如き人は、啻に其身に幸福を享けて能く一家を治むることを得るのみならず、又他人をして幸福ならしめ、隨ひて一國を隆盛ならしむ。ソクラテスは、此くの如き人を作りて以てアゼンスを再興せんと志したるなり。然るにアゼンス當時の状態は如何。

第十二節 アゼンス當時の状態 當時アゼンスは、ベルシャ戦争に光榮ある勝利を得てアゼンスの全盛を來し、所謂「ペリクルス時代」とはなれり。此間に、政治家、武將、文人、美術家輩出し、實にアゼンスは、希臘全國の花として、是迄になき繁華を來し

たり。されば何時の世にもある如く、繁華の極は華奢風流に流れ、人々唯外觀の美に聘せて、名譽利得に走り、アゼンスの運命は、恰も風前の燈の如くなりき。而して猶此輕薄の風を助長したるものを、實に當時の詭辯學派となす。詭辯學派の原語は知惠者の義にして、アゼンスの交際社會に立つものに、政治、經濟、兵事、外交、文學、哲學、物理學、數學などの知識を、月謝を取りて教へたるが、其首領プロタゴラス（紀元前四百四十年頃榮えき）知識論上の懷疑説を出すに至り、其餘波天地自然の事を分らずとするのみならず、人事までも確實普遍のものなしとして破壊するに至れり。プロタゴラス、知識論上の根據は、「人は萬物の標準なり」といふにあり。其心にいふ、吾等か外物を知覺すといふは、唯外物が吾等の知覺に觸れたる時の状態に外ならず。吾人の感官の状態若し變ずれば、知覺は從つて變せざるべからず。故に吾人の知識と稱する者は、唯外物が吾人の感官に影響する時の關係の上に存し、萬古不易の眞理といふが如きものなしと。しかも氏は此懷疑説を、唯自然界の範圍に限りしが、其徒ゴルキヤス（紀元前四百二十年榮えき）に至りては、之を人事に應用し來り、更に其末流に至りては、天然の法則と人事の法則との區別を立て、天則は變らざ

るも人則殊に法律や道德は人の隨意に定めたるものゆゑ、恣に之を變ふるも妨げずとし、強者の權利といふことを唱へ來りて、強者は何を爲すも妨げず、個々人は獨らく其一時々々の欲望を充すことを爲すべしとの暴論を主張し、斯くの如き暴論を辯に任せて人に傳へ、一の輕佻なる學會を爲してアゼンスの腐敗を助けたり。ソクラテスは、アゼンスの此腐敗を慨し、又詭辯學派の爲す所に慍たらず。決然起ちて之が救済に任じ、人の知識は詭辯學派の言ふ如く、主觀的、一時的のものにあらず、客觀的、普遍的のものにして、人の人として行くべき大道は自ら定まれりとし、先きに擧げたる産婆術を以て、此客觀的、普遍的の知識を産ましめむと試みたり。ソクラテスが其問答法の消極的、破壊的の方面に於て、反問法を取る所は、能く詭辯學派の爲す所に似たれど、其積極的、構成的の方面に於て、産婆術を取る所は、即ち詭辯學派に反抗せる所に於て、之に依りて以て、當時の人の一時の欲望に驅られ、一國の法律命令を無視するが如き輕佻なる風を矯正せむと計りたり。詭辯學派の精神を汲みて、しかも其弊を救はんとせしソクラテスの苦心、實に經營慘憺たるものあり。しかも、ソクラテスはアリストファネス一派の者よりは、詭辯學派の一人と思はれ、

之が氏を罪に落す一原因とはなれり。

第十三節 ソクラテスの最期 ソクラテスは、斯くして當時のアゼンスの腐敗を慨き、詭辯學派に抗して、其倫理説を立て、之を以てアゼンス市民、殊に其青年を教育し、依りて以てアゼンスを救はんとし、一の學校は持たざりしも、到る所、逢ふ人々を教育して此類敗を支へんとせしが、歲月を重ねるに従ひ、氏の人物を慕ひ、其教を信ずるもの多くなり、自ら一の學風を形造るに至れり。これもとより氏が好みてかゝる學風を起したるにはあらず、徳の自ら人を化せしなり。然るに紀元前三百九十九年、氏年七十歳、心身壯健、人を教へて倦まざる時に當り、保守主義を執れる一の年少詩人メリトス、訴狀を具してソクラテスを訴へたり。曰く、ソクラテスは第一に國教を信せず、第二に新なる神を唱へ出せり、第三に青年を腐敗せしむ。國法を案ずるに宜しく死に處すべしと。

此三個條の告訴は、唯ソクラテスを罪に落す口實となりたるのみにて、其原因は氏がアリストファテース、メリトス一派の保守主義に抗し、其一派のものよりは、寧ろ詭辯學派一流の者と誤解せられたるに出で、又氏が當時アゼンスの政治が專横に流るるに、其選舉法は公平ならず、間々惡しき市民が國政に與るを以て、氏は貴族主義を取りたるにはあられぬど常に、其政治を批難したると、又一つには、例の反問法を以て、遠慮なく人を苦めたる眞意が、能く人に分らで、氏を慕ふ者の外は、却りて嫌惡の念を發せしめたる等の諸の事情より出でしか如し。現にメリトスを助けて氏を訴へたるアニトスなる人は、平生詭辯學派を仇敵の如く思ひ居りたる者にて、其詭辯學派を惡むの餘波、ソクラテスをも亦其一流と解して訴訟を成立せしむることに盡力せり。ソクラテスの死は、一は詭辯學派の罪を自身に負ひしものなり。

然れども、此口實となりたる三個條が當時の人に承認せらるゝに至りたる故なきにあらず。ソクラテスは、第一に希臘の人が多くの神々を唯外形に賜せて崇拜するとは反し、寧ろ唯一の全知全能なる神が此世界を支配し、此神は亦自身の心の奥に宿りて萬事を指揮し給ふと信ぜり。而して氏が當時の青年を教育せし方法は、一度其信ずる所を破壊して、更に新らしき道理發見の途に上らしむるに、あるを以て、中には疎放に流れ、破壊的傾向を帯びたる徒もなかりしにあらず。其教へ方如何にも青年を亂暴に導く如く取られたるも、全く跡方なきにはあらず。此故に氏

は希臘の神々を崇拜せざりしにあらず、又敢て青年を腐敗せしめしにあらざるも、偉人の心事は俗流之を解すること能はず、滔々俗流を以て満ち居るアゼンスの政府は遂に氏を審問に附せり。氏が希臘の國教を輕蔑せしにあらず、又強ひて新なる神を唱へ出したるにあらず、而して又青年を腐敗せしめしにもあらざるとは、氏が死後クセノフォンが、氏を辯護して其真意を明にする爲め書きたる「記念録(Memoria-bilia)」の第一章と第二章とに明なり。實に氏は萬物の本體を認め、良心の光を覺し、今日言ふ開發主義の教授法を取りたるため、それ等眞理を主張する犠牲となりて國家の罪人とは訴へられたるなり。

氏は法廷に出で、己が所信を述べ、告訴の無法なることを示して毫も憐を請ふの意なく、友人の切に心配して辯護せんといふ者ありしも、眞理は最後の勝利者にして、一時の辯護は畢竟天意を無みするに過ぎず、萬事一切天意に任すべきのみとて己を屈せず、爲めに始めは氏を左したる罪に落さんとの心なかりし裁判官も、投票の際同情を寄せず、其結果遂に氏を死刑に宣告するに至れり。

氏が死刑に宣告せられたる日は、會々希臘の國際日に當り、其三日間は死刑を行は

ざる國法なるを以て、氏は二日を友人故舊と共に談笑の間に過し、舉動毫も平日と異ならざりき。死刑の日、クリトール早く入り來り、逃獄を勸む。氏之を退ぞけて曰く、余が罪狀假令冤なるも國法を蔑如することあるべからず。國民としては何處迄も國法に従はざるべからずとて、こゝに義務論を爲せり。プレトールの書けるクリトールは此論を書きしものなり。其夕いよ／＼毒を飲むべき時に當りても顔色變せず、プレトール始め其他の門弟に對し、精神不減論を爲し、門弟の流涕哭泣する間に、クリトールに向ひ、エスキュラピウスの神殿に、病氣の平愈を祈り、病愈えなば鶏を捧ぐべき御願を掛け、今迄之を果さざりしゆゑ、之を捧げくれよと遺言し、從容として死に就き、所謂アゼンスの悲劇は了りぬ。

氏死して氏の精神は死せず、幾多の門弟は其志を繼ぎ、就中プレトールに於て希臘哲學の花を開けり。クセノフォン、ソクラテスを賛して曰く、神には敬虔にして毫も不正の事をせず、正しく判断して誤ることなく、節制にして克己、之をすべての人類の最有徳にして最も幸福なる人といふも不可なることなし、若し氏に比すべき人あらば、之を我が前に示し來れど。

第十四節 ソクラテスとプラトーン ソクラテスの弟子にアンチスセテス、アリス

テ、アス、ユークリット等の名ある弟子ありたるが、プラトーンは其中にて最も能くソクラテスの思想を繼承せしものと認めらる。

プラトーンは二十歳の時ソクラテスの門に入り、其後八年間、ソクラテスが毒殺の刑に逢ふまで従ひき。プラトーンが如何にソクラテスに遇せられたりしかば、唯友人の如く扱はれきといふ外、記録の微すべきなきも、しかもプラトーンが其講話の中に、屢々ソクラテスを主人公として之を賢人の十全なる代表者の如く書けるを見れば、如何に其影響の強かりしかを知るに足る。但しソクラテスは社交的人にして其攻究せし問題は、主として倫理に限られしも、プラトーンは沈鬱の人にして詩趣を有し、あらゆる天地人生を其理想的の立脚点より説明し、唯心論の祖先となれり。ソクラテスが主として倫理問題に注きたる思想を、プラトーンは繼承して天地人生のすべてを解釋し盡さんと試みたり。

第十五節 プラトーンの傳 プラトーンは本名をアリストクレイオスといひ、プラトーンは其綽名なり。氏が額の廣かりしより、躰操教師、廣濶を意味するプラトスといふ

言葉を取り來りて氏をプラトーンと呼びしより、此名却りて本名の如くなれり。紀元前四百二十七年アゼンスの町に生れぬ。父はアリストンと言ひ、母はペリクシオテといひ、ソロンの後裔なり。傳説に依れば、ペリクシオテは、アリストンと結婚の約は成り居りしも、未だ共に家を爲さざりしが、希臘の文學の神なるアポローがアリストンの夢に現はれ、ペリクシオテは神の子を宿せるゆゑ、結婚を猶豫すべき宣託ありて、其中にプラトーンは生れきと。

氏の家は古き門閥にして富有なりしかば、父母は出來得る限り完全なる教育を與へたり。躰操も學び、音樂も學び、殊に數學をよくし、かねて詩をも作れり。其一族は皆勢力ある位置に立ちしかば、氏が政治上に位置を得ることは容易なりしも、其二十歳に及び、ソクラテスの門に入るに至り、哲學を研究する興味を起し、遂に一身を之に委ぬるに至れり。

ソクラテスに従ふこと八年、其刑に就きしより嫌疑を避け、メガラに遊びて同門の人を訪ひ、キレテ、エジプト、マグナグレシヤ及びシ、リ島に遊び、廣く各國の文明に接し、名高き人々に逢ひて其知見を廣め、四十歳にして再びアゼンスに歸れり。

アゼンス好學の青年、氏の名を聞きて教を乞ふ者群集したりければ、氏は父より譲られたるアゼンス町端れの別荘に、アカデミーとして知られたる學校を開き、こゝに其徒に教授することゝ書を著すことゝを務とし、其書三十五冊ありて今に残れり。氏が此學校にて教授せしものは、其辨證學即ち其哲學にして、門に題して「幾何學を學びたる者にあらざれば門に入ることを許さず」と言へり。こゝにて氏は一切政治上の係累を避け、唯二度程シ、リーの施政を助けむ爲め旅行したる外は外に出でず、靜に青年を教育するを以て樂とせり。其徒學者の中には男裝したる婦人も交りきといふ。「隠れなき小河のさゝやくが如く、夜もすがら靜なる琴の音は眠れる森に響き渡りぬ」と當時の詩人は此學校の面影を寫せり。晩年其弟子アリストートルが、此學校に騒動を起したることありし外は、絶えて此學校の平和を破る者なく、紀元前三百四十八年に、八十一の高齡を以て或宴會の席にて眠れるが如くに逝きぬ。遺骸はアカデミーより程遠からぬケラミクスの墓地に葬られぬ。氏容貌重々しく、額は廣くして皺多く、肩は聳え、嘗て一度も笑ひたることなく、プレトリーの如く苦しとは當時の諺の如くなりき。氏はソクラテスと同じく時人に誤

解せられしも、其崇拜者よりは「神の如き人」と言はれたり。嘗て一人の氏に氏の事を惡しざまに言ふ者ありと告げし者ありし時に、氏は言ひき「關することなかれ、余は當に世人が其如きことを信用することなからむ如き高尚の行を爲すべきのみ」と、以て其君子の人たりし一班を伺ふに足るべし。

第十六節 プレトリーの共和國 ソクラテスは、一の書も殘さず、一の學校も建てざりしが、プレトリーは教育に關して二つの書を殘し、自らはアカデミーにて哲學を其徒に教授せり。氏が如何なる精神にて此アカデミーを教へたるか、又氏が如何なる教育上の思想を有せしかは、氏が著書「共和國」(The Republic)と「法律論」(The Laws)とに明なり。中に就き、共和國最も明に氏の意見を現はせり。否これ氏の意見と言はんより、寧ろアゼンス人の教育理想を最も極端に描き出したるものなり。此書アゼンス當時の教育には左したる影響を與へざりしも、長く後世に其感化を傳へたり。

氏は此「共和國」に於て、極端の國家主義を執れり。氏謂へらく「國家は正義を伸ばす所の重要なる機關なり、國家なくんば道義は施さるべからず。個人々々の道徳も、

それ自身にては完全なること能はず、相寄り相助けて其道義の完からんことを國家に求めざるべからず。國家既にかく正義を伸ばすべき機關なりとすれば、其國家に屬する民をして、此目的に一致せしめざるべからず。教育は即ち其民を率ゐて此目的に協はしめんとするものなりと。

此國家の階級は分ちて三つと爲す。施政者の階級、軍人の階級、及び勞働者技術者の階級是なり。此中教育を要するは第一第二の階級にして、第三の階級の者には唯通商の道を知らしむれば足れり。道徳に於ても第三の階級の者には主として感覺的欲望に對する徳即ち節制を軀せしむれば可なり。第二の階級の者に至りては之に勇氣を加ふるを要し、第一の階級の者に至りては更に之に睿知の徳を加ふるを要し、かく節制勇氣睿知の徳を具せる結果として正義の徳を生じ、すべて此四徳を有せる者國政を執るに至り、國家は始めて正義を伸ばす機關となることを得。プレトリーの共和國に於て政を執る者は、政事家にあらずして、實に此四徳を具へたる哲學者ならざるべからず。

施政者及軍人の階級の者の小供生るゝや、直ちに共同の養育場に入れられざるべ

からず。而して此共同の養育場にては、務めて母が其子を見知ることなからむやうの注意を取らざるべからず。これ蓋し家を思ふて國を愛せざる如き念を起さざらしめむが爲めなり。

是等幼兒の教育につきては、氏は主として身體を最も美はしく發育せしむるやうにすべしとし、最初二年間は、之を襁褓の中に包み、三年に及べば、抱きかゝへて運動せしめ、恰も船に乗れるが如き状態にあらしめ、又力めて新鮮の空氣を呼吸せしむべしとせり。而して此間に精神の發育にも留意せざるべからず。兒女は此時期に於て諸印象を受納すること極めて深きものなれば、之を寛にするに過ぐべからず。しかすれば怒り易く過敏となり易し。さりどて又之を嚴に過ぎしむべからず。嚴なれば畏縮して奴隸的恐怖を懷き、其心情を快活ならしむることを得ず。故に兒童に成るべく苦痛を感せしめず、身體精神共に順當に發育せしめむことを計るべし。

三歳より六歳までは、兒女に許すに遊戯を以てすべし。遊戯は兒女の自然に好む所にして、之に依りて以て其子の傾向を察することを得べし。即ち將來の建築家

は木片を弄び、將來の畫家は畫を描くを以て、其將來の生活を導くに大なる助を得。殊に兒女は遊戯に依りて自ら學習に慣れ、之に面白味を感ずるに至り、又遊戯に於て、戰爭や地理に關する知識を得、猶又細工することに依りて、目と手との感覺を練るのみならず、人柄の如きも、遊戯の間に自ら之を形ち造くることを得。即ち規則正しき遊戯を爲さしむれば、兒女は自ら將來規則正しき人となる。此故に遊戯は務めて之を獎勵すると共に、又能く其遊戯の種類に注意して、惡しき遊戯を爲さしめざるべく、惡しき遊戯を爲したる後之を罰するが如きは、抑々教育者の不注意なり。罰の如きは兒女が長者を輕蔑し命令を犯したる時のみ之を課すべく、要は樂しく且つ正しく生活せしむべし。此時期の徳育としては、教育者の威嚴と模範とに依りて之を爲すべく、廉恥及び名譽の感情は成るべく、幼少の時より之を開發せざるべからず。猶此時期の兒女には、有益なる小話を話して其好みに訴へ、暗々に歴史上の考や其社會に關する知見を與ふべく、又田舎や神社に遊ばしむべし。滿六歳となれば、男女兒各々教育所を異にす。學科は共に音樂、躰操の二科なるも、之を課する年齢は同じからず。先づ男兒より言へば、男兒は年齢十歳に至るまで

は、主として躰操を教授す。躰操は角力及び舞蹈の二つにして、共に戰鬪的練習と結合すべきものとす。十歳に至れば、文法教授の基礎として、讀み方書き方を教授す。音樂は更に十四歳より十六歳の間に教授す。プレートーは、音樂と躰操とを重んじ、而して其躰操を課するは、精神に力と完美とを與ふるにありとして曰く、身躰の修練に對しては、若き者は先づ道德の力を高むることを目指すべし。若しこゝに人あり、單に躰力を練ることのみ心を注ぎて、毫も音樂的の修練を爲さざらむか。恰も野獸の如く無學と疎暴とに流れ、優美と儀容とに欠くる所あるべしと。されば氏の共和國にありては、躰力の弱きものは殆んど之が生存を許さずといへど、又他方に音樂的の教育を以て人間を高尙にせざるべからずとせり。音樂につきては、氏は最も重きを置き、精神は美を通じて善に上るとの見を持して曰く、音樂の節調と調和とは、深く精神の底に徹して之を感化すること最も深し。人之に依りて正當に教育せらるゝ時は、只管美なるものを賞翫するに至るべく、かくして永く此美なるものを賞翫するに至れば、自ら之に薰染して有徳の人となるべしと。希臘人の善美混同の思想は、氏に於て最も明に之を伺ふことを得べし。氏既にか

く音楽に重きを置く所より、之に合する歌の詮索を嚴重にし、情詩の最も善きもの
 を取るべしとせり。要するに氏は身体には体操を配し、精神には音楽を配して心
 身の圓滿なる人を作らんとしたるなり。

十六歳よりは更に數學と天文學とを學ばしむ。氏は數學天文學は軍事の教育に
 も大關係ありとし、數學をあらゆる學問の中にて最も重なるものとし、謂へらく、數
 は人を導きて事物の本體に達せしむ。即ち感覺的の諸現象より出立して、善と眞
 どの理想に達せしむと。氏は猶其中にて幾何學を重んじて曰く、幾何學は永劫な
 る存在を自覺せしむる最良方便なり。而して又科學的頭腦を作る必修科なりと。
 天文學につきては、天體の運動を論じ、最も精密なる數學的關係を以て天體の運動
 を究むるものなるがゆゑ、獨り戰術、航海術、農業に關するのみならず、又時間の觀念
 を與へ、精神を誘導して超自然の理想に達せしむるものなりと。かくて二十歳ま
 で教育し、軍人は軍務に服せしめ、將來施政家たらむとする者には、更に十年間哲學
 を修むる預備として、一層深く從來の學科を學習せしめ、更に五年間専ら哲學を修
 めしめて、其力を練り、かくて三十五歳に至らば、世間に出で、事務を練習し、五十歳

に至りて始めて國家の施政者となる。蓋し施政者は一國の運命を左右すべき重
 任を負へるものなるを以て、國步艱難の際に處し、激浪の中に弄せられず、以て能く
 國家の目的たる正義を伸ばすべき人ならざるべからず。かゝる人國政を執るに
 至り、衆民互に相融和して、以て正義、言ひ換ふれば善を實現す。アレトール曰く、哲學
 者にあらざれば、眞に國家を治むること能はず、哲人王位にありて國家始めて其目
 的を達すべしと。氏がアカデミーにて教へたる所は、即ち右言ふ哲學にして、之に
 依りて以て賢明なるアゼンスの施政者を作らんとしたるなり。

六歳以上の女子の學ぶべき學科も、亦体操と音樂とにして、体操は身体を強壯にし、
 音樂は感情を養ひ、殊に婦徳を養成すべき價值あるものとせり。而して將來施政
 者の妻たるものには、其子女を教育する上より、其市民を保護する上より、又其夫を
 助くる上より、科學哲學をも學ばざるべからずとせり。

此共和國にありては、結婚は國家之に干涉す。氏曰く、身体精神共に善美に教育せ
 られ、年齢恰好の男女にあらざれば、結婚を許すべからず。これ其良子女を擧ぐる
 こと能はざればなりと。

第十七節 其法律論 今一つ氏の教育意見を書ける、法律論は、晩年の作にして、共和國の如き空想に駛せず。氏は此書に於て、農工商も亦よろしく教育を受くべく、其賢明の者は之を施政者に引き上ぐべしとし、此書の中に名高き教育の定義を下さり。曰く、善良なる教育とは、身軀と精神とに、出來得るだけの美妙と完全とを附與するにありと。而して其教育に對する一軀の考、共和國よりは遙に實地に近くなり、空想の傾少し。

第十八節 プレトールの弟子 プレトールの死後、其甥にして且つ弟子なりけるスピュッパスは、八年間其アカデミーに教へ、後之をクセンクラテスに譲れり。プレトールの弟子の數多ありける中に、最も有名なりしはアリストートルにして、其在學中より既に嶄然頭角を現はし、プレトールの死後、自ら一の學校を起せり。アリストートルの學問の仕方は、プレトールよりも實際的にして、プレトールは天より下りて地を見んとし、アリストートルは地上より上りて天に達せんとする趣あり。此傾其哲學はもとより、教育論の上にも現はる。

第十九節 アリストートルの傳 アリストートルは、紀元前三百八十四年、希臘殖

民地のスタキラに生れぬ。父をニコマクスといひ、マセドン宮廷の侍醫たりき。醫學及び自然科學に關して幾多の著書あり。アリストートルが自然科學に面白味を有せしは遺傳なるべく想像せらる。早く兩親を失ひたりしかば、プロクセスといふ親の知人に養はれ、此人更に氏に物理上の知識を與へたり。然るに此保護者死せしかば、氏はアゼンスを見んどの念に驅られ、十八歳にして此都に出で、益々好學の念を高め、家富有なりしかば、高價なる書物を惜し氣もなく買ひ入れて之を讀めり。此時プレトールは、丁度シ、リ島に旅行中なりしかば、之を待ち受けて其門に入る準備を爲し、其歸りて學校を開くや、直ちに其弟子となれり。プレトール一見其非凡の人なることを看破し、其息むなき活動力に感じ、アリストートルは我學校の精神なりと言へり。

プレトールに師事すること二十年、其死に至るまで師弟の情誼を有せり。しかれども晩年此師弟の間に不和起りて、爲めにプレトールのアカデミーに騒動起りきと傳へらる。其原因は明ならぬも、此師弟の性行學說の合はぬが故なりと察せらる。傳説に依れば、アリストートルがプレトールの名聲を嫉み、爲めに忘恩の舉動に及び

しといふも、一概に信すべからず。氏が二十年間、プレトリーの死に至るまで師事し、又其著書中に折々プレトリーの學説を攻撃しながら、常に十分の尊敬と愛情とを以て師の事を記せるを見れば、穴勝ちに忘恩の人なりきとも見るべからず。されば若し此師弟の間に不和ありきとすれば、アリストートルが自身の學説を主張し、一も二もなくプレトリーの言ふ所に従はざりし點を指しゝならむ。

驕りて當時を見るに、當時のアゼンスは、さきに千古の哲人ソクラテスを毒殺せし位の状態なりしを以て、敵國の攻め寄するを聞きても、猶太平の夢を貪り、アゼンスの雄辯家デモステテスが、マセドン王の野心あることを狂氣の如くなりて叫び立てしも、之に應ずるものなく、希臘は遂にマセドンのフィリッパに征服せられ、フィリッパは希臘の王となれり。アリストートルは、父の縁あり、且つ博學の故を以て、フィリッパに召され、其太子アレキザンダーの教育を托せられたり。フィリッパ自ら書を裁し、アリストートルに致して曰く、余に一子あり、余は之を神に謝せざる可らず。しかも單に余に一子を與へられたるが故にあらず、汝の生存中に之を余に與へられたるを以てなり。汝は余が子を教育して以てマセドン王位の承繼者たるに耻ぢざらし

めよと。當時アレキザンダーは、十三歳なりしが、是より力を籠めて此名高き教師は、其名高き弟子に修辭學と哲學と文學とを教へ、其亞細亞遠征に上るまで止まりき。亞細亞遠征の折、氏の甥カリスセテスは、其軍に従ひ行きぬ。アリストートルは其家富みたりしが、上に、プリア王父子より鄭重なる待遇を受けたりしかば、學問研究の方便に不自由を感ずることなく、大王父子は其亞細亞遠征地より、珍らしき博物の材料を送り越しぬ。後に氏と大王との間に、氏の甥カリスセテスを、大王が死に處せられしより不和起り、其交情冷淡となりしが、歴山大王突然の死は、氏が毒殺せし如く傳ふるは誤なり。

氏はマセドン宮廷に用なき身となりしかば、再ひアゼンスに來り、こゝにリセウムといふ牀操場に一の學校を開けり。この學校は、其生徒の數に於ても勢力に於ても、優に他を凌駕せり。氏は午前に成熟せる學生に哲學を講じ、午後に多數の聽衆に修辭學、政治學、哲學に關する學問を平易に講し、かくする傍に、氏は其學生を指導して、共に材料を集め、それ〴〵獨立の研究に従事せしめき。氏が學問の該博なりしは、一は其天才に依るも、亦かゝる研究法の賜なりといふべし。氏が此クセウム

に講義する時は、篤志の門弟を従へ、此學校の續きの並木の間を歩きながら講義したりしを以て、世に氏の學派を「逍遙學派」(Peregrinative School)と呼べり。氏が午前と午後とに講義したりしより、氏の著述も亦一般の者の爲めにせし者と、殊に此學校の者の爲めにせし者との二種に分れたるが、今殘れるは其第二種のものなり。中につき教育に關係あるは、「ニコマクヤン倫理學」と「政治學」との二書にして、氏は殊に「教育に就きて」と題する書を著はしたる由傳へらるれど、今傳はらず。

氏は歴山王に扶持せらるゝこと二十年に及びしが、其突然の死に依り、氏はマセドニ朝廷に關係深かりし故を以て、表面は敬神の念を缺けりと、アゼンス人に訴へられ、將に死に處せられんとせしかば、アゼンスを遁れてユーボア島のカルキスといふ町に至り、三百三十二年の夏、胃病の爲めに死せり。

氏の性行につきては傳ふるもの一ならず、中には其師プレトールと争ひ、又其弟子歴山大王と不和を生じたるなどのことより、非常の俗物なるが如くに傳ふるものあれども、其著書に依りて察すれば、思想の高き所ありしは疑ふべからず。唯其人と爲り、非常に活動的人にして、且つ多方面の人なりしを以て、自ら人と衝突し易く、之をソクラテス、プレトールの二賢に比する時は、其人品の點に於て及はざる所ありしが如し。氏が偉大なることは、實にあらゆる科學の父となりし點にありて、其知識の宏大なることは、唯近世のライブニッツと類を同じうするのみ。

第二十節 氏の教育論 教育を一の理論として研究せしは、プレトールを以て始めと爲すべきも、之を科學的に研究せしは、アリストートルを推さざるべからず。教育の事業を知徳躰の三つに分つが如き、氏の考に出でたるものにして、近時唱ふる社會的教育學の思想も、亦氏が大に主張せし所なり。しかのみならず、氏が此意見は、歴山大王を教化して、大王が世界統一の志を起さしむる本となり、又其リセウムを隆盛ならしめたる本となれり。

氏は教育の目的を國家と人生との二面より立てたり。其國家の方面より言へば、人か其同胞と共同生存を爲すは、自然の性にして、國家は即ち人に此固有の性情あるより起るものなるか、其目的は市民の生命財産の安寧を得るのみならず、完全なる共同生活を爲して、以て市民の善福(Eudaimonia)を完うせしめ、市民共に相一致して、各自の善福を完うすると共に、國家自身の善福をも實現するにあり。國家なく

んば、市民各自の善福は全かるべからず。此故に國家は個人又は家族よりは先きなるものにして、教育は即ちかゝる國家を作るに必要な市民を養成するにあり。「教育は各人同様なるべし、教育は公共の事業たるべし。之を個人又は家族に一任すべからず」。

かくは言へど、氏はプレトリーの如く、人の子の生まるゝや、直ちに之を公共の養育場に入るべしとは主張せず。之を子供の生ひ立つ時の順序より言へば、家庭は國家に先立つものにして、家庭親愛の情は、教育の本たるべく、之を引き離して共同の養育場に送るは、恰も蜜の一滴を多量の水に投ずると均しく、其甘味を失ふべしと言へり。されば氏は教育を以て、七歳までは親の負擔すべきものとし、七歳以後に於て之を國家の手にて教育すべき見を取れり。氏がかく實際の方面より着眼して家庭教育を重んずる所、プレトリーと如何に其考へ方の違へるかを知るに足る。

かくして國家の市民を教育するには、人生其者につきて言へば、如何なる點を目的とすべきか。氏はこゝに教育の目的を人生の方面より規定せり。

氏は先づ人間の發達するには、植物的、動物的、人間的の三段階を経べきものとし、而して其人間生活の頂上は、理性の命ずる所に從ひて、道徳的習慣を積み、善を爲さずには居られずといふ如き點に進ましむるにありとし、斯くの如き人にして、始めて善良なる國家の市民たるべしとせり。此考は、氏が人間を以て萬物の發達せしすべての段階を踏みて其頂點に達せしものとする進化論的の根底より立てし意見にして、此三段階に、略々今日いふ所の躰育、知育、徳育を配せり。尤も之は大躰の區分にして、躰育の養育に注意する時にも、精神の教育に注意せざるべからずと考へたるは勿論なり。

先づ其躰育の發育につきては、氏は醫者の子なりしだけ、綿密に注意し、其注意を其子の生まるゝ前に及ぼし、父母の結婚につきて種々の注意を與へ、五歳までは専ら躰育の發育に注意して何事をも教ふべからずとせり。これ其心を勞するが爲めに、躰育の發育を損ふ恐れあるが故なり。さりとも此間唯子供の躰育を優柔に養育すべしとの意にはあらず。氏は能く之を寒暑に堪へしめ、又之を強健にするため、冷水浴を爲さしむべしと言へり。かくて五歳に至れば躰育の發育を計る傍、其心を啓發誘導することを怠るべからず。此時の教授の材料は、重に談話、昔物語、其

他格言の説明等にして、訓練につきては醜惡なる事物を忌み、懶惰に流るゝを避けしめ、又奴隸と遊びて惡しき風儀を見習ふことなきやう注意すべく、虚言を吐き、廉恥を顧みざるに至らざる如き習慣を付けしむべからずとせり。かくて七歳に及ぶ。此七歳までは前に言ふ家庭教育の時期なり。

男女兒七歳に至れば、家庭を離れ公共の學校に入學せしめ、衆人と一緒に教育を受けしむ。体育は此時に及びても無論必要なり。學科は讀み書き、圖畫、体操、及び音樂の四科にして、數學につきては氏はプラトリーの如く之に重きを置かず。此四科の中、音樂は氏の最も重んぜし所にして、氏は音樂は、心に情熱を與へ、其野卑なる感情を洗ひ去り、同時に音樂の調和に依りて、心に美妙なる調和を得しむるものとせり。德育につきては氏は最も心を注ぎて之を論ぜり。謂へらく德育の要は第一には其自然の傾向を能く指導し、第二に正しき道德上の習慣を付けしめ、第三に其道德上の知見を與へ、道理心に依りて動作せしめ、以て有徳の人と爲すにあり。有徳の人とは道理心の命ずる所に従ひて、正しき習慣を形造り、以て自然に戻るることなき人をいふ。かくの如き人を作ること、これ教育の目的とすべき所にして、教授

も此目的を達するやうにすべく、斯くの如き人にして、始めて完全なる市民たることを得と。かゝる教育を受けて二十一歳に及べば、即ち一通りの教育を終りたるものとす。此上に進みて、哲學、國家學等の研究に入るは、其人の隨意にして、氏が其リセウムにて教へたる所は、一般の教育を終りたる者に限りき。氏は大に習慣を重んじ、習慣は第二の天性なりとの語は、氏が吐きし言葉と傳へらる。これソクラテスに全くなかりし所にして、プラトリーも習慣を重んぜざりしにはあらざるも、アリストートルの如くには強く之を言はざりき。要するにアリストートルに於て教育が餘程種々の方面より科學的に研究せられたる様を見ることを得べく、之をプラトリーに比する時は、其論じ方の頗る異なるを知るに足るべし。

第二十一節 希臘教育の末路 希臘がマセドンに征服せられたる後、屢々同盟を作りて其羈絆を脱せんとせしも、能く効を奏せず。遂にマセドンよりも今一層力強き羅馬の爲めに征服せらるゝに至れり。これ實に紀元前百四十六年の事なりき。此希臘末路の教育としては、唯從來の仕來りを繼ぎて何の見るべきものなかりしが、アゼンスの文化は却りて他地方に其花を開けり。即ちアリストートルの

弟子たりし歴山王の死後、其領地は其將官等の分け取りする所となりたるが、其將官の一人、トレミーの領地埃及のアレキザンドリヤに於て、大にアゼンスの文化を移し植ゑ、所謂アレキザンドリヤの文明を開き、トレミー二世(紀元前二八五年に生れ二四七年に死す)は、殊に心を文藝に注ぎ、博物館を立て、此中に圖書館を置き、其圖書館には一時五十万冊の書を藏しきといふ。而して又此博物館内には學校ありて、哲學者科學者を優遇し、講義を開かしめ、プレトリーのアカデミー、アリストートルのリセウムが、私立大學の基を開きたると對し、一の官立大學の端緒を開けり。此官立大學にて教へたるものは、文法、論理學、修辭學、數學、幾何學、天文學、及び音樂の七科にして、此七科は長く後世に採用せられたり。

第二十二節 スバルタ、アゼンス兩國教育の比較 希臘の教育は上來述べ來れる如く、スバルタ、アゼンス兩國の教育を意味することなるが、此兩國教育の特色につきては、モンテーン(一五三三—一五九二)能く之を言へり。曰く、アゼンスの町に行きては、修辭家、畫工、音樂家に逢へども、スバルタの町にて逢ふ者は立法家、行政家、及び軍人なり。アゼンスにては能辯術教へらるれど、スバルタにては勇敢なる行爲

行はる。アゼンスにては詭辯に乗らず、人の言葉に弄せられざるやう教へらるれど、スバルタにては男らしき勇氣に依りて運命と死とに恐れざる氣象を養ふやう教へらる。要するにアゼンス人は言に務め、スバルタ人は行に務む」と。

第二十三節 希臘教育の後世に及ぼせる影響 希臘は是迄述べ來れる如き教育に依りて其國民を教育し、それ迄になかりし文化を開き、之を後にしては歐洲文化の源泉と呼べるゝに至れり。通例の開化史にありて、近世の文明は、第一希臘羅馬の文明、第二基督教の精神、第三獨逸種族の科學的精神の三つより成れりと主張するが如く、世界の文明、世界の教育を進むるに與りて力ありたる國は、希臘を以て始めとす。希臘の文學や哲學の思想は、今後の教育史に説く所にて明なる如く、其次に來る羅馬に第一に影響し、更に中世紀に其光を發し、近世に至りても希臘の精神は絶えず世界に流れ、今日といへど、ホーマー、ヘシオドの詩や、プレトリー、アリストートルの思想は、今日の人を教育しつゝあるなり。今日歐米の専門學校、高等學校にて、人品を練る必要の材料として希臘語は缺くべからざるものとせらる。希臘國は紀元前百四十六年に滅びしも、其教育の精神は今日猶吾等を動かさしつゝあり。

第二十四節 希臘教育の批評 以上希臘の教育の實際と理論とを述べたる所によりて、茲に其特徴と思はるゝ點を批評し、其如何なる點は取るべく、如何なる點は捨つべきかを見るべし。之を見るには、總論に述べたる所の五つの觀察點よりすべし。

第一希臘の教育を、其風土種族の上より見るに、氣候温和にして人民亦文學的の傾ありしを以て、スバルタはやゝ趣を異にするも、概して希臘の教育は、著るく美といふ點に重きをおけり。希臘にありては、善も美と同一視せられ、美を通ずるにあらざば善に到るべからずと思はれたり。故に教育史上にありて、希臘の教育は一言に之を美的の教育といふ。希臘國民に若し天職ありきとすれば、そは美の福音を世界に傳ふるにありしならむ。此美を重んぜし結果、遂に希臘は世界文化の源泉と呼ばるゝに至りしも、亦他方に實業を輕んじ、文弱に流れ、始めにマセドンに征服せられ、つぎて羅馬に滅ぼさるゝに至れり。

第二に希臘の教育を制度の上より見るに、スバルタとアゼンスとを論せず、一樣に國家主義を執り、教育を以て國家の事業とせり。アゼンスは大に個人の自由を許し、其權利を認めたりしも、しかも猶國家主義を取りて、教育は各人同一に與ふべきものとし、體操場はすべて國立とせり。此思想、近世に至りて、獨逸のフイヒテに現はれ、更に近時の國家學者に現はれ、所謂國家教育の呼び聲を高くし、強迫教育を布かしむるに至れり。しかも希臘に於ては、唯體操場を國立とせしのみにして、音樂文法の教授は之を私人の手に任せ、文學に關する官立學校は、唯希臘の末路の燈とも見るべきアレキザンドリヤ大學に於て、初めて其端緒を開けり。而して、又希臘に於ては、今日の小學校、中學校といふが如き制度は、發達せず、僅にプレトリーの「アカデミー」、アリストートルの「リセウム」は、私立大學の基をおきしを見るのみにして、下等社會の教育は殆んど之を度外に置けり。現にアゼンスにては、二万の自由市民の用を達すが爲めに、四十万人の實業者と奴隸とありたるが、教育は殆んど其少數の自由市民に限られたり。一般人民を洩れなく教育すべき計畫は、蓋し近世の事に屬す。教育は初めは貴族より平民に、富者より貧者に及びしは、各國何れも同様にして、希臘も亦其數に洩れず。

第三希臘の教育を教育學思想の發達の上より見るに、希臘の教育學思想は、頗る進

歩せるものにて、就中アリストートルが、之を心理、倫理、政治の諸方面より科學的に論究したるは頗る注目すべきことなり。而して此アリストートルの教育學思想は、プラトローのと共に、此後長く影響を與へ、今日にても、其說に依るもの少からず。しかも其缺點を言へば、是等の學者の說も、當時の思想にかぶれて、國家以上に出づること能はず、又希臘人の文學的に傾ける所より、是等の學者も、自ら理科實用の知識を教育の教科に入ること拒みし點にあり。世界を眼中に置きて教育を論ずることは、アリストートルにはの見えしも、之は後に説くストア學派と、基督教とに出でしことにして、自然科學を教育に入るに至りしは、全く近世の事なりとす。唯希臘の教育學思想に於て、心身の圓滿なる發達を其理想とし、體操と音樂とを以て此目的を達せんとし、又アリストートルが、殊に習慣を重んじて、德育の要を説きし所など、何時迄も滅すべからざる教育學思想なり。

第四希臘の教育を實際に行はれたる點より見るに、先づ教授の方面に於て、ソクラテスが反問法と産婆術、訓練の方面に於て、スパルタ、アゼンスの體操場に於ける共同教育は、今日猶參考すべき點あり。ソクラテスの産婆術は、今日の最も進歩せる

教授法の源となり、體操場の共同教育、ピタゴラスの寄宿舎教育は、今日英國の如き猶其精神を繼げり。訓練はギョーテが、才能は靜なる中に熟すれども、性格は世の激流中に成ると言ひしが如く、衆人の間に揉ましむるにあり。希臘の體操場に於ては、即ち之を實行せり。而して又人を作る上に、ピタゴラスの如く、寄宿舎にて爲す方法は最も有効なり。唯希臘の教育の實際の缺點を言へば、教授の方法區々にして、ソクラテスの産婆術の外は、殆んど教授法として見るべきものなかりしにあり。第五最後に希臘の教育を教育事業家の點より見るに、希臘は最も教育家に富みたりと評すべし。教育の立法に於ては、スパルタのライカルガスあり、アゼンスのロンあり。其實際の教育に従事せしものには、スパルタのピタゴラス、アゼンスのソクラテス、プラトロー、アリストートルあり。就中ソクラテスの如きは、千古の教育家と言ふべく、かゝる教育家が揃ひも揃ひて出でたりしは、教育史上、十七世紀十八世紀を除きては見るべからず。此點に於ては、是等は希臘教育史に、十分の満足と尊敬とを表せざるべからず。

第一章 羅馬時代の教育

等一節 羅馬の風土人種等 羅馬は地中海に突出せる一大半島伊太利のタイバ
 ー河畔に根據を占めたる都府にして、アリヤン種族の一支族、伊太利種族、主として
 其勢力を振ひ、遂に世界を一統し、所謂拉丁文明を世界に擴げたり。此拉丁文明は
 大に希臘文明の影響ありきといへども、又羅馬の特色なきにあらず。羅馬は實に
 希臘文明を己れに消化して、之を世界に擴ぐる媒介者となりたるなり。従つて教
 育史上にも亦重大なる位置を占む。

第二節 羅馬治世の年代 羅馬は紀元前七百五十三年國を立て、それより中世紀
 の始めまで勢力を振ひたるが、此間を分ちて三期とす。第一期は建國より五百〇
 九年までにして、此間は王政の時代、第二期は五百〇九年より二十七年までにして
 共和政の時代、第三期は紀元前二十七年より中世紀までにして帝政の時代なり。
 此中第一期には、教育史上格別注意すべきことなく、第二期には其種族の性質より、又
 其國を建つる必要上より、尙武的の教育を盛んにし、殊に希臘征服の餘威を以て、益
 々スパルタ風の教育を盛んにし、第三期には、希臘の文明を輸入して、文質彬彬たる
 教育を布き、所謂拉丁文明の光を發したる時なり。教育史も亦此年代に従ひて、先

づ第二期の共和政時代より講じ行くべし。

第三節 羅馬人の特性 羅馬の教育を解せんには、先づ羅馬人の性質を理解し置
 かざるべからず。古代羅馬人は、實に堅固の性格を有し、容易に物に動かされず、或
 點に於ては、殘忍と思はるゝ迄武に走りき。一視同仁の眼を以て世に立つといふ
 が如き同情なく、アゼンス人の如く優美にして文雅の嗜もなかりき。しかも亦武
 を尙ぶ國民の常として、信義を重んじ、廉耻を尙び、己が所信を實行するに強かりき。
 其性質アゼンス風ならずしてスパルタ風に、理想的ならずして實際的に、文學的な
 らずして軍事的に、空想の民ならずして政治法律の民なりき。兵馬の民にしてか
 ねて又法律の民たりしことは、本部伊太利種族が、始め五六千人の團結より起りて
 伊太利全部はもとより、漸次小亞細亞、亞弗利加、希臘、其他北部歐洲の蠻族を征服し、
 希臘といへど見ることを能はざる一大帝國を立て、嚴然世界に君臨したりし事實
 を以て之を見ることを得べし。之を以て、實行的の國民、又政治法律の國民といふ
 も不可なることなし。實に歐洲今日の政治法律の思想は、其源を羅馬に發せるも
 のなり。羅馬人の此特性は、其教育史上より見れば、第二期共和政時代に現はれた

るはもとより、第三期帝政時代に、アゼンスの文化を採用せし後といへども、常に現はれ來り、所謂希臘文明と拉丁文明とは、大に其趣を異にし、教育も亦全く其觀を異にするは、以下述べ行く所にて明なるべし。

第四節 共和政時代の教育 羅馬に於ては、其共和政時代の半頃までは、學校といふものなく、從ひて教師もなかりき。此頃の教師に、即ち父母と周圍の境遇とのみにして、教育は全く躰育と德育、言ひ換ふれば、軍隊的訓練と宗教的訓練とありしのみ。一方には、躰操を勵み、他方には、男女の神々の名を含める讚美歌を歌ひ、併せて羅馬法十二律を誦んずるが、其課程なりき。かくして初めの羅馬人は、最も勇敢に、最も堅固に訓練せられたる國民たる資格を具して、愛國の念に深からむ人を作らんと力めき。羅馬は實に公民的德義、軍隊的德義を養成する一大學校にして、かのアゼンスに於けりしか如く、心身の圓滿なる發達を遂ぐる爲めに、教育を施すといふが如き考は有せず、偏に實際の目的の爲めに人を作りて、其理想的方面には注意せず、其目的全く公民を作らんと志したり。而してかゝる教育を爲すに與りて力ありたるものは、第一家庭の規律、第二親の感化力、第三宗教の力なりき。此三つ相

依りて共和政時代の教育を爲し、爲めに學校も教師も要せざりき。

此時代の羅馬に於て、小供の生るゝや、其父之を抱き上げて其子たることを認め、併せて教育に對し、始終責任を負ふべきことを示す。かくて男兒生れて九日目、女兒は其八日目に命名式を舉行し、親戚故舊を會して宴を張る。然る後其教育は母の任となる。羅馬にありては、父の權力絶大にして、子は之に盲從すべきものとせられ、他方に母は家庭の中心となりて、真心より兒女を教育し、寛嚴其宜しきを得て家庭教育を施せり。母は最も注意して其兒女を外部の悪しき風儀に感染せしむることを拒ぎ、質素、節約、及び適度の徳を養ひ、かねて長者を敬し、神を敬し、國法に従ふべきことを教ふ。家庭の教育は嚴格にして、以上の徳を養ふには、嘗に言葉を以てするのみならず、亦實際の手本を以てし、兒童居る所にては、苟も邪惡なることは一切之を口にすべからずとせられたり。父は未だ嘗て其子と共に沐浴せず、又其子を伴はずしては家の外にありて飲食することなし。家庭團樂の時の話頭に上るものは、先祖の戰場に於ける武勇談、或は其平生の嗜の深かりしことにて、是等は暗々に兒女の名譽心を高め、愛國者にならんとの念を起さしめき。而して又宴會

の席上にては、常に大人が其祖先の名譽ある事蹟を演説するのみならず、之を音樂に併せて奏し、或は之を詩に吟じて、自ら少年の心を感奮せしめたり。宴會散ずれば、年長者は少年に扶けられて家に歸る例にして、此間に何時とはなしに秩序を習へり。此外猶父は其子を伴ひて議院に出席し、目のあたり國の事務を見習はしめ、或は兵營に連れ行きて軍隊の實際を觀察せしめたり。實に古代羅馬人は、子を呼びて「最も麗はしき寶」とし、之が教育には深く心を留めき。

之に加ふるに、羅馬人は敬神の念篤く、其子の始め乳離れするや、一の女神は之に食ふことを教へ、他の女神は之に飲むことを教へ、少しく後に至れば、四人の女神が其兩手と兩足とを取りて歩行を教ふとの、古代よりの傳説を信じ、行住坐臥、神明を敬すべきことを教へられ、言はゞ絶えず宗教の空氣を呼吸して、恐しき方向に向はざるやう教育せられたり。猶此外羅馬立法の本たる十二銅標の法文を誦んじ、是等の法律は幼時より自然に犯すべからざる神聖のものどせられたり。

かくて十五歳に至れば、家族の羈絆を脱して一人前の公民となる。

第六節 此期の教育論者 希臘の文化が羅馬に入り來りて、其共和政時代に新ら

しき傾向を帶ばしめし頃、一の忘るべからざる教育論者出でたり。シセロ是なり。シセロは大に希臘の影響を受けたる人にて、舊羅馬風より新羅馬風に移り行く時の好代表者と見るべし。即ち氏の教育意見の中に、羅馬の地質を、希臘の色もて彩どりたる跡あるを見るべし。

シセロは紀元前百〇六年に生れき。門閥なりしかば、羅馬に於て此時の最もよき教育を受けたり。十六歳より雄辯術及び哲學を研究せり。程なく學問研究の爲めに、希臘及び亞細亞に旅行し、ローヅ島にて、當時有名なりし修辭家アポロニウスに雄辯術を學び、一日其求に應じ希臘語にて演説したりけるに、アポロニウス驚嘆して曰く、シセロよ、御身の藝は實に巧妙に達せり。されど同時に余は希臘に唯一の名殘の榮譽として殘れる此技術、此雄辯が、御身の爲めに羅馬に持ち去らるゝを悲まざるを得ず。かくて羅馬に歸りて高官に上り、遂に羅馬共和政府の議長となりて、大に人民の信任を得、我國の父と呼ばれたりしも、其政敵アントニーの刺客の爲めに虐殺せられき。時に紀元前四十三年なりき。氏は自然と人事とにつきて精確なる知識を有し、正義仁愛の徳を有し、哲學者としても、政事家としても、雄

辯家としても、一家を成し、同時に教育上の意見を有し、其書きし文章は、後帝政時代に至りて學校の教科書となれり。

シセロは、教師に對し、切に公平ならんことを求め、罰の如き決して其情の激せる儘に施すべからずとし、其生徒の天賦につきては、極めて高き考を有せり。謂へらく「人の精神は神より直ちに傳へられたるものにて、誰しも少しく深く省みれば、自身に神の面影を見出すべく、此神の知識を有する所、即ち人間の他動物に異なる所にして、神はすべて知識道德の根原を吾等に與へた。此本然の性を全うする職務これ教育に外ならず」と。此故に教育は最も幼き時より始むべく、遊戯と交際とは兒童をして高尚に且つ聰明にならしむるやうに仕向くべく、長じて少年となるに至れば、記憶力を練ること必要にして、其記憶すべき材料は、希臘羅馬の賢哲や、文學者の作の最もよきものを取り來りて之を暗記せしめ、之を理解せざるにしても、其耳に賢哲の語を叫ばしむべく、更に長じて大人に近づくに至れば、其能力趣味に適したる學科を學ばしめ、或者は哲學に、或者は法律に、又或者は雄辯術に向はしむべく、殊に雄辯術は論理思想、哲學思想を有し、詩人の表出法を知り、悲劇家の語調と

名優の身振とを備ふるにあらずば、學び難きものなれば、能く生徒の人と爲りを見て之に就かしめざるべからずとし、理科につきては、羅馬人の特性を現はし、科學研究の際、祖國、父母、又は朋友が、今危急に瀕せりとの報知を得るも、猶星辰を數へ、宇宙の大きさを測るが如き人あるべきかと言ひて之を重んぜざりき。氏は羅馬人の教育意見を最も明に言ひ曰はして曰く、羅馬の兒童は、國の爲めになる如く教育せらるべく、從つて國家の性質を解し、又其祖先の風儀を知らざるべからず。我國家は其國民の精神、技能、及び理解力のあらゆる力を捧ぐべきことを要求す。こゝを以て、其國民をして最大の才智と最高の徳義とを具して、以て國家に盡す道を知らしめざるべからず」と。要するに、其兒童の特質に應じ、其本然の性を發揮し、以て國家に忠實なる國民を作らんとを其主要なる思想とせり。

第七節 帝政時代の教育 共和政時代の後半、希臘の文化次第に入り來りしより、古代羅馬の特質は次第に變じて、今に親が以前の如く其子の教育に注意することなく、却りてアゼンス人に倣ひ、之を乳母や、ベタゴークの手に委するに至り、又是迄殆んど文學に注意せざりしものが、次第に希臘の文學を採用して、之を學校に教ふ

るに至れり。もとより羅馬人は、實際的の國民なるを以て、是等の文學を研究する精神も希臘とは同じからず、之を以て己の知識を富まし、我が人品を高からしめんとするにあらざ、寧ろ依りて以て政治社會に立つ資格を得んとするにありたるも、兎も角希臘の文學を學ばざれば、恥とするがごとき状態に至れり。而して希臘の文學が羅馬に入りて、修辭學、雄辯術の發達を助け、所謂拉丁文明を生じ、羅馬人の教育理想として、修辭學、雄辯術に上達することに、如何に骨折りたるかの事實は、次に説くべし。

初等學校に於ける教育は、七歳を以て始まる。學校はすべて私立なり。教科は讀書、習字、算術の三科にして、其教師を「リテラトル」と言へり。讀書の際には、發音に大に注意しき。やゝ進めば、平易なる詩人の詩を讀みて之を説明せしめ、又摸範となる如き文章詩句を暗誦せしめ、習字は教師始めに生徒の木版に字形を示して之をたどらしめ、算術は主に暗算を學ばしめて之を實地に役立たしめんと力めき。學校の規律は嚴重にして、從順と適度とは生徒の有すべき主要の資格とせられき。躰罰は到る所行はれ、鞭は常に學校に備へられたり。

初等學校は十二歳を以て終り、生徒は一層進みたる教育を受けんが爲め、「リテラトス」に就く。此時に及びては、希臘語を教へらる。文法は大に注意して授けらる。教科書はホーマー、インツプ、シセロ、ヴァルユルなどの著はし、ものにして、多くは之を暗誦しき。歴史は殊に重んぜられたり。これ希臘に無かりし所なり。作詩法、哲學及び批評法の如きも、亦此の「リテラトス」に就きて學べり。「リテラトス」の待遇は、「リテラトル」よりはやゝ厚かりしも、其塾舎は皆私立なるを以て、概して不潔なりき。中には高貴の人々の家庭教師となれるもありき。

十五歳或は十六歳に至れば、大人の上衣を着け、農業、軍事、政治、法律、雄辯術の如き各種専門の科を選び、各其師を求めて之を學べり。是等は何れも唯學理のみを教へらるゝことなく、皆實地と關係して教へられき。中につき、修辭學、雄辯術は羅馬人の最も好んで修めし所にして、其教師を「レトル」と呼べり。是迄の教育も、畢竟此二科を學ぶ豫備たるに過ぎず。此二科の羅馬に重んぜられたるは、恰も希臘に於て音樂、躰操の重んぜられたると均しく、而して其修辭雄辯といふ中には、あらゆる學問の修養を含め、之を以て最高の學科とせり。此科を教ふるため、政府より一の官

立雄辯學校を開き、クインチリヤンを以て之が教授とせり。これ羅馬に於て公立學校の立てられ官費の教師の備はれたる始めなり。もとより此以前、ヘルヴァ帝は、全伊太利を通じ、費用を取らずに貧民を教育すべき法令を布き、アントニウス、ピウス帝も、亦其皇后の名譽の爲めに一の貧兒院を起し、も、しかも雄辯學校の如く公立にはあざざりき。後に説くクインチリヤンの教育意見は、即ち此時代の教育理想を最も明に表出したるものなり。

羅馬人が斯くの如く修辭學、雄辯術を尙びたるは、一は他國人を征服すると共に、直ちに之に其自國の言語を與へて、以て世界を統一せんとしたると、又一つには政治界に立ちて、其意見を吐くには辯舌の力を借ること最も有効なるを以て、左らでだに實踐的なりし國民は、此實踐的の學科を最も重んじたるなり。羅馬人は世界を拉丁化せんとし、それには言語を以てするを最良の方便と考へたり。これ拉丁文學が、其文法正しく、其表出の仕方明快にして、實に巧妙の域に達せし所以なり。羅馬には未だ博愛といふ考起らざりしも、世界統一といふ思想は、自ら起り來れり。而して此傾向を學說の上より唱へ來りしは、當時の「ストイシズム」にして、此派には

マールクス、オーレリウス帝も屬せり。

第八節 ストイシズム 此帝政時代に、羅馬の思想上に一大感化を及ぼし、羅馬の帝王、名士、武將を其中に網羅したりし學派を、ストイシズムと爲す。此學派は希臘のツェノ（紀元前三百四十年頃生れき）が始めし所にして、一の嚴肅なる倫理觀を以て立てり。謂へらく、此宇宙は一大普遍理性の支配する所にして、人は此理性を享けて生れ出でたる者なれば、此理性に従ひて生活すべし。言ひ換ふれば自然に従ひ、自然と調和する様に生活すべし。斯くて理性に従ひ、一切の快樂、一切の外界の出來事に動かされざる不動心（Apathy）の境涯に入るを以て倫理の極致とせり。此點より此派は大に義務の念を重んじ來り、此の義務の念に従ふところより徳は生じ來るものにて、此徳は各人が理性に従ふ所の意志を固く持するところより生ず。我意志は決して他人の奪ふべからざるものにて、此意志を固くし以て己れの主人公たる事を得ば、天下一切のもの、主人公となりて安心立命を得、所謂普遍理性と一致する事を得とせり。

此派は斯く外界の名譽財産を度外に置き、生死を輕んずる所より、もし我理性を傷

くる如き場合には自殺するを以て正當とし、此派のツェノー第一に自殺して死し、其學徒中には意志の力を信ずる事の厚き所より、我ど我が息の根を止めて自殺せしものもありき。而して又此學派は、一大普遍理性の支配を信じ、義務の念を重んずるところより、大に博愛の徳を説くに至り、人種階級の如何にかゝはらず、廣き人類社會と云ふ點に於て團結して、自然に従ふ生活を營むべしとせり。此學派羅馬に入るに及び、大に羅馬人の信仰を引き、セチカ、エピクテートス、マークス、オーレリウスの如き賢人名君を出し、羅馬の教育にも、大なる影響を及ぼせり。猶且此學派は羅馬法の發達にも、少なからぬ影響を及ぼしたり。

セチカは紀元前二年、羅馬領西班牙のコルドヴァに生れぬ。父は名高き雄辯家にして、深く氏の教育に注意し、早くより羅馬に連れ來りて學問せしめたり。氏は此處にて數學、文法、拉丁語、希臘語を學び、大に得る所ありしが、更に希臘埃及に旅行し、歸りて法律に従事せしが、大に成效しき。然るに不慮の嫌疑を受け、コルシカ島に流されぬ。此間氏は殆ど友とするものなく、唯天地自然を友として哲學的の冥想に耽り、大に其學問と徳行とを練りき。八年の後、羅馬に呼び戻され、ニロ帝の傅とな

り、身を捧げて一意其教育に盡くし、にかゝはらず、此弟子の腐敗せる情欲を抑ふること能はず、却りて官々の怨を買ひ、反逆に與せりとの讒言により、ニロ帝より死刑を宣告せられたり。此時氏は自若として顔色變せず、自から動脈を斷ち、ストア學徒の名譽に恥ぢざる死を遂げたり。時に紀元後六十五年なりき。氏の教育上の意見を書きたるものには、*ルシリウス*に與ふる書あり。中に聰明なる教育意見あり。

セチカの教育意見は、ストア學說に基す。謂らく普遍理性言ひ換ふれば神は、我等の心の中にあり。しかも又我等には惡に傾く所の性質あり。嫉妬の如きは獨り女子の有する性質なるのみならず、男子にも亦甚だ強し。教育の務は、即ち此惡しき傾向を矯めて、以て普遍理性の光を發せしむるにあり。此故に教師はよく生徒の個性を察し、生徒に對する言説と示例とを以て其心を清淨にし、且高尚にする感化を及ぼさざるべからず。怒りにまかせて之を罰する事なかれ。怒に乗ずれば罰の効力を失す。又餘り多く罰する事なかれ。多く罰するも其効力を減ず。成るべくは言説よりも寧ろ示例を以て徳行を教へよ。「教育の目的は、言説によりて

よりは寧ろ示例によりて早く達せらるゝものなりと。

教授に付きても、又生徒をして有徳の人たらしむる事に向けざるべからず。自然科学殊に幾何學、天文學は有益の學科なり。之れ生徒に天地自然を解して、神を知り自然の秩序を悟らしむる事を得ればなり。拉丁語、希臘語の研究は必要なれども、餘り多くを學ばしむることなかれ。すべて多くの學科を一時に學ばしめんとするは、唯之を淺薄に流れしむるのみにて避くべきことなり。寧ろ狭き範圍に止めて、充分に之れを習熟せしむべし。躰操も其精神の發達を助くる範圍に於ては獎勵すべきも、躰操にのみ耽らしむる時は、心を空虚にす。「すべて學問は學問の爲めに學ぶにあらざして、生活のために之を學ぶものなる事を忘るべからず」。而してよく己れを思想を確實にせんとするには、之れを人に傳ふべし。「教ふるは學ぶの半ばなり」。

氏は斯く着實の堅固なる教育意見を持し、之を以てニロ帝を教へ、かゝる意見を以て此時代の人を感化し、當時の風習に反し、博愛平等の精神より、奴隸に對しても尊敬を拂へり。氏はエピクテリトス及びマークス、オーレリウス帝と共に、羅馬人の

思想を高尙に且つ博大にするには、大なる効績を遺せり。

エピクテリトスは、ニロ帝の時より、マークス、オーレリウス帝の時に生存したる人にして、始めは奴隸たりき。奴隸たりし時、其主人エバフロダイトス撻ちたりしに、氏は靜に骨を折らざる様にと注意しぬ。然るに主人は之を以て、己れを嘲りたるものとなし、其責を二倍にしければ、遂に足の骨を折りたり。此時氏は少しも怒る色なくして曰く、「余はさきに御身に此事を注意せざりしか」と。後自由市民となり、羅馬人に其哲學を講ぜり。説く所、一に天命に安んじ、天意に従ふにありて、天を恨みず、人を咎めず、己が意志の力を練りて、一切外界に動かされざるを主とし、忍耐すべく知れ、節約すべく知れといふ二事に重きを置きし。而して其一の神を信じ、すべての人は其神に對しては同等の位置にあることを主張するより、博大にして且つ深遠なる博愛を説き、一の哲學者と言はんより、寧ろ敬虔と熱心とに充てる道義の説教者の位置に立ち、マークス、オーレリウス帝の朝に、十分の高齡を以て歿せり。其死後其哲學的の思索を照らし、土製の「ランプ」が、非常の高價を以て争ひ買はれきといふ事實を見ても、如何に其賢人として尙ばれしかを知るに足る。

マックス、オーレリウス、アントニウス帝は、羅馬の最も賢明なる君主にして、紀元後百二十一年に生れ、百八十年に死せり。帝は一の普遍理性、即ち神を信ずること最も深く、神の人に對する注意は、如何なる方向にも現はるゝのみならず、日常の瑣々たる行爲にも現はれ、すべて六合に瀰りて、自然の秩序、嘗ひ換ふれば神の意志に従ふべきことを示す。而して又あらゆる者の變化、個々人の死の如き例を見れば、善を得て喜ぶに足らず、禍として恐るべきものにあらざるを知るべく、すべて人は我が心の中にある神を知り、此神を崇拜し、此神よりのみ幸福を得んと求むべく、一切の外物は、吾等に何等の價値をも有せずと考へ、自己教育といふことに重きを置き、自身の意志を練り、絶えず自身の理性を研き、人の最も有徳なるもの最も賢明なるものとならんと志せり。帝の著、冥想録は、即ち此工夫を書きしものなり。帝は此趣旨に依りて自分を教育し、其家庭の如きは、あらゆる人の模範となり、又帝が人間の性情の同一なることを認めしより、羅馬人の上に、無限にして且つ利他的の博愛の感化を與へたり。

第九節 クインチリヤン 此の帝政時代に、ストア學徒に屬せず、別に一家の見を立

て、純粹の羅馬風の教育意見を抱き、官立雄辯學校々長となりて、政府より俸給を受け、其事業に於ても、學說に於ても、最も明に羅馬風の教育を代表せし人をクインチリヤンと爲す。

氏は紀元後四十二年、羅馬領西班牙のカラホルラに生る。當時の勝れたる人と同じく、氏も亦首府羅馬にて教育せられき。始めの間は法律に従事して大に成效せしが、二十六歳の時、雄辯術の教師となる爲め、此職を止めき。蓋し氏は此以前より雄辯家として大に名ありき。氏は政府より俸給を受けたる第一の人にして、雄辯術教授といふ稱號を受けぬ。後に及びてはドミシヤン帝の大甥をも教へ、晩年に「辯論術の組織」を著せり。此書は單に氏一己の意見と見るべからず。寧ろ此時代の羅馬教育の理想を描き出したるものと見るべし。此書は辯論術の如何なるものなるかを説明すると共に、如何にしてかゝる雄辯家を作るべきかを説きたるものにて、其雄辯家は即ち羅馬人が理想とせし所なり。氏は紀元後九十五年に死せり。

氏は羅馬人の理想とする雄辯家を作るには、其生れたる時より注意すべき事を言

へり。乳母は學問はなくとも、有徳にして且つ賢慮あるものを選びざるべからず。之れ幼兒に對する印象は、永久消すべからざればなり。「一度酒精を入れたる燻は、永久其臭氣を脱せず。一度染めたる羊毛は、二度白色とならんと難し。」かくて此幼兒の言語を發するを得て、拉丁語を習ひ始むるや、同時に希臘語を教へざるべからず。兒童は記憶力のよきものなれば、此時には務めて此方を練るべし。但し語學を以て兒童を苦しむるはよろしからず。兒童には學問を一つの遊戯と感ぜしめ、時々問を出して善く答へたる折には、之を賞讃して、其智識を得たる樂みを心に感ぜしむべし。興味を感じて學習せしむることは、殊に此時期の兒童に必要な。躰罰は全く課すべからず。

今少し長ずれば、讀方と書方とを教ふべし。讀方に於て、アルファベットを教ふるには其形を見しめたる後にすべし。空に始めより其音のみを知らしむるは不可なり。宜敷象牙にて文字を作り、之れを取り、之れを見、之れを名ざししめ、何時とはなしに之を覚えしむべし。書方に於ては、よく其手の力を練らしめんことを目指し、其手本の文句は、意味なき文句を以てすべからず、須らく、道德的の意義を含めるものを以てすべし。

兒童が其の學習を始むべき七才頃に至れば、之を公立學校に送り、公教師に付きて學ばしめざるべからず。家庭に於て、私教師に教育を委ぬる時は、兒童の道德を腐敗せしむ。兒童を奢侈我儘になれしむ。餘りに小供を大事に育つる時は、却りて其心と躰とを弱くす。之に反し、公立學校に於ては、他人の教へらるゝを見て自からも學び、他人の賞罰せらるゝを見て自ら之に鑑み、又名譽を得んと、の念に驅られて自ら徳に進む。而して又家庭に於て教授せられたる智識は、能く練れ居らざるを以て、實際の生活に當りては、之を活用することを得ずと云へども、公立學校にありては、他人の力量と相比較して之を練るが故に、自ら之を我が物として應用する力を得、同時に其の精神も、家庭に於ては妄想に流れ薄弱に陥り易きが、公立學校にては他人と交際する故、自ら實際的となり、且其の品性堅固となる。要するに、兒童をして家庭にて我儘なる生活をなさしむるは、之を學校にて多くの人と交際せしむるに比すれば遙に放逸に流れ易し。

公立學校に入れて學ばしむべきものは、文法と修辭學との二科なり。文法は更に

正しく話すことの術と、詩人の詩を解釋することの二部に分る。修辭學に於ては其の文法の規則の理論的研究を應用して文を作り、且つ話すことの練習をなさしむ。此の際語源を説明すること、且つ文章は正しく其の意義を了解して聲高く之を朗讀せしむること必要なり。

但し氏は生徒をして、單にかく文法上の研究の狭き範圍に止まらしめんとするにあらず。兒童は文法と同時に、あらゆるものを學ぶに適するものなれば、幾何學、音樂、及哲學をも學ばしむべし。幾何學は心を練りて眞と偽とを區別し、依りて推論を助け、音樂は雄辯家となるには必要なる準備にして、調和の感情を修養し、比例に對する趣味を起さしめ、哲學は論理學、自然科學、及道德學の三科を含むものにて、雄辯家に種々の考を與へ、彼に議論の秩序ある列に其の思想を整頓することの術を教ふ。

斯の如くして、此の見は初めて雄辯家となる。故に氏の云ふ雄辯家は、單に辯舌を弄する者にあらずして、あらゆる學科に通じ、堅固なる道德的品性を備へたる完全なる羅馬市民の謂なり。かゝる實踐的の堅固なる市民之其實に氏が造らんと志し、とてころにして、同時に羅馬人の理想とせしところなり。氏が官立雄辯學校を管理せし精神も、此の意見に基づきたるものにして、氏の教育の下に數多有名の人出でたり。

第十節 プルターク 此帝政時代に、クインティリヤンよりは少し遅れ、マルクス、オレリウス帝よりは少し早き間に、猶一人の教育論者出でたり。プルターク是なり。氏の本領は歴史家たるにありて、氏が書きし有名な「偉人傳」は、百世の下、幾百万の人をして愛讀措かざらしむ。しかも亦氏は同時に教育に心を傾け、ドミシヤン帝の朝に私立學校を開きて哲學、文學、歴史を教授し、後ツラシヤン帝の師となれり。氏はもと希臘人にして、紀元後五十年に生れしが、常に羅馬に住し、百三十八年に死せり。其書きし教育意見に、「兒童訓練論」婦人の心得「および文學教育論」あり。氏はクインティリヤンと反し、家庭を以て大切なる教育の場所とし、人と爲る迄の教育は家庭にて爲すべく、其人と爲りて後、外に出で、始めて道德家や哲學者の講義を聞き、詩人の詩を習はしむべしと説き、婦人の心得に於ては之と關し、大に婦人の家庭に於ける位置を重く見、婦人は其子を乳母の手に委ぬべからず。自ら之を養育すべき運命

を荷へりとして、婦人が其二つの乳房を持てるは、即ち雙兒を生みし時の用意なりといひ、かく婦人に其子を教育すべき責を負はしむる所より、婦人も亦數學哲學を學ばざるべからずと言へり。但し理想の婦人としては、氏は心の優しさに加ふるに、樂しき容貌清らかなる言葉、しとやかなる身振、及び高き情感を有する人たるべしと言へり。「文學教育論」に於ては、詩を以て教育の大切な學科とすべしとて、プレートーよりは今一層嚴格なる注意を以て之が撰擇を爲すべしと言へり。

是等の教育論を一貫せる氏の思想は、兒童を其内部の良心に依りて立つが如き有徳の人と爲すべしと言ふにあり。氏は常に繰り返して、實行と伴はざる理想は何等の價值もなきことを言ひ、若き者は、早くより自治に慣れ、自ら其行爲を思考し、自身の良心の評議を取るべしとせり。氏が良心の光を覺し、之を刺戟し、其内部の力を確立せしむべしとて、精神は充たさるべき器にはあらずして、寧ろ熱せらるべき器なりと言へる如き、能く教育の要點を捉へたるものといふべし。蓋し氏の頃より羅馬人の公共生活が著るく腐敗し來りたるより、之を家庭にて救ひ、又人心の外部の標準に驅らるゝより、之を内部に求めんとしたる反動もあり。

第十一節　羅馬帝國の分裂　帝政時代に於て、羅馬の社會は大に腐敗し、紀元後三百九十五年、東西の兩帝國に分れ、其西羅馬帝國は、四百七十六年に、獨逸種族に滅ぼされて、基督教と共に今の歐洲に入りて、中世紀の歴史を形作り、東羅馬帝國は、千四百五十三年に、土耳其人の爲めに滅ぼされて、其文化はもとの羅馬、即當時の伊太利に再び歸り來りて、近世の文明を開く文藝復興を生ぜり。羅馬滅びて、其精神、切に言へば其教育思想は、一部は中世に傳はり、一部は文藝復興時代に再現せり。

第十二節　羅馬教育の批評　羅馬の教育を其社會的關係より批評すれば、羅馬人は、もと武と農とを以て起れる國民なりしだけ、希臘人の文學的、理想的なりしに似ず、其反對に、寧ろ實科的、實踐的なりしといふべし。これ羅馬教育の根本的特色にして、この傾はその教育學說の上にも、亦其方法の上にも、制度の上にも現はる。かの希臘の理想的なる文學哲學が、羅馬に入るに及びて、其文學は之を政治上の用に供する修辭雄辯の材料となり、其哲學は殆んど法律道德を説く方便となりたるを見てこれを知ることを得べし。希臘人は、善と美とを同一視せしも、羅馬人は善を全く義務と解し、之を法律の觀念と結び付けぬ。この點より羅馬の教育を評すれ

ば、又一に倫理的、法律的の傾向を有しきといふことを得べし。要するに羅馬人の教育の理想は、飽くまで實際的の堅固なる人を作るにありて、訓練も教授も一に此目的より爲しき。これ羅馬人が、世界を統一する所の實踐的國民となりたる所以にして、羅馬の教育よりは、吾等殆んど教育の理想的の方面に付き、何等の賜をも承くることが能はざる所以なり。

次に羅馬の教育を、制度の點より見るに、羅馬人は實踐的の傾ありしより、クインチリヤンが校長となりし官立雄辯學校の外には、殆んど官立の學校なく、主として家庭若しくは私塾に於て、一に實地的の教育を施しき。實地的の人を作るが爲めには、別に學校に於てする必要なく、寧ろ家庭若しくは私塾に於てする方、實踐的の人を作り得べかりき。而して之は一は羅馬の家庭が甚だ嚴格にして、其家庭の中心となりたる羅馬の婦人が賢明にして、且つ高尚なりしにも依る。此點より言はば、羅馬の教育は之を學校に於てせず、家庭に於てしきといふべく、クインチリヤンが公立學校の長所を擧げたるは、これ時弊に反抗したるものにて、寧ろプルタークが、家庭教育の必要を唱へたるを、羅馬教育制度の本旨と見ざるべからず。羅馬の如き國

民統一の力を重んじたる國家にして、教育を國家事業として經營せず、却りて之を家庭や一私人に委したるは、一見甚だ奇なるが如くなるも、羅馬の家庭と私塾とは、殆んど國家的精神を以て充ち、羅馬全軀の空氣が、暗々に其國民を教育する如くなりき。故に吾等は羅馬の教育制度につきては、クインチリヤンが公立學校を重んじたる外には、何も學ぶものなく、唯其家庭教育を重んじ、之を教育の基礎としたる點に於ては、希臘と違ひ、大に參考すべき價值あるを見る。

第三に羅馬の教育を學說の上より見るに、學說に至りては、之を希臘に比すれば、學ぶ所甚だ少きを見る。コムペーレ、此理由を説明して曰く、羅馬人は決して己が利害を感ぜざる如き科學、或は單に推理を主とする問題に興味を有せざりき。之が例として、羅馬人は、法律の如きを大に重んぜしに徴すべし。今教育學は或意味に於ては實踐的科學なりとは言へ、人間の性質に關する知識、人間の運命の理論的觀念の上に其原則を立てざるべからざるを以て、かゝる問題は、羅馬人には殆んど趣味なかりき。シセロすら、プレトリーを譯するに、其思想には注意せず、唯其文章の流麗なる點にのみ注意しきと。此故に、シセロ、セチカ、クインチリヤン、プルタークの教

育意見に付きては、吾等其實際的の道德を練り、實踐的の知識を與ふべきことを説ける外には、殆んど得る所なく、教育學の深奥なる思想に接すること能はず。唯セネカの如き、ストア派の人々が、其學說の上より、教育に博愛平等の考を入れ來り、又之と伴ひて義務の觀念を教育に入れ來りたるは、希臘の教育學思想に見ざりし所に於て、此思想は、基督教に至りて最も能く現はれたり。猶又アルタークが、教育は切に生徒の自治心に訴ふべきことを唱へたるも、希臘になかりし所に於て、一の注目すべき思想なり。

第四に之を方法の點より考ふるに、羅馬人が實踐的なりしだけ、其實際につきては、頗る参考となるべき成績を遺せり。即ち共和政時代に於て、父母は其子の教育を負擔して之を實地に役に立つやうに教へ、殊に父は之を伴ひて世態人情を知らしめ、國政を見習はしむる注意までを爲せり。其帝政時代となるに及び、私塾の起るに當りても、讀書算の如き、すべて之を實際的に教へ、又最も實際に役に立つ作文、作詩、修辭、雄辯、農業、軍事、政治、法律の如き實際的の學科に重きを置きて、堅實なる拉丁文明を後世に遺したる成績は偉とすべし。而して其訓練の上には、最も嚴格の方

針を取り、鞭は之を訓練の大切なる道具とし、言説よりは寧ろ示例を以て生徒を率ゐんとしたる如きは、儘に教育の要點を攫めり。

最後に之を教育家の出でたる點より見れば、吾等は偉大なる教育家を羅馬に見出すこと能はず。羅馬には一般の父母、之が教師たりき。羅馬の空氣は、すべて政治を以て充たされ、此實際の空氣が、それとはなしに羅馬人を教育せり。強ひて其人を求めんか、シセロ、セネカ、クインチリヤンの三氏を挙げざるべからず。

第三章 基督教の精神

第一節 基督教と教育 羅馬帝オーガスタスの代に、其の羅馬領の一なるユデアに、イエス、クリスト生れ、基督教を唱へ出せり。此の教義、初め羅馬に入り、其の帝政時代の末には國教となり、次第に諸國に廣がり、中世紀に及びては、殆んど今の歐洲を感化し、此時代の教育をば、殆んど其奴隸となし、爾來今日に及ぶ迄、此教義は深く歐米人を感化し、歐米の倫理若しくは教育の如きは、此教義を離れては解釋すべからざる迄に偉大なる感化を與へたり。前にも云ひし如く、歐米今日の文化は、希臘、羅馬の文化、基督教の精神、及び近世の自然科學の三者相寄りて組織し、從つて教育

も亦此三要素を以て今日の状態を成せるものなるが、既に其の第一の要素は説きたれば、此章には第二の要素を説くべし。

第二節 ユデヤ人の特性 基督を知り、基督教の教義を理解せんには、先づ其種族ユデヤ人の特性を知らざるべからず。ユデヤ人は、セミチック種族の一にして、本来宗教的の國民なり。紀元前二千年、此人民の父なるアブラハムは、約束の土地を望み、メソポタミヤの平原より、キャナンの地にさまよひ、其後の王ダヴイッド、ソロモンの如き、皆これ宗教的人にして、其の政体は時に依りて變りしも、一の「セオクラシー」にして、僧侶が神意を伺ひて政を施し、或は士師が天啓をうけて政を布けり。神意を奉じ、神を知り、神を敬するが、一切の知識、一切の徳行、一切の政治の本にして、宗教が全然其國民を支配せり。此種族、かく神を敬する念深く、如何にも深奥の思想を有し、之れと共に、堅忍不拔、一種懐愴の氣象を有せり。クリストは、即ち此種族の宗教的の氣風をうけ、此堅忍不拔の懐き氣象を帯びて、教義を生命に代へ、以て其福音を傳へたり。之を印度の宗教が、美麗なる理想を有し、一種慕なき悲觀を有するに比すれば、基督教は、壯嚴なる一種強き樂觀を取れるものと云ふべし。

第三節 クリストの生涯 イエス、クリストは、紀元前四年、ユデヤの一村落、ナザレに生る。父をヨセフといひ、母をマリヤといふ。此の二人の間に許嫁はありしも、未だ家を成さざる前に、基督は生れたり。ヨセフは大王なりしが、其血統はダヴイッド王より出でたり。極めて謹直の人にて、母マリヤは、又温和にして、敬虔の念に富みき。ナザレ村は、丘に囲まれたる閑靜の一村落にして、空の鳥、野の花、春に秋に、天然の美は、此世ながらの樂園とも見紛ふばかりにて、クリストは、先づ此自然の榮光に打たれ、此温かき家に何事もなく生ひたちぬ。家貧しかりしかば、其父母より、宗教上の感化を受くる外、私塾に入りて、僅の文字を習ひたるのみにて、家業を見習へり。ユデヤの習慣として、其國祭には、國民皆首府セルサレムの宮殿に詣づる例なりしかば、クリストも、亦毎年父母につれられて、此首府に赴き、大に智見を弘めたり。年十二の時、此國祭に行き、歸りにクリスト見えず。されば父母は狂氣の如くなりて、捜すこと三日にして、彼が宮殿の中に、多くの僧侶と宗教上の問答をなして、之を困らせ居るを見、引き離して家に歸れり。かくて三十歳迄は家にありて、家業を助けしが、三十歳の時、ヨハンの洗禮をうけ、是より態度一變し、奇跡を行ひ、自ら神の

子と稱して、布教に従事せり。

基督が布教に従事するに當り、一方には熱心なる信者を得しも、他方にはサドカイ人、パリサイ人の如き宗教の見解を異にするものありて、之を嫉み、布教なか／＼に困難なりき。しかも基督の神に對する信仰は益々強く、老若男女を感化し、殊に其子弟を薰陶せり。彼が教訓は、其聽き手を、最も濃かなる同情を以て酔はしめ、恰も牧童を離れてさまよひたる羊が、其主を見出したらん如くに慕はしめき。彼は其相手を見て法を説き、其の子弟に諭したる事は、すべて宗教の實踐し易き根本思想にして、同時に躬行實踐、自ら之が手本となりぬ。而して愈々其の人を救ふ熱心溢れ、又他宗教者の妨害あるや、こゝに山上に十二の使徒を撰び、之に其教義を含めて布教に従事せしめき。此十二の使徒、實に身命を賭して、羅馬其他の各地に此教義を擴げたり。

かくて布教の第三年目に、基督はシエルサレムに行きて教を説きしが、遂にサドカイ人、パリサイ人の爲めに、左したる口實もなく捕へられ、春猶寒く悲風慘澹たる日、二人の強盜の間に挟まれ、ユヂヤにありて最も恥づべき磔刑に處せられたり。磔刑に處せらるゝ際、クリストは、父よ彼等を許し給へ。其爲す所を知らざるがゆゑなりと言ひ、却りて父の許に行くを樂むものゝ如く、泰然として死に就けり。基督の説きたる所、敢てユヂヤ在來の宗教思想と左程異りたるにあらず、寧ろ其精華を探り來りて之を大成せしものなれども、其趣旨宏大にして、彼等頑冥の徒に取りては解し難く、又一は其基督の勢力を妬む所より、此千古の偉人を殺し了りぬ。豫言者の爲めに紀念碑を立つる者の祖先は、其豫言者を殺したるものなり。偉人の心事、往々當時に解せられず、遂に道の爲め、世の爲めに犠牲となる例少からず。基督は即ち其最も顯著なるものなり。

シムミット、基督を評していふ、言葉に於ても、行に於ても、亦其一生涯の生活に於ても、基督は慥に人類の教育者といふべし。神は一の精靈にして、其神を崇拜するものは、須らく精神より之を崇拜せざる可らずといふ知見、神は全く人に宿り、人の最も真なる、又最も神々しき者といふ真理、及び汝は須らく汝の真心を以て、汝の心のすべてを捧げて、汝の主なる神を愛し、次に汝自身の如く汝の隣人をも愛すべしといふ義務、凡そかゝる高尚の知見かゝる確實の真理かゝる神々しき義務を説きたる

ものは、實に基督なり。此教義は、人類の事業に横はりて、人類の務を實施せしむる上に、何時までも消すべからざる絶対の眞理なり。而して基督自身の人物に於て、此眞理が如何なる方向に向ひ、如何なる事業を爲し、如何なる形を取るべきかの完全なる實例を示されたりと。

第四節 基督の教義 基督は斯くの如く、己が身命を抛ちて其教義を説きたるが、そもく其教義は如何なるものなりしか。後に至りては、教會の長老等が種々に之を人の道理心に訴へんため、神學を組織し、三位一體説の如きを唱へ出したるが、基督の面影を残せる新約全書を見れば、其趣旨一に人類を救済する精神より出でたるものにて、基督は之を理に訴へて説きたるより、寧ろ情に訴へて説きたる趣あり。こゝに其根本思想を見るべきものを指摘すべし。

基督教義の第一は、エホヴァの一神を本とし、此神を恐れ、此神を敬し、此神を愛するにあり。神は天地を作り、人間を導き、人間に幸を與ふ。凡そ此世一切の事、神の配劑に成る。各人類、須らく全幅の精神を捧げて神を敬愛せざるべからず。己が精神を吐露して神の恵を乞はざるべからず。神を知るには己が精神を以てせざるべ

からず。一切の利欲、一切の妄念を脱し、全然精神のみとなりて、唯一眞正の神を念ぜざるべからず。これ正さしく當時の羅馬に於て、多神を拜し、或は偶像を拜し、己が利益心より神の恵を乞ひたるに比すれば、一種異なりたる教義を開きたるものなり。而して基督は自ら神の子と稱し、神が自身となりて、此現世に現はれたるが如くに感ぜり。

基督教義の第二は、罪といふ觀念なり。人の祖アダム、イヴ、樂園の無花果を手折りしより、其の罪すべての人類に傳はれり。此のすべての人類に傳はれる罪を基督代りて償ひたり。故に基督は救世主なり。この故に又人々は基督の教を奉じ、基督に依りて罪を許されんことを神に祈らざるべからず。罪を悔いて生れ變りたる如き人とならしめんとすの教義、これ實に道心堅固にして精進勇猛なる熱誠を起さしめたる所以なり。

基督教義の第三は博愛といふ精神なり。神を敬愛するといふ、己れ獨にてすべからず。すべての人、皆神の意に依りて作られたるものなれば、此神の意に依りて生ぜる一切の人類は、互に相引援し、四海同胞、各人一人となりて以て神に事へざるべか

らず。すべての人類、互に愛を以て結ばり、唯一の神を奉じ、以て天國に赴かざるべからず。純潔なる愛情を以て、一となりて、相共に清淨圓滿なる天國に赴かざるべからず。「汝自身の如く汝の隣人をも愛すべし」汝の欲する所は、之を人に施せ、人若し汝の右の頬を打たば、又外の頬を廻らして之に向けよ。愚は悟し、弱は扶け、長は幼を起し、博愛の精神より結合して、唯一の神を奉ぜざるべからず、これ當時にありて、殺伐の氣風盛んにして、目にて目を償ひ、齒にて齒を償ひ、人は人に、國は國に、己を立てることのみ急なりし時に當り、此利他的の同情を鼓吹せしは、慥に一種異なりたる教義なりき。而してこれ實に羅馬法王の勢力の下に、世界を統一し、各國の君主も其下に跪づかしむるに至りたる所以にして、教育上、狹隘なる國家の民を作ることより一轉して、廣く人類といふ點に着眼して、教育せざるべからずといふ見解を取らしむるに至りたる所以なり。教育上の世界主義は、實に基督の教義に出づ。

基督教義の第三は、自由平等の精神なり。人類は皆均しく神の支配の下に立つものにして、其間に上下貴賤の別あるべからず。神の子といふ點に於ては、萬人皆同等の權利あり。男女に依りて權利異なるべからず、貧富貴賤に依りて亦權利異なるべからず。夫として妻を虐げ、親として子を苦しめ、君として其民を苦しむべからず。すべて各人には皆之れ一の自由あり。人此土に住して、其身體を寄せ、其衣食を得、それらの國家社會に屬する以上は、其身體は、幾分かの制限をうくべきも、其精神に至りては、全く自由にして、獨り神の支配に屬すべきものなり。人は一人として皆一人たる品位人格あり。皆神を知り、神を見るべき心あり。此品位、此人格、此心は、全く己のものにして、神の支配をうくる外、天下一切の者に枉げらるべきものにあらず。此教義、又當時にありては、頗る注目すべき思想を含めり。當時希臘羅馬其他の諸國には、婦人は男子と同等の權利を有せず、爲めに一夫多妻の陋風行はれ、社會にはそれらの階級ありて、其下等社會の者の如きは、殆んど一人前として見らるゝことなく、暴君は恣に民の膏血を絞り、富者は我儘に貧者を苦めき。此時に當り、基督、結婚の神聖を唱へて、一夫一婦の大義を唱導し、人々の自由を説きて、其品位を重んずべき事を示せり。之に依り、婦人の位置大に高まりて、家庭は清く且つ温となり、而して人々己れの自由を重んじ、己れの心を清くして神を見んとす。

念を起すに至り、家庭の情愛、個人獨立の念、初めて見るべきに至れり。教育上の個人主義は、亦基督の教義に出づ。

基督教義の第四は、永久生活の思想なり。基督は之を天國に行くとも呼び、又父の許に行くとも云へり。人は肉體は死すとも精神は長へに死せずして神の審判をうく。此故に人の現世にある間、務めて己れを修めて以て神の許に行く日、神の嘉納をうけざるべからず。此世にありては徳あるもの必ずしも福あらず、所謂福德一致せざるも、天國にありては神はよく之を照覽す。人一點の疚しき所なくば、永久に其精神の安慰を得、永久に神の恵をうく。此思想、又當時現世の事にのみ醒醒したるに取ては頗る異りたる教にして、此思想は實に人を上へ上へと精進して道に進む勇氣を起す理想的の傾向を取らしむる本となりき。

之を要するに、基督の教は、世界の同胞互に愛情を以て結ばり、相共に其心を清くして唯一の眞神を敬愛し、以て天國を實現すべしといふにありき。

第五節 此教義と教育思想の變動 此教義が教育思想の上に如何程の影響を與へたるかは、上に述べ來れる所にて畧推察することを得べし。即ち從來の教育は

唯國民を作るといふことを主眼としたりしに、今は世界の民を作るべきこととなり、從來は宗教を教育に入れざるにはあらざるも、之は唯教育の一方便としたりしに、今は全く宗教を根本とし、宗教的人を作るべきこととなり、從來の倫理思想は先づ義に止まりて仁の念に進む能はざりしが、今は博愛を其根本とし、從來は婦人又は下等社會の者は教育の恵をうくること能はざりしが、今は平等に之を施すべきこととなり、從來は精神の自由、個人の獨立を重んずる念割合に薄かりしが、今は精神の獨立を尊ぶこととなり、從來は唯現世を眼中におきて其身を處したりし者今は來世を慕ひて其徳行を積むべきこととなり、而して基督は全人類を代表し、自ら身を殺して其罪を贖ひたるを以て、身を殺して仁を爲したるもの、最大標本なり、困厄艱難敢て辭せず、信仰堅固なりし者の最大模範なり、個人の獨立を尊びて眞心より神を愛せし者の最もよき實例なりといふこととなり、基督は廣く人類の教育者たると共に、又教育界に於ける理想の人となり、其經典新約全書は、道德の標準たるに至れり。故に基督出でより、教育史の面目は殆んど一變せり。

第六節 此教義直ちに勢力を得ざりし理由 基督の教義は、かく宏大の思想を含

み、後には教育に大變動を與へたりしも、初めの間は、教育上に容易に其勢力を得ること能はざりき。其原因種々あり。第一此教義を傳へられたる希臘羅馬其他國々の者は、猶知識道德の低き程度にありて、容易に此教義を理解すること能はざりしこと、第二當時は猶基督教創業の時代にして、其開拓をのみこれ務め、當時のあらゆる社會より迫害と怨惡とを以て迎へられ、爲めに教育に力を盡す餘裕なかりしこと、第三當時基督教を信ぜしものは、實際の生活は棄て、願みず、専ら閑寂の境に引き込み、沈思冥想、殆んど僧侶の如き生活を送るもの多かりしこと、第四當時の基督教徒は、此世の天國に入るより、寧ろ神の天國に入らんことを望み、希臘羅馬風の奢侈なる生活を排し、すべて此世の快樂、此世の習慣を否定して、ひたすら神に倚らんことを力めたること、凡そ是等の原因よりして、初代基督教徒は、此高尚なる理想と、此腐敗せる實世間の不釣合とを、教育と家庭との中に避けて、こゝに一種の宗教的生活に入り、以て天國に赴く準備を爲せり。従つて世間は基督教徒の教育所とならず。初めの間は主として家庭に於て其宗教的教育を施せり。其問答學校の起りしは餘程後の事なり。

第七節 初代基督教徒家庭教育の狀況 初代基督教徒は、世間の迫害の爲めに、未だ世間を教育すること能はず。主として家庭にありて力を其兒女の教育に注げり。其兒女の知力の覺むるや、直ちに神の名、救世主の名を教ふ。彼等は聖書と使徒の傳記とに依りて、其兒女を宗教に導かんと力む。其や、長ずるに及び、父母は宗教の教義と人間の義務とに關し、聖書中より必要な言葉を書き取らしむるを日々の神聖なる務、又愉快なる事業とせしむ。聖書は常に爐邊の友にして、其兒女の唯一の教科書なり。讚美歌は兒女が其膝に這ひ上る頃より口ずさみにて教へらる。讚美歌と音樂とは、此時より敬虔の感情を以て兒女の心に印象し、聖書の知識と信仰とを以て兒女の心を練り上げたり。蓋し其目的とする所、兒女をして、異教徒の汚風に染ましめず、専ら之を彼等の健全なりと信ずる家庭にて教育し、其結果少しも世の卑賤なる快樂を知らず、唯清淨なる家庭の快樂を解し、異日教會の熱心なる働手たらしめんとするにありき。而して其教育たる、知力を宗教の奴隸とし、人の心の發達の如何に注目せざりし缺點はありといへども、其品性の堅固なるは其長所といふべく、而して又是等教徒間結婚の神聖にして、婦人の淑徳の甚だ高

かりしは、異教徒といへども歎稱せし程なりき。

第八節 セント、シエロームの教育意見 初代基督教徒の中にありて教育意見を書きしものは、セント、シエロームを第一とす。氏は紀元後三百四十年に生れ、死せし年月は詳ならず。其書題して「レターに與へて其娘の教育を論ず」といふ。即ち主として初代基督教徒間の女子教育の代表意見と見るべきも、亦男兒教育の方針も察すべし。氏は先づ其レターの娘パウラの教育に對し、其身軀を度外に附すべきことを言へり。曰く、身軀は諸種の罪惡の源なり」と。故に氏はパウラをして、衆人の中にて會食することを避けしむ。これパウラが他の肉食するを見て己も亦之を欲望せんことを恐れてなり。次にパウラをして酒を飲むこと能はざらしむ。酒は不潔の源なればなり。次に食物は一切菜食とし、唯僅かの魚肉を食せしめ、且つ常に満腹せざらしむ。次にパウラをして沐浴せしむることを許さず。これ身軀につきて色々の感を起さしむるが故なり。

セント、シエロームは、かく身軀上の抑壓主義を執るのみならず、知育、德育につきても亦同様の考を抱けり。即ち讀むべきものは聖書のみにして、詩歌の如きは人の情

欲を燃すものとし、美術の如きも亦同様に之を排斥せり。手紙の中に曰く、パウラをして樂器に耳敏てしむることなかれ。彼女をして全く琴笛の奏し方を知らしむることなかれ」と。殊に又氏は女子の社交を禁じ、パウラをして親戚故舊と共に、道路否世間の道を歩ましむることなく、唯彼女を、離れ部屋に天使の如くあらしめよ」と言ひ、其終りに、彼女を寺院にて教育せしめよ。彼女は世間を知らず。其からだの事につきては何物をも知らず。恰も天女の如く住むべし」と。氏が理想とする所、全く僧侶的、寺院的の生活にして、甚しきは高尚なる感情をさへ之を輕蔑せり。唯氏がパウラに文字を教ふる時、樂んで之を學ばしめ、木又は象牙を以て文字の形を作り、之を弄ばしむる間に、其綴り方を知らしむべしなど言へるは、取るべき意見といふべし。

第九節 基督教と異教徒文學との調和 基督教は本來一の宗教にして、其教育の本旨は、全く經典に依りて宗教的人を作るにありたるが、其希臘羅馬其他の地方に擴がるに至り、漸次異教徒の文學哲學と衝突し、多少其本來の性質と違ひたる原素を附加せざるべからざるに至れり。上に述べたる初代基督教徒間の家庭教育、

或はセント、シロームの教育意見の如きは、これ純然たる基督教的教育なれども、かゝる教育を以ては、連も一般人を教育すること能はず。こゝに於て教會の長老等の間に、異教徒の文學哲學を其教義に附加して、以て世間的の勢力を得るやうに爲すべきか否かにつきて大議論起り、中には哲學的の好奇心は、一の罪惡にして、異教徒の文學を愛するは、これ異端に降伏するなりといふ者ありしが、其信徒の數の殖ゆるに従ひ、勢ひ基督教を中心として、之に異教徒の哲學文學を結び付け、以て廣く世間を教化するの方針を取らざるべからざるに至れり。かくて基督教は先づ二箇の世界的言語、即ち希臘語と拉丁語とを利用し、經典を此二國語に譯し、又此二國語を使ひて以て基督教を説けり。文法、修辭、雄辯術、數學、音樂、天文學、史學、哲學の如きも、基督教に反せざる限り、之を其周圍に結合し、之を組織して基督教的文學を組織し、異教徒の趣味に反せずして、しかも其理解力に訴へ、以て基督教を擴ぐるに至れり。問答學校及寺院學校は、此傾向が事實の上に現はれたるものなり。

第十節 問答學校 初代基督教徒は、初めの間は主として家庭にて其兒女を育てることを計り、未だ廣く世間を教育する餘裕あらざりしが、かくては其教義を擴ぐ

ること難く、又一方には漸々基督教を奉ずる人の數殖えしたため、一の學校を設くる必要を見るに至れり。これ即ち問答學校 (Catechetical school) なり。初めの間は、基督教を信ずる者は、唯、耶穌基督は神の子なるを信ず、と言ふが如き、簡單なる信仰を述ぶるに依りて、直ちに洗禮を施されしも、今信徒の數殖え、其信仰も右の如く簡單なることにては薄弱なる恐あるより、半年若しくは三年に涉りて、問答教師 (Catechist) と呼ぶ教會の特別の役人に依りて、基督教の根本主義を教へしむるに至れり。其生徒は之を、キテクメン と呼び、十誡、讚美歌、及び聖書中の重要な部分を教へらる。其教育せらるゝ場所は初めは便宜の場所を選びて爲し、が、後には教會か又は特別に立てたる學校にて爲すに至れり。

問答學校の最有名なるものは、紀元後二世紀、羅馬領埃及のアレキザンドリヤに立てられたるものなり。そも、此地は、希臘教育の所に述べし如く、希臘の末路其文學を保存したりし所にて、羅馬時代に及びては、益々其文化進み來り、當時文明の中心たりし所なり。従つて此地の人智も進み居りしかば、此地の問答學校は、最も程度高くして、又最も學問的の形を備ふるに至れり。基督教が異教徒の文學と相

按して以て之と調和するに至りしは實に此地にありき。此學校生徒の多くは、皆異教徒文學の熟達者にして、是等の人に洗禮を受けしめんには、最も進みたる學問的の形を備へざるべからざる必要ありき。長老の一人クレメントは、夙に基督教に異教徒の文學哲學を取り入るべき必要を唱道して曰く、モゼスの教と異教徒の哲學とは、反對の位地に立つものにあらず、寧ろ一の真理の斷片とも、一全骸の部分とも見るべきものなり。此二者は共に違ひたる方向より基督教の助を爲すと。かくて此學校にては、基督教の根本教義を教ふると共に、之と關連して博言學、修辭學、及哲學の如きをも教へたり。其生徒が概して學問深く、哲學的の思考力に富みしより、問答教師には、最も廣き教育を受けたる人を選び、異教徒の疑問と攻撃との爲めに、決して屈せず、却りて之を己れの方に屈服せしめ得る如き人を取り、而して是等の人は、遂に基督教を道理立つるため、アレキザンドリヤ神學を組織するに至れり。而して猶此學校にては、基督教の宣教師を作る爲め、一の宣教師養成所をも設けたりき。アレキザンドリヤの外、此種の學校は各地に起りしが、先づ右の學校を以て標本とすべし。

A.C. 324

寺院學校

第十一節 寺院學校 基督教が初め羅馬に入りてより、二世紀の終迄は、非常の迫害を以て迎へられ、基督教徒は生命を賭して此教を擴げしが、コンスタンチン帝の御代三百二十四年に、基督教は公然羅馬の國教とせられ、其國民を擧げて之を奉ずるに至れり。帝は更に法令を出し、公費を以て教會を立て、其僧侶の租税を免じ、日曜日を休息日と定むるなど、あらゆる保護と獎勵とを與へたり。各教會に附屬する數多の學校も起るに至れり。所謂寺院學校是なり。此學校の組織は、通例二つに分る。曰く内學、曰く外學是なり。内學は専ら僧侶となるべき者を養成する所にして、其學科は主として基督教の根本教義を教ふるにありき。外學は博く俗人の子弟を收容して、之に基督教の感化を與ふる所にして、其主要の學科は、勿論基督教なりといへども、之を中心として、種々の學科を教へ、初級にては綴り字、習字等を教へ、其上級に及びては、文法、修辭學、音樂、天文學等をも教へき。而して此寺院學校は、中世紀に至り、種々の學校の模範となれり。

第十二節 基督教的の教育に對する批評 基督教起りて、教育上に如何なる變動を與へたるかは、前既に述べたる如くなるが、今少しく細かに之を批評して、其長所

と缺點とを尋ねべし。

第一に之を基督教と社會との關係より見るに、ユデア人はもと宗教的の國民にして、宗教を世界に擴ぐる爲め現はれたる種族ともいふべく、従つて其教育は全く之を宗教的と評することを得べし。宗教がユデア教育思想の根本なり。希臘の教育は美的、羅馬の教育は實踐的といふに對し、之は宗教的といふべし。而して此宗教的の教育を根本として、之に希臘の美的の教育、羅馬の實踐的の教育を結び付け、以て之を中世に傳ふるが初代基督教徒の任なりき。此教義は當時の社會の猶人類とか、世界とか、博愛自由平等とかいふ如き高尚なる道德思想の起らざりし時に、出で、慥に人心の方向を一轉せしめたり。此點より見れば、基督教徒の教育は教育史上に偉大なる効績を遺せり。

第二に之を制度の上より見るに、其重なる教育所は家庭にありて、學校は唯僅に問答學校と寺院學校とを設けしのみ。故に制度の上に付きては、吾等は唯其家庭教育の嚴重にして麗はしかりしことの外、殆んど學ぶべき所あらず。唯基督教の精神より、博く人間の階級を廢し、万人平等に教育せざるべからずとて、その寺院學校

の外學に於て、博く庶民教育に力を盡し、遂に今日の普通教育の基を開くに至りたるは、其教育制度の上に與へたる一大効績と言はざるべからず。殊に基督教が一方に宗教の權を掌り、他方に教育の權を執り、教會と學校、牧師と教師とが相一致して、其地方人の教化を進むる手段を執り、是に依り大に歐洲の文化を進めしが如きは、教育上はもとより、一國の施政上參考とすべき所なり。

第三に之を教育學思想の上より見るに、基督教はもと哲學若しくは科學の上より教育を説きたるにあらざ。其宗教の教義より教育に立ち障るに至りしものなれば、之を科學的に批評すれば、其宗教の根本假定、神といふことが、大に疑ふべく、かゝる神を假定して人を教ふるは、果して當然の道なるか否か。これ宗教々育に近時反抗の聲ある所以なれど、しかも其基督が主唱せし世界主義個人主義は、教育上に一の新なる面目を開かしむるに至れり。教育學思想の上に、人類、世界、自由、平等、博愛の考を附加し來り、愛の力を重んじ、精神の修養を説き、人心の根底より改造せんと試みたる點に於て、基督の教は、慥に教育學思想の上にも一大影響を與へたり。長老等の中にありてセント、ジャロームの意見は、概して消極的、厭世的にして、僧侶を

教育するに適し、一般人を教育する思想としては餘りに偏頗なり。

第四に之を教育方法の上より見るに、其教へ方訓練の仕方につきては、家庭教育の能く行き届きたる外、殆んど近世教育の上に影響を及ぼせるものなし。しかも基督教徒の教育の仕方につき、希臘羅馬の教育に無かりし三つの點あり。第一基督教諸學校は、明に一の宗教的、道德的の目的を掲ぐるが故に、其學校すべて宗教的、道德的の空氣を以て満ち、教授の場所たらずして教育の場所たりしこと。第二基督教諸學校は、宗教々育を中心とし、爾餘一切の學科を之に統合し、希臘羅馬にて一科一科に別々に教へたるものを、一切學校に罹羅して之を一に宗教に歸せしこと。言ひ換ふれば教科の統一といふことを實際に行ひしこと。第三基督教諸學校を管理する者は、大抵一定の身分ある者にして、希臘羅馬に於けりし如く、緩慢なる私塾の教師にあらざりしこと是なり。基督教の學校に於て、始めて教育の神聖といふことを見るを得たり。

第五に之を教育家の出でたる上より言へば、基督は學校に於ける教育家の模範とすべきのみならず、又廣く人類の教育者と言ふべし。シニットが、基督自身の人柄

に、宗教上の知見と眞理と道德上の高尚なる義務とが代表せられたりと評せしもの、過當の評にあらず。基督は實に身を殺して仁を爲し、人の最大標本なり。其使徒、其長老等皆、其熱心に感化せられて、死をも辭せず、人を教育し、宗教家として見る外、教育家として見るべき人少なからず。但し基督及其一流の人は、宗教的、道德的、教育にのみ着眼して、人の智力を啓發し、理性を發達せしめ、教育の實科的方面に注意することを爲さざりし缺點ありし事を知り置かざるべからず。智力の啓發、理性の開發、及び實科的教育の主張は、別に其人を待たざるべからず。

第四章 中世紀の教育

第一節 中世紀の年代 紀元後四百七十六年、西羅馬帝國は、獨逸種族の爲めに滅ぼされ、其文化は今の歐洲に入り、こゝに中世紀の舞臺は開かれたり。其後千四百五十三年、東羅馬帝國が土耳古人の爲めに滅ぼされて、其文化が舊羅馬即ち伊太利に入りて文藝復興を起すまでの一千年間を中世紀と稱す。

第二節 教育の舞臺の一變 是迄の教育は、希臘羅馬に限られ、希臘羅馬は即ち世界の花にして、他は殆んど世界史の上に重きを爲す能はざりしが、今や獨逸種族其

他是迄勢力なかりし歐洲北部の種族は、漸次國を起し、希臘羅馬の文化と基督教とを消化して、世界史の上に新なる勢力を占むるに至れり。従つて教育史の舞臺も今後は大に廣がりて其の中心、今の歐洲に移るに至れり。此間東羅馬帝國がコンスタンチノールにて其文化を輝したるは舊の如し。

第三節 新種族の特質 今世界史の舞臺に現はれたる歐洲種族殊に、獨逸種族は是迄全くの野蠻人なりき。森の中に生活して、殆んど文明の何たるかを知らざる種族なりき。しかも天資勇敢、体力強健、夙に自由の發達を有し、將來大に發達し得べき性質を有したり。モンテスキューが、近世歐洲の文明は、其萌芽を獨逸の森林中に發したりと言ひしは、能く此點を説きたる言なり。此種族、今其武力を以て、西羅馬帝國を滅ぼし、其文明と基督教の教義とを取りて其養と爲し、大に世界に雄飛する準備を爲し、遂に近世の文明を開けり。中世紀は即ち此準備の時代なり。

第四節 暗黒時代の意義 中世紀殊に其五世紀の末より十一世紀迄は、歴史家に依りて暗黒時代と呼ばれる。しかれども、暗黒時代は將に光明の時代に入らんとする準備なることを知らざるべからず。歐洲種族は、此間に其野蠻の性情を脱して、基督教化せられ、從來無學文盲なりし愚を啓きて、希臘羅馬の文化と東方亞刺比亞の科學とを取り入れ、近世文明を開く素養を爲せり。従ふて教育史上にありては、此一千年間に格別學ぶ所なきも、しかも此間の教育の狀態を明にするにあらずば、近世教育の依りて來る所を知ること能はず。恰も天を凌ぐ大木が今其地中の暖氣に依りて二葉の芽を出さんとするに似たり。

第五節 中世紀蒙昧の原因 中世紀は、かく野蠻人が希臘羅馬の古文學と、基督教とを消化せし時代にして、其野蠻人は一定の言語、一定の文字を有せず、力ある者は干戈を取るに忙しく、居民は自己の生命財産を守るに急にして、なか／＼教育に力を盡す餘裕なかりしより、急に文明に赴く能はず。而して其基督教入り來りて其勢力を占むるや、すべての智力を其奴隸としたる傾あり。こゝを以て中世紀の教育は、之を希臘羅馬に比すれば其光彩遙に劣れり。唯此時代は、野蠻人の心が其殺伐を事とせし軀態より一轉して、精神的理想的の方向に精進せし時なるを以て、輕々に此變遷を看過すべからず。此時代が、かく下より上に向ひし趣を明にするにあらずば、中世紀の教育は解すべからず。

第六節 中世紀教育の大體の傾 シュミット、中世紀の教育が大體基督教の抑制的精神に依りて支配せられしことを説きて曰く、基督教會の發達の始めに於ては、すべての智力的興味を押領せしものは宗教なりき。人々今は内に省みて神と相接し、消滅するものに屬せずして不滅の者に屬し、見ゆべき者に屬せずして見ゆべからざる者に屬するを感ずるに至れり。今や超自然即ち神が大なる力を以て人の心を攫めり。人は神の子として、此現世には唯一時旅客として來りたる如く感じ、此世界の崇嚴なることも、殆んど價值なく感ずるに至れり。此世界の美は既に古代に盡きて、今後は此浮世には最早望む所なきを感ずるに至れり。而して其代りに天國が其位置を取り、此世の市民は天國の市民となるに至れり。天國に屬するものとして、人をかく超絶的に宗教の一方面より解することは、宗教改革前の重なる傾にして、此の時代に於ては、基督教は、現世を否定する者と見えき。宗教界が獨り眞實の世界にして、此現世は價值なきもの、人生の目的には關係なきものとせられ、従つて此現世を卑む抑制主義行はれたりと。

第七節 中世紀の教育事業 中世紀の教育事業は、かくの如くしてすべて基督教

と關係し、或は基督教につれて起り、或は基督教に對する反動より出でたる者あり。其事項を分ちて(一)寺院學校 (Monastic Schools) (二)僧院學校 (Cathedral Schools) 及び寺領學校 (Parochial Schools) (三)チャーレンマン帝の教育事業(四)武士教育(五)庶民教育(六)女子教育(七)貧民教育(八)煩瑣學派の勃興(九)科學的精神の勃興(十)大學の起源となす。

第八節 寺院學校 初代基督教徒の間に行はれたる問答學校は中世紀に至り嘗て一たび羅馬帝國を組織したる諸國に廣げられたるは勿論、今の歐洲諸國にも漸次に設立せらるゝに至れり。中にもセント、ベチダイクトが、五百三十年、伊太利のカッシノに建てたるものを最も完全なるものとす。かゝる學校は、實に當時壓制せらるゝものに精神上の慰を與へ、是迄基督教を知らざりしものに基督教を教ふる場所となり、科學技術の保護場となり、古代の文學を保存して之を後世に傳ふる媒介場となれり。

寺院學校の組織は、羅馬時代に於けりしものと同じく、宗教的人を作る目的にして、學科は所謂七個の自由藝術を含み、此七術更に三科 (Trivium) 四術 (Quadrivium) に分る。三科は拉丁、文法論理學及び修辭學にして、四術は數學、幾何學、天文學、音樂なり。

読み書きは拉丁文法の中に含められたり。先づ拉丁語は教會の語とせられ、聖書を解するには缺くべからざるものにて、教育の根底とせられたり。聖書及び羅馬にありし教會の長老等の書、主として讀まれたり。論理學は希臘のアリストートルの論理學即ち三段論法用ひられ、修辭學は主にシセロ及びクインチリヤンの書用ひられたり。數學は甚だ不完全のものにて、數の神秘的性質を了解する爲めに教へられ、幾何學は單に其初步に止まり、天文學は寺院の祭日を定むべき必要の爲めに教へられ、地球を以て中心とする説明をなせり。音樂は主として讚美歌を歌ふが爲めに教へられたり。而して此七術を完全に習得するには七ヶ年を費したり。

第九節 僧院學校及寺領學校 寺院學校と並び、僧院學校及び寺領學校も起れり。僧院學校は八世紀に於て、僧正クロデガンクが創めし所にして、漸次各地に設立せられたり。其目的は主として僧侶の候補者を養成するにありて、他人を入れざりしにはあらずるも、之は寧ろ附屬の觀ありき。従つて其教ふる科目も、寺院學校と似、七術を含みしとはいへ、其殊に重きをおきしは宗教の事柄なりき。寺領學校は、

僧侶の監督の下に、各僧正區に建てられたるものにて、一般人の若者に、基督教の初步を知らしめ、禮拜の道を知らしめ、遂に教會組合に導き入るゝにあり。其目的略羅馬時代にありし問答學校に似たり。教科目は多く宗教に關して問答を試みたり。要するに僧院學校は寺院學校を學び、寺領學校は問答學校の精神をつぎたるものにて、其僧院學校の寺院學校に異なる所は、外學よりも寧ろ内學の教育に力を盡し、迄にして、寺領學校の問答學校に異なる所は問答學校が主として異教徒の學問あるものを導き入れんとしたるに、寺領學校は無知なる民を己が教會組合に入れんとしたる點にあり。

第十節 シャーレマン帝の教育事業 シャーレマン帝は中世紀の明君なり。七百四十二年に生れ、ペピン王の子にして、今の獨逸佛蘭西及び伊太利を一緒にして支配せり。帝の理想は、獨逸種族の自由なる精神と基督教とを結合して、其領土に今一度新なる羅馬帝國を建てんとするにありて、其治世四十六年間、一意此理想の爲めに働きぬ。

帝は此目的の爲めに四方に向ひて戦を爲し、と共に、常に國內の統一を計り、其人

民の開明を進めんことを計り、先づ僧侶は法令を傳へて其學問を奨励し、而して又各寺院は其從來存在せる寺院學校、僧院學校を維持するのみならず、之を擴張し、新設し、而して猶村落の僧侶は、甞に宗教を教ふるのみならず、讀み方、書き方、美術及び唱歌をも教ふべしとせり。蓋し今日の獨逸、佛蘭西文化の發達は、帝に負ふ所多く、獨逸の國民歌の如き、帝が制定せしめしもの多し。

帝は斯くの如くして一般の教育に注意すると共に、己の許に學問ある僧侶學者等を集めて學問上の研究を爲し、又其宮廷内に一の模範學校を起し、自ら此學校に通學して拉丁語、希臘語、修辭學、天文學を學び、自身の四男二女をも此所に學ばしめ、時に此學校を巡視せり。或時帝は最も勤勉なる生徒と最も怠惰なる生徒とを撰び、出し、之を右と左とに立たしめ、其左なる怠惰なる生徒が貴族の子弟なりしを以て、其富と門閥とに誇るべからざることを懇々誡めたることあり。

帝が招待せし學者の中に、英國のアルクイン(七三五—八〇四)あり。氏は帝を教へ、其兒女を教へ、又其模範學校を監督して大に帝の教育事業を翼賛せり。氏は此時代にありて文學の復興者と呼ばれ、今の獨佛兩國の普通教育の創立者と謂はる。

氏は常に汲々として希臘羅馬の古文學と基督教の教義とを調和せんことを試み、一の基督教的のアセンスを打ち建てんことを力めたり。氏が教授法はソクラテスの如く疑問をかけ以て生徒の心を開發するにありしが、又氏は生徒自らに疑問を起さしめ、教師は之に答へて其知能を啓く方法を執れり。帝の長男ヘピン問ふ、眠とは何ぞ、氏答ふ死の面影なり。又問ふ、躰とは何ぞ、曰く精神の被なりと。

帝の力に依り、一旦は教育大に振ひ興りしが、其八百十四年に崩せられし後は、其志を繼ぐ者なく、而して其領分は後全く今の獨佛伊の三ヶ國に分れたり。

第十一節 武士教育 中世紀にありて、社會の階級は三つに分れたり。僧侶、武士及び農工商是なり。僧侶は知識の鍵を有し、救濟の權を握り、政治上にも精神修養上にも大に其權力を振ひたりしが、十一世紀に、封建制度成りて、君主の權稍々加はり、加ふるに十字軍に於て武士が重要な役目に當りたるより、武士の勢力は僧侶以外に於て、政治上、道德上、輕からぬ位置を占むるに至れり。さきに第八節と第九節とに僧侶の教育を説きたれば、本節に於ては武士の教育を説き、次節及び第十四節に於て農工商と貧民との教育を説かんとす。

武士は封建制に伴ひて、十一世紀に起りたる階級にして、近世の始め、封建制の仆るゝと共に廢れたり。此階級は、上言ふが如く、僧侶以外に勢力を揮ひたるものにして、其教育も亦宗教を本とせりとは言へ、教會の教育とは反對の觀を爲し、教會の學校が怠りて爲さず、又之を禁止せる事柄に重きを置きて教育せり。即ち躰育を奨勵し、社交に習はしめ、名譽の念を鼓舞し、國民的感情を起さしめたる如きこと等にして、所謂武士道を其教育の中心とせり。武士道は基督教を本とせりとは言へ、亦一種異なりたる要素を含めり。武士の教育が如何ほど僧侶の教育と違ふか、又それが如何ほど歐洲人の道德心を高めしかば、次第に説き行く中に明なるべし。蓋し何れの國、何れの世にありても、中等種族が國家の中堅となるものにて、此中等社會の教育の高下盛衰は、其國家社會の開化の依りてかゝる所なり。中世紀の教育に於て武士教育の輕視すべからざるは、猶我國の教育史に於て、武士教育の輕視すべからざるが如し。

武士は更に委しく分てば、王侯貴族及び武士の二つとなる。王侯貴族の教育は、宮廷學校に於てせり。宮廷學校の教則は、畧寺院學校に似たるが、此外に王侯貴族たる儀式氣風の養成と、武藝と修練とを以てせり。シャールマン帝の學校は、其濫觴とも見るべし。一般の武士の教育は、生れてより二十一歳までに施すものにして、之を三つの均しき時期に分つ。第一期生れてより七歳までは母の許に養育せられ、乳母、看護人監督の下に養育せられ、昔譚や軍歌を聞き、遊び事には軍の眞似を爲す。七歳より十四歳に至れば、諸侯の宮廷又は他の武士の家に托して給仕と修學とを爲さしむ。當時諸侯の宮廷は、學者、音樂者の集り來る所たりしのみならず、又武士の子弟の教育所たりき。此七歳より十四歳迄を小姓と稱す。此間は主として夫人に給仕するものにて、其命令を聞き、其用を達し、其食膳に侍し、其散歩外出に伴ふ。此間に貴族の風儀を見習ひ、武士たる修養を爲し、身躰並に精神上の鍛鍊を爲す。身躰上の鍛鍊は武藝及び遊戲にして、其學ぶ所は音樂、宗教上の教義、將基及び輕き武器の使ひ方にして、自然の見習に依りて、更に從順と禮儀とを教へらる。彼等は絶えず高尙なる貴女、勇敢なる武士に圍まれ、早くより禮儀に慣れ、名譽、愛情及び勇敢の念を以て充たされ、殊に其給仕する夫人に純潔の愛を注ぐ。ハラム曰く、宮廷の神學院にては神を愛することゝは、一の結合せる義務とせられ、

其夫人に忠實なる考は、同時に神の救を得る考とせられたりと。此際、數多の小姓一宮廷に集り居る場合には、特に一人の若侍若しくは武士を撰んで之が監督と訓練とを命ぜり。其教育法全く修學と給仕とを結合せり。

十四歳より二十一歳に至れば、其境遇全く一變し、夫人の給仕を已めて、専ら主人に給仕す。此間を若侍といふ。此時に至りては、主人の劔を奉じ、其武器に手入し、其馬を飼ひ、其獵に伴し、其仕合ひ場に從ひ行き、又實地の戰場に從ふ。戰場にては常に主人の後に從ひ、之を介抱することを怠らず、其危険の時には之を救ふ任を負へり。宗教の教義と音樂とを修むることは、前よりも一層深くなり、外國語をも學び、拉丁希臘の古語に及べり。武藝として學ぶ所は、射、御、游泳、擊劔にして、狩、將、碁の熟練をも習へり。

此小姓の時期、若侍の時期を通じて、宮廷内又は武士の家庭内に行はれたる詩歌管絃の合奏は、大に其情愛を鼓舞し、其勇氣を勵すに力ありたり。管絃に合せたる詩歌は、今に戀歌(Minnelied)として残れり。此時代には、新聞紙、小説、或は劇の如き人の心を樂す遊なかりしより、冬の長き夜か、雪霰の折には、城内の單調なる生活を破る

爲め、一同大廣間に集り、中央の爐を圍みて管絃に合せ、右の戀歌を歌へり。もとより此時歌ふものは、戀歌のみならず、勇壯なる所業を稱賛したる歌もありき。音樂を用ひ、一同相集りて互に感情を交換し、其相互の懇親を重ねる間に、暗々に一種の感情教育を施したり。

二十一歳に至れば、其多年の望達して初めて武士となる。武士となる時には、鄭重の儀式あり。先づ武士となるには、其罪を懺悔して一夜を祈禱に明さるべからず。然る後、沐浴して新衣を着け、教會に於て次の八個條の誓を爲さるべからず。第一條神を恐れ、神を敬し、神に仕へ、あらん限りの力を盡して教會を保護し、万一基督教徒たる面目を汚すことあらば、寧ろ死して之を謝すべし。第二條己が仕ふる君主及び祖國に對して忠實に且つ勇敢に戦ふべし。第三條婦人の權利を保護し、寡婦、孤兒、及び若き婦人の友たるべし。第四條報酬利益の爲めに動かされず、一に名譽と道德との爲めに働くべし。第五條公共の安寧と利益との爲めには身を惜まざるべし。第六條我が忠實の心を世界に現はし、又同む仲間に見すべし。第七條我が仲間を敬愛するは勿論、親近の者又は路傍の者をも敬愛すべし。第八條若

し己が仕ふる夫人の爲め危難を冒すべきことあらば、死だも辭せざるべし。誓終り、司式者たる若君は、其候補者の頸を太刀の裏もて軽く打ち、之にて式を終る。かくて武士となりては、仕合ひに出づることを得。仕合ひにて勝つ時は、其勝ちたる者を祝する爲めの音楽起り、當日の女王の前にて賞を受く。サー、ウォーター、スコットの小説の中には、能く此武士の面影を寫せり。此試合は大に武士の勇氣を鼓舞せしは勿論、小姓若侍の實地の教育となれり。

武士となる時に誓ふ個條は、即ち武士道にして、武士の教育は、かゝる誓を全うし得る如く仕向けられたり。此武士道は、獨逸種族の固有の性情とも言ふべき勇敢の氣象と婦人を敬愛することとの二つに加ふるに、基督教的の情愛を以てせるものにて、一種の道德を發揮し、其詩趣に富めるは、實に歐洲中世の花とも言ふべし。彼等は常に神に捧ぐる我が生命は君主に、我が真心は夫人に捧げ、我が身に求むるは名譽なりとの訓言を守り、教會、婦人、弱者、幼者の保護者となりき。敬神の念に富み、祖國と君主とに忠にして、婦人を敬愛し、一切の弱者を救ふ所の義侠の念に富み、かねて名を重んずるを其理想としたり。従つて其教育は、教會の教育と頗る其趣を

異にし、彼等の如く厭世的ならずして社交的に、又詩趣的に、彼等の如く婦人を卑く見ず、其情愛の的とし、彼等の如く身体を卑しめず、却りて大に之を練り、彼等の如く人類のみを眼中に置かず、國家的感情を鼓吹したり。これ一部は基督教の感化あるも、又一部は其足らざる所を補ひ、之に反抗したる趣あり。而して其理想とせし所、純潔にして大に高尚なる所ありしを以て、中世紀の野蠻の風を脱するには、基督教と相並びて大に力ありたり。武士の骨は朽ち、其劍は錆びたれども、其精神は長へに残り、今日いふ眞の紳士は、實に武士の理想とせし寛大禮儀、及び基督教的の情愛を意味し、其感化今日に及べり。武士は中世の花、而して其花の更に花とも言ふべきは、武士道なりき。而して此武士道を全うする教育としては、修養と給仕とを結合し、言説よりも寧ろ模範に依りて、自ら薰陶したり。これ實に當時精神的修養の華を集めたるものといふも不可なる所なし。

第十二節 庶民教育 武士が十一世紀頃より僧侶以外に一大勢力を爲して、其教育を施したるとに對し、同じ十一世紀頃より、獨逸、佛蘭西、英吉利及び以太利に、各都府の勢力大に高まりて、商工の社會一大活動力たるに至り、是等の實業者、其位置を

自覺し、其獨立を希望する所より、自ら教育を要するに至り、實際の生活に必要な事柄を知らしむる計畫を爲すに至れり。中世紀に於て、此實業者の階級が、其獨立を希望し來りて、社會の一大活動力たるに至り、所謂自治制の萌芽は發するに至り、今日歐洲人が如何なる階級の民に至る迄も、割合に自治の精神に富めるは、此時代より其教育を施されし結果なり。而して是亦同時に近世に於ける普通教育の基礎を爲せり。

獨逸のハムアルヒ、リノーベック、伊太利のヴェニス、ゼノアの如きは、當時の都府の最も大なるものにして、皆其都府の學校を有せり。其教授する科目は、讀書、習字、及び算術の三科にして、之に地理、歴史、理科がそれらの國語にて教へられき。學校は之を都府學校とも、庶民學校とも、亦手習學校とも呼べり。拉丁語を教へたる所は稀にして、多くは國語を以てせり。是等の庶民學校は、其起源よりするも、其目的よりするも、共に宗教に關係せざることなるに、當時宗教の權力強かりしより、僧侶は重なる教師となり、恣に其勢力を揮へり。されば僧侶の專横に對して、都府の役人は屢々反抗して争を起し、或時は僧侶が勢を占め、或時は都府の役人勢を得たり。而し

て其都府の權力勝れる時には、約定を以て教師を備ふ。約定として、先づ一年間、一人の首席の教師を備へば、其教師が自ら其助教師を備ひて之を使用す。其俸給は何れも少くして口を糊するに足らず。されば、教師は、中には傭主を求めて、町より町へとさ迷ひ、甚しきは「流れ教師」と稱する者ありて、二三の無頼の生徒をつれてさ迷ひ歩しものなどありて、其生徒等は折々食物金錢を強請することあり、爲めに教師の識は甚だ沈淪せり。此時の學校は、別に學校としては建てられず、寺院か都府の公共の建物か或は貸家の中に於てせられき。

第十三節 女子教育 中世紀の間、女子教育は武士の階級の外は殆んど不注意に附せられき。僧侶の階級に於て、尼の中にも學問に勝れたる人ありしも、之は少數なりき。

武士の階級にありては、女子教育は大に重んぜられたり。其七歳まで、母の監督の下にありて家庭教育を受くるは男兒と同じきが其長ずるに従ひ、母より紡ぐこと、編むこと、織ること、縫ふこと、其他女子に必要な技藝を學び、同時に宗教及び讀み書きを學ぶ。佛蘭西語及び拉丁語も、當時の武士の間に用ひられたるを以て、之を

學次、歌及び音樂の奏し方をも學ぶ。此間母は常に言葉の上より、實例の上より、少女の心に嚴格なる躰を施し、異日武士の妻となる時の準備として、鎧の着方、武器の取扱方を教ふ。然る上にて、宮廷又は信用ある武士の家に上り、風儀を見習ひ、行住座臥の禮、客を應接する時の心得、食事の心得、遊戯舞踏の心得、高き人低き人に接する心得、男子と女子とに對する心得を學び、同時に雄々しき感情を養ひき。庶民の子女の教育は殆んど怠られき。中に志ある者は、寺院學校、僧院學校、又は寺領學校に學ばしめしが、其教ふることは主として宗教に限られ、教育としては見るべきものなかりき。

第十四節 貧民教育 中世紀にありて、希臘羅馬にては殆んど教育の惠に與ること能はざりし實業者の階級が、教育に着手したると共に、又貧民の教育にも着手せらるゝに至れり。これ一は社會の進化が、上流より下等社會に趣く必然の順序に依り、又一は基督教博愛の精神に依れり。

十三世紀頃より歐洲各國の僧侶は、貧民教育に心を寄せしが、十四世紀に、獨逸のゲルハルト、グロートル(一三四〇—一三八四)が組織したる共同生活組合(Bruder des Gemeinsamen Lebens)は、殊に貧民教育を其主なる事業とせり。此組合の人々は、皆自力にて生活して、公共の爲めに盡し、實に清淨なる生活を爲したれば、此組合は次第に同情を得て、法王の保護をも受くるに至り、北獨逸にては、非常なる勢力を以て廣がり、近世の始め迄其事業殘れり。

此組合の者は、何れも信心堅固にして、其設立せる學校は、初めは單に貧民に教育を與ふるを務めたれど、後には高等なる學校をも設立するに至れり。是等の學校にては、基督教の教義を知らしむると共に、知識を得ることも重んぜられ、若き者の實際の宗教的訓練を爲し、堅固なる敬神の念を養ふことを主なる目的とせり。従つてあらゆる學科は基督教の精神と關係して教へられ、生徒は宗教をば最も必要なる人間の興味とし、すべて眞の教育の根底と信ぜり。さりとして決して知識を卑むにはあらず、有用なる知識を授け、又之れを授くる善良の方法をも工夫したるより、生徒は文學と科學的研究とに熱心し、歐洲各國より生徒集り來るに至れり。其教師の中にて名高かりしは、トーマス、エ、ケムピスト、ニコラス、クザニスとにして、能く此組合の教育事業と、當時の弊風とを矯むることゝに盡力したり。蓋し此組合

は、當時の教會が、眞に基督教的の精神より其宗教事業を經營せざるに反抗し、眞面目に憐れなる同胞の爲めに盡さんと試みたるものにて、庶民學校と共に普通教育發達の根底を爲せり。

第十五節 煩瑣學派の勃興 煩瑣學派(Scholasticism)は、九世紀より漸々起り來り、十二世紀十三世紀に其發達の頂點に達し、中世紀の終まで存在せり。其目的、宗教の教義を哲學にて證明し、其確實なることを證據立て、以て益々宗教の基礎を固くし、一切宗教に疑を容るべからざるやう計らんと力めたるものにて、神學と哲學、言ひ換ふれば、信仰と知識とを同一根據に置き、依りて以て其動もすれば相離れんとするを拒ぎ、若し其の相離れんとする場合には、寧ろ哲學を神學の奴隸となさんとせしものなり。而して其哲學とは、アリストートルの哲學、就中其演繹的論理學即ち三段論法にして、之を本として、宗教の根據を堅めんとせり。此時代の人は、知力淺薄、與へられたる前提を以て結論を引けば、それ既に永久變ずべからざる眞理なるが如く思へり。故に此時代には、眞正の科學哲學といふべきものなく、會々之あるも、畢竟忠實なる奴隸たるに過ぎざりき。十七世紀の佛蘭西の教育家アッペ、フリュ

ーリが、實物を精密に實驗することを爲さず、唯言葉と思考とに依り、浮華淺薄なる論法を以て、鹿爪らしく道理を得たりと爲すは、是れ愚民を威す最上の手段なり」と嘲けれるは、能く此派の弊を穿てり。此學派の攻究せる問題の中には、針の先に幾人の天使が立ち得るかといふ如きものなりき。しかも是は其弊なり。此派は實に古代の哲學と基督教とを結合し、以て宗教に合理的基礎を與へて、歐洲人の信仰を繋がんとしたるものにて、恰もアルクインが、古代の文學と基督教とを調和して、此時代の人心を高めんとしたるに對し、此時代の人の知力を啓發するには、大に與りて力ありたり。而して此派の中に有力の學者出で、教育に力を盡すに至れり。其最も有名なるを、アベラル及び、トーマス、アックイナスの二人と爲す。

アベラル(一〇七九—一一四二)は、巴里大學を起したる人にて、明白なる頭腦と、無比の雄辯とを有し、アリストートルの哲學を神學に應用して、其學理的根據を與ふるには、實に機敏の働を有しき。氏は巴里の一僧院學校にて其哲學を講じたるが、其周圍には常に數千の學生群がれり。當時印刷物なく、書物も少き時に當り、其天賦の雄辯を以て、宗教に明快なる説明を與へたれば、氏が常に歐洲諸國の學生を引く

中心となりしも宜なり。氏は人心の自由なる發達を希ひ、人の良心を啓培して、天地に對し、俯仰恥づることなきが如き人を作らんと志し、講義の間、常に此心を以てせり。然るに端なく其生徒の一人、ヘロイゼといふ女子と關係ある風聞を立てられしより、頓に人望落ちき。氏が講義したる巴里の僧院學校は、即ち巴里大學の基を爲せり。

トーマス、アックイナス(一二二五—一二七四)も、此派のよき代表者なり。氏は以太利チーブルスの生れなるが、夙に巴里に來りて學び、後コロン及び巴里の僧院學校にて、哲學神學を教授せり。氏は性格高く、論理學を神學に應用する手腕は、此派の第一流と言はれ、又其性行の高かりしより、天使の如き博士と呼ばれたり。其著書の中に、教師論あり。中にすべての學問は、既に定まれる學問に基るせざるべからざる旨を言へり。以て其學風を察すべし。

此學派は、中世紀の末に衰へしが、其影響は近世の始めまで残り、當時の人の智力、從ひて當時の教育を進むるには、一大刺戟となれり。

第十六節 科學的精神の勃興 中世紀は、一概に暗黒時代と言はるれど、人心は何

時までも無知蒙昧に終るものにあらず。既に中世紀の中頃より、人々基督教の言ふ所にのみ満足せず、眞理を眞理として學ぶ科學的精神は次第に高まり來れり。煩瑣學派の如きも、一面は此要求に驅られたるものなり。基督教の説く所ばかりにては、人々承知せず、こゝを以て希臘の哲學を借り來りて、基督教の教ふる所も、亦根據あることを示さんとしたるもの即ち煩瑣學派なり。此科學的精神を覺して、次第に近世の文明を開く先導を爲したるものは、東方亞利比亞人の影響と、十字軍と、今一つは英國の科學者なり。始めの二つは外部よりの刺戟、後の一つは歐洲人自身の自覺なり。

亞刺比亞人は、七世紀頃より、モハメッド(普通にマホメット)(五七〇—六三二)の教を奉じ、左の手に「コーラン」を持ち、右の手に劍を握り、亞細亞、亞弗利加を征服し、遂に歐洲に侵入して、西班牙を其根據とし、學校を建て、圖書館を設け、希臘及びアレキザンダリアの文學哲學を翻譯し、十世紀頃には、西班牙は學問の中心として見られ、文典、數學、天文學、哲學、化學、醫學の如き、皆十分の進歩を爲し、是等のもの、十一世紀頃より、漸々歐洲の本部に入り來れり。煩瑣學派の如きも、亦亞刺比亞人より、アリストー

ルの翻譯を得て、大に其學派の勢力を高めたり。
次に十字軍は、亞刺比亞人及び土耳其人より、耶蘇の墓地を回復せんため、十二世紀より十三世紀に亘り、四回ほど歐洲各國舉りて東方に遠征したる目覺しき出來事なるが、之に依り、歐洲人は、東方の風土、人情、文物制度に對しても、取るべき所あるを認め、人間知識の境界次第に廣がりて、又宗教や古代の文學哲學にのみ其心を束縛せらるゝを潔とせざるに至れり。

猶今一つは、英國の僧侶なりしロッチャー、ベーコンと、アルバータス、マクナスとが、夙に獨立して自然科學を研究し、次第に科學的精神を鼓吹したることなり。此二人は、共に十三世紀の人なりしが、當時人は見て以て魔術使ひと爲しきといふ。斯くの如くして、中世紀には、人智次第に覺め來りて、是迄神學古文學の奴隸たりしもの、異郷士の文學哲學に對する興味を起し、同時に天然自然に對する研究心を起すに至れり。此結果として、文藝復興、宗教改革、自然科學の勃興は起らざるを得ず。而して中世紀の舞臺爲めに一變するに至れり。
第十七節 大學の起原 中世紀の末、科學的精神の漸次盛んにならんとする一現

象は大學の起原に徴することも得べし。大學の起原は、必ずしも基督教に對する反抗に出でしにはあらず、其中には、在來の僧院學校の漸く發達したるものもありしが、又一定の場所に於て、學問研究の爲め、學者の會合したるに依りて成りたるもあり。大學なる名は、實に拉丁語のユニヴァルシタス即ち團體の語に出でたり。而して其僧院學校の發達せしものといへど、科學的精神に驅られて、成るべく教會の羈絆を脱せんとするに至れり。

大學の最も古きは伊太利のボローナにして、主として、法學を教授せり。此大學、十二世紀の終には、生徒一万二千人ありて、諸外國より集り來れり、同じく伊太利のサレルノ大學も、畧々同時に起りて、醫學を主とし、同じく獨佛の人は元より、猶太人、亞刺比亞人等も來り學びき。巴里大學は、前に言へる如く、アベラルの勢力の下に、僧院學校より漸々發達し、千百四十年には大學となれり。始めは單に神學、文學を教授せしが、後、法學、醫學を加へて、都合四個の分科大學より成るに至れり。此大學には、英獨兩國よりも學生來り、歐洲文化の中心となり、十三世紀には、生徒二万人もありて、皆其國々に依りて此大學の寄宿舎に入れり。英國のオックスフォード大學は、九世

紀頃、アルフレッド王に建てられきと傳ふれども、其真に大學の躰裁を爲し、は十一世紀の末にあり。千二百〇一年には、此學校に三千人の學生ありき。ケムブリッジ大學は、十三世紀に起れり。前者は神學を主とし、後者は數學を主とせり。獨逸大學の最も古きは、千三百四十七年に建てられたるプラーク大學を始めとし、千三百六十五年にはウイッナ大學建てられ、千三百九十二年にはエルフルト、千四百〇九年にはライプツヒ、千四百十九年にはロストック、千四百五十六年にはクライフスツァルド、千四百五十七年にはフライアルヒ、千四百七十七年にはチヒンゲンなど建てられたり。

是等の大學、始めは多く一科の専門を以て起りしものなるが、後には大抵神學、文學、法學、醫學の四分科大學を備ふるに至れり。而して所謂七個の自由藝術は、是等の中に自ら含めて教へられたるが、中世紀の末には、物理學なる一科學、稍々形を備へて教授せらるゝに至れり。もとより其物理學といふは、主としてアリストートルの説きし所を本とするものにて、自然を觀察し、又理化學の試験を爲す如きことなかりしも、以て自然科學が、漸々人の注意に上り來りしを見るべし。是等の大學に

用ひらるゝ言葉は拉丁語にて、國語は却りて卑しめられたり。其組織に至りては一體ならずといへども、總長、分科大學長、幹事及び教授を以て成れり。卒業の生徒には、分科大學長の推薦を待ちて、總長より學位を授與せり。大學には皆特權あり。大抵自治躰にして、自ら裁判權を有せり。大學の勢力斯くの如くして次第に高まるに至りしより、其起りは、成るべく宗教を離れ、科學的に學問を研究するにありたるも、教會及び政府は、各々之を己が勢力の下に結ばんとするに至れり。シニョットシニョットいふ、教會は信仰の力と知識の力とを結ばんが爲め、法王より大學に保護を與へて之を利用するを計り、政府は其力を扶植し、其知力的根底を堅めて、一般人の開化を進め、以て其國力を増進せんが爲め、之を教會より離して、大學に獨立の位置を與へんと争ひきと。當時大學生の風儀は甚だよろしからざりき。ウイッナ大學の生徒心得の一に曰く、「生徒たるものは、飲酒、爭論、及び勝負事の遊に時を費すべからず。街道に於て不躰裁のことあるべからず。夜許しを得ざる家に宿泊し、或は人の物を盜むが如きものは、一度訓誡を加へ、猶改めざる者は、大學生の特權を剥ぎて之を放校に處すべし」

と。

大學かく歐洲の各地に起りしより、之が豫備校、各地に設立せらるゝに至れり。而して是實に近世の中學の起源なり。

第十八節 中世紀の教育に對する批評 第一に中世紀の教育を時勢の關係の上より觀察するに、此世紀は既に述べたる如く、チートン人殊に獨逸種族が、其自由なる精神を以て、希臘羅馬の文明と、基督教と、東方亞刺比亞の科學とを消化し、以て近世の歴史を開く準備を爲し、時代なり。此三つの中、亞刺比亞の科學は、十一世紀頃より次第に歐洲に入り來りしを以て、其最も深く且つ長く中世紀を支配せしものは基督教と希臘羅馬の古典となりき。就中基督教最も勢力を占め、希臘羅馬の古典は、寧ろこれが附屬たる觀ありき。従つて基督教は教育の根底となり、中世紀の教育と言へば、殆んど宗教と關係せざるはなかりき。今日言ふ如き普通教育は、既に寺院學校、寺領學校として、僧侶の手に經營せられ、大學すら其源を寺院學校に發せしものあり。こゝを以て、中世紀の教育を一言に評すれば、宗教々育を其根底とし、古典を其材料とし、一切の教育事業を擧げて之を宗教に捧げ、國家よりは天國

現世よりは來世を重んずる傾を取りたりといふべし。中世紀の教育は、希臘が美的の教育を施し、羅馬が實踐的の教育を施したると比すれば、何等の特色なく、寧ろ是等傳來的の者を其據る所とし、偏に宗教に傾きたるものにして、今日より見れば、偏頗の教育を施したるものなりと言はざるべからず。

しかも亦此中に意味なきにあらざ。チートン種族の自由なる野蠻的の性質は、是等宗教と古典との爲めに柔らげられ、高尚にせられ、眞面目なる人生問題に觸れて、彼等は嚴格なる宗教的、道徳的生活に入れり。十字軍の如きは、其宗教に熱せし一例と見るべく、煩瑣學派は、其信仰を道理立てんと苦心したる一例と見るべく、而してクルーテが起し、共同生活組合は、基督教の精神に從つて教育事業を營みし一例と見るべし。中世紀の教育が宗教的なりし影響として、歐洲人は高尚になれり、博愛の精神に富むに至れり、而して其固有の自由の精神は、之か爲めに善き方向に育て上げられて、以て近世の文明、近世の教育を生むに至れり。歐洲近世の文明は、希臘羅馬の文學、基督教の教義、及びチートン人の自由なる科學的精神とが相抱合して成れりといふ概論を眞なりとせば、中世紀は正に此三つが相交錯して、近世の

文明を生む準備を爲し、ものといふべく、従つて教育史上にありては、中世紀は在來の古典と宗教とを結び付けて、新に己れの教育を起す基を爲し、時期といふべし。

第二に、中世紀の教育を制度の上より見るに、中世紀は、右言ふ如く、宗教家が教育事業を經營せしを以て、希臘に於けりしが如く、國家が教育の權を掌らず、又羅馬に於けりしが如く、私人が奮つて教育事業に當らず、寺院學校、僧院學校、寺領學校は到る所に榮え、教會が國家に代り、僧侶が教育者に代りて教育を施したりしも、其十一世紀頃より、自由市の勢力高まるに至り、都府學校起りて、今日の小學校の基礎を爲し、又科學的精神起るに至り。大學立てられ、其大學の豫備として、今の中學校の萌芽出づるに至れり。而して此中世紀に於て殊に注目すべきは、都府學校に於て、農工商の子弟を教へ、クルーテの共同生活組合に於て貧民教育を施すに至りたることはなり。これ一は社會の進歩に依り、一は基督教の精神に出でたるものにて、希臘羅馬には見ざりし所とす。即ち中世紀にありて、社會の各階級を通じて教育を施すべき氣運に向ひ、而して小學、中學、大學の形稍々備はらんとするに至れり。女子

教育に至りては猶振はざりき。

第三に、中世紀の教育を學說の上より見るに、吾等は此時代に一の教育學說を見出すこと能はず。アルキインの如き、アベラルの如き、アックイナスの如きありしといへども、教育學思想を發達せしむるには格別の効績なかりき。

第四に之を實際の教育方法の上より見れば、其躰育は、武士の階級を除きては、宗教的の考より獎勵せられず。知育として教へらるものは、多く宗教と文學との科にして、自然科學の如きは、概して重んぜられず、唯宗教と文學とを記憶力に訴へて教ふることをのみ計りて、其自由の思考力を伸ばすことをせず、其會々思考力を伸ばす論理學は、形式的論理學にして、コムペーレが之を評して、中世紀にありては、知力に、三段論法の奴隷たりきといひしもの眞なり。訓練に至りては、唯鞭を以て生徒を苦むること行はれ、其良心を自由に發達せしむる如き方法を取らざりき。獨り武士に至りては、學問と實際とを一緒にして、秩序稍々見るべきものありき。

第五に、教育家の出でたる點より見れば、希臘羅馬に於けりし如き、大教育家は見るべからず。基督の如き大宗教育家も出でず。僅にアルキイン、アベラル、アックイナスの

如き人々ありしのみ。但し僧侶皆殆んど教育に従事せしを以て、教育者の數より言へば、希臘羅馬にも勝りたりき。

第五章 文藝復興時代及び宗教改革時代の教育

第一節 文藝復興の由來 中世紀の教育は既に述べたる如く、宗教を其中心とし、之に希臘羅馬の古典を加へざりしにはあらざるも、之は寧ろ宗教の附屬物の如き觀ありき。然るに千四百五十三年、東羅馬帝國の首府コンスタンチノールが、土耳其人の爲めに滅ぼさるゝや、希臘羅馬の文學にして、是迄中世紀の歐洲人に知られざりしもの、一時に暴露せられ、而して此地にありし古典學者は、一先づ伊太利に隠れ家を見出したたり。是より先十四世紀に、伊太利には、ダンテ、ボッカシニ、ペトラルカの三文學者ありて、深く古典の研究を爲し、古文學研究の素地を爲したるが、今又茲に新らしく古典學者が入り來りしに、折よく此時伊太利には、是等の學者を保護する貴族缺け居らざりしを以て、彼等は其保護を得て、盛んに古典研究の熱度を高めぬ。古文書は集められ、翻譯は試みられ、學校は立てられ、圖書館は設けられぬ。熱心なる學者は、英獨佛より來りて、伊太利の教師の許に跪づき、其學者等、更に其郷

國に歸り、此貴重の土産を撒き散らしぬ。かくて古典の研究は、日一日と高まるに至れり。之を名づけて文藝復興と言ふ。

中世紀に於ても、決して古典の傳はらざりしにはあらず。しかも其古典を見る、之を宗教の用に供し、唯死語として之を見るに過ぎざりき。然るに今更に新なる古典が、新なる人々に依りて、熱心に研究せられ、古人の遺書、殊に其歴史、演説、詩歌につき、専心攻究して、其精神に分け入り、直ちに之を活現し來りて、之と理想的の交際を結ぶに至り、茲に新なる精神活躍たるに至れり。古語を古語として見ず、其を古語に含まる精神に接し、之に依り、其耳を清くし、之より引き、其生活の状態を改め、一度希臘羅馬の古風に返りて、粗野を遠ざけ、斯くして一の完全なる人品を練らんとするに至れり。之を人文派(Humanism)といふ。教育史上に於ける人文派は、源をこゝに發し、是より一個有力の潮流となる。蓋し文藝復興は、中世紀の偏狹なる教育に對し、人心が満足せざりし反動にして、其不満足を今燦爛たる古典に依りて満足せしめたるを以て、一時實に非常なる熱心を以て迎へられたるなり。

第二節 文藝復興と宗教改革 文藝復興は、基督教が異教徒として見たりし希臘

羅馬の思想を熱心に追求し、其古風に返らんとするものにて、其新知識新興味を起したる結果、此運動の中心たる伊太利に於ては、從來の宗教に盲従することを爲さず、基督教は一の迷信として輕蔑せられ、經典は希臘の神話に作りかへられ、聖靈は「天の風」と言はれ、神の子基督は「マヒター」といふ神の頭より飛び出でしミナルヴァといふ智慧の神と言はるゝに至り、全く不信心を以て満たされたり。轉じて獨逸を見れば伊太利に於ける如く、破壊的の有様には至らざりしも、之に依りて當時の宗教を改革し、當時の教會が執りし教育の權を奪ひて、新なる信仰に兒童を導かんとする氣運を高めたり。古典研究の結果として、舊約全書、新約全書の批評的意見發表せられ、當時の教會に行はれたる誤謬を正すこととなれり。中世紀の傳説は破られ、教會の專横なる有様に對する不満足の念は高められ、宗教改革者は武器を裝ひて立たざるべからざるに至れり。獨逸にて文藝復興の熱心なる主唱者となりしはアクリコラ(一四四三—一四八五)ロイヒリン(一四五五—一五二二)エラスムス(一四七六—一五三六)の三氏にて、ルーテルは之に次ぎ、宗教改革を叫びて起れり。

第三節 宗教改革 文藝復興の批評的精神は、自ら宗教に及び、宗教に於て必ずし

も法王の命に従ふを要せず、僧侶の言ふ所亦悉く信ずるに及ばず。要は己が心を清くして以て神を見ざるべからず。宗教の唯一の根據は、外部の法王僧侶の説く所にあらずして、内部の己が良心にありとし、己が良心を以て、神の子基督の心に接せざるべからずとするもの、即ち宗教改革の精神なり。此宗教改革の大事業に當り、新に「プロテスタント」といふ一派を開きたるものを、マルチン、ルーテル(一四八三—一五四六)と爲す。

ルーテルが主唱せし新教は、全く當時の宗教の弊に反抗せしものにて、二個の信仰を基とす。曰く人は唯信仰に依りてのみ其罪を許さるべし。曰く聖書のみ宗教的信仰、宗教的實行の唯一の標準たるべしと。従つて新教にては、聖書と人の良心とを其案内とし、從來の如く、人の自由と威嚴とを束縛することを爲さず、個人の責任、個人の自由、個人の威嚴といふ感は起され、聖書を讀みて基督の心に接し、以て神を見んとの研究心は起され、必然に人の智力を啓發する必要を感ずるに至れり。猶新教に於ては、人の日々の務の上に宗教の旨を實行すべきことを唱へ、又百般の科學技術を取り入れて利用厚生の道を計り、以て神の榮光を現はすべきことを主

張し、新教は自ら普通教育の父あらゆる學問の友となれり。

かゝる理由よりして、ルーターは、大に教育に重きを置き教育を奮ひ起すことに熱中し、千五百二十四年、獨逸の各都府に檄して、各都府は須らく公費を以て學校を設立し、以て宗教心を高むると共に、國家社會の富と勢力とを増さざるべからざる旨を言へり。ルーターは、宗教問答を著し、又聖書を獨逸語に譯して宗教の知識を擴ぐることを計りし外、自ら直接に普通教育に關係せざりしも、マンズフィールド公は氏の意見に賛成し、アイズレーベンに小學校と中學校とを設立する計畫を氏に命ぜられ、其他新教を奉ずる國々は、皆此の意見を承けて、鋭意教育に着手し、教育の舞臺殆んど一新し、近世教育の序開きを爲せり。

大學も後に至り、新教徒の手に經營せられしもの少からず。例へば獨のストラスブルク、エナ、ギーセン、ハルレ、瑞西のゼテツヴの如き是なり。

第四節 此時代の教育に對する批評 此時代の教育を、時勢との關係の上より見るに、此時代は中世紀の人心が宗教に傾き、形式に流れたるに反抗し、新なる宗教、新なる材料を以て、人心を教化せざるべからずと意識したる時代なり。即ちチユイト

ン種族が、新精神を以て、宗教、文學、科學、教育を振ひ興さむとしたる時代なり。此現象は古文の復興、新教の創立、及び實科教育の三様に現はれ、何れも教育に新なる道を開く準備を爲せり。故に此時代の教育を概評すれば、チユイトン種族が、其科學的精神を以て、古文學と基督教とを解釋し、是等を科學と結合して、教育界に導き入るゝ地盤を作りたる時代と言ふべし。中世紀にありては、唯古文學と基督教とを調和し、之を以て人を作らむとし、其教育、宗教の一方面に偏せしが、此時代には、此二者を科學的精神より解釋し、結合して、人を作らんとし、教育上、更に一の新なる原素を附加し來れり。

第二に此時代の教育を制度の上より見るに、教育の權を僧侶に委ねずして、之を國家社會の手に奪はむとする新傾向を生ぜるを見る。即ち教育は、父兄若しくは國家社會が負擔すべきものにて、之を宗教家に一任し、只管宗教的人を作るべからず。須らく國家社會に役に立つ人を作るべしとの考起れるを見る。此故に教會を離れたる學校起され、僧侶ならぬ教師が次第に其位置を高め來れり。學校の制度として、大學の盛んになれるは從來の通りなるが、此時代に、中學制度確立せり。

即ち獨逸のスタルム(一五〇七—一五八九)が、ストラスブルクに立てたる大學豫備門は獨逸のみならず、歐洲全軀の文科中學の模範となれり。小學に至りては未だ發達せず。女子教育に至りては、中世紀と均しく等閑に附せられたり。

第三に之を學說の上より見るに、ルーテルが教育制度の論を爲し、佛のラベレイ、一四八三—一五五三、モンテーソン(一五三三—一五九二)が實科教育を主張せる外には、教育論としては見るべきものなし。教育論は十七世紀以後に至り、始めて精密となれり。

第四に之を教育方法の上より見るに、一般に教授を楽しく面白くせざるべからずといふことに着眼し、其教授の材料としては、古文よりも寧ろ國語を先きとし、又次第に實科を其中に加ふべき傾を生ぜり。訓練に至りては、答を以て生徒を苦むることの非なることを悟り、モンテーソンの如きは、切りに學校を樂しき場所とせざるべからざることを主張するに至れり。

第五に之を教育家の出でたる上より見るに、メランヒトン、スタルムの外には、教育家として見るべき人あらず。ルーテルは、自ら教育に當らず、ラベレイ、モンテーソン

の二氏、亦其教育の議論を以て、其進歩に盡しゝのみ。

第六章 十七世紀の教育

第一節 十七世紀教育の總説 十七世紀は、歐洲全軀、新舊兩教徒の争たる三十年戦争に難みし時代なり、かゝる時に、一般の國民、一般の父兄が、教育に心を注ぐことは覺束なきが如き感あれども、然も此間に、獨乙に於ては、小學校令發布せられ、歐洲各國、それ、有名教育家出で、科學的精神を以て教育を論究し、廣く世界的の考を以て教育を經營せり。獨乙には、ラトケ、コメニウス、フラニケ出で、英國には、ベロコンミルトン、ロック出で、佛蘭西には、フェロン出で、而して、ジュニョット派とジャンセニスト派とは、佛國を中心として、歐洲全軀に其教育的勢力を及ぼせり。此等教育諸家の意見は、ジュニョット派を除きては、何れも、(一)言葉を教ふる前に物を教ふべく、或は物と言葉とを結合して教ふべし、(二)知識はなるべく感覺に訴ふべし、(三)語學は先づ國語を以て始むべし、(四)拉丁語希臘語は充分なる教育を受くるに適する者だけに教ふべし、(五)躰育は唯に健康を進むるためのみならず、又紳士と云ふ資格を養成するため必要なり、(六)教授の仕方は自然に従ふといふ原則に依るべしと云ふ考は

大低一致せり。要するに此世紀は、チヤートン種族の科學的精神が最も強く教育界に働きたる時にして、新教育は次第に其芽を延ばし來れり。

第二節 此世紀の教育に對する批評 第一に之を時勢との關係の上より見るに、此世紀は十五六世紀が、中世紀の反動として、文藝復興、宗教改革の二運動を起したる後を受け、歐洲人の科學的思想が最も強く最も明かに働き出したる時にして、其大體の傾は、科學的、實科的なりといはざるべからず。これベーコン、ラトケ、コシニウス、ロックの意見に徴するも、又ミルトン、フランケ、フエテロン、の如き宗教家にてありながら、然もなほ自然科學を取入れて、實用の人を作るべきとを主張したる點につきて之を證することを得べし。即ち此世紀は、在來の教育の要素たりし古文學と宗教とに對し、科學といふ他の一要素が、次第に勢力を得來りたる時なりと見るべし。

第二に之を制度の上より見るに、此世紀は十六世紀に於て、ルイテルが教育の權を僧侶の手より取り上げて、之を國家社會に移さむとしたる精神を實地に現はしたる時代なり。即ち獨逸諸州に於ける小學校令の發布は、之が一例と見るべし。こ

れ教育上に於ける著るき進歩なり。僧侶が教育の權を握り、一に宗教的人を作らむと務むる間は、眞の教育は興らず、之を國家社會の手にて經營し、國家社會の進歩を助くる如き人を作らむとするに至りて、教育制度は務めて完備し來る。此傾は次の七八世紀に於て、一層著るくなり、今の文部省の萌芽と見るべき教育機關起され、又小中大學を通じ、全國の學政を統一せむとする計畫立てらるゝに至れり。然れども此世紀までは其點までは進まず、大學は舊に依り、中學は主として大學豫備門として榮えしも、小學は未だ起るに至らず、其大中小學の相互の關係に至りても、能く統一せらるゝに至らず。猶此時代に於て、フランケが實科學校を起し、又貧民學校及び孤兒院を起し、如き、慥に教育制度の進歩を促したるものなり。

第三に之を學說の上より見るに、此時代は教育學が其科學的基礎を得初めたる時代なり。十六世紀のラベレイ、モンテーンなどに於ては未だ教育が科學的精神よりは攻究せられざりしも、此世紀に及びては、ベーコン、コメニウスを始めとし、科學的精神より教育を論究し、自然主義は、是等諸家の意見を一貫する原理となれり。中にもベーコンは、之を論理の方面より、ロックは心理の方面より論究する道を開き

Bacon-Comenius
Locke-Rousseau

ペーコンの思想はコメニウス之を承け、ロックのはルーソー之を承けて、大に教育思想の進歩を促せり。

第四に之を教育方法の上より見るに、此世紀に於て教授は須らく愉快にすべく學校は樂しき場所たらしむべしといふ意見行はるゝに至り、其教授方法は、一に之を實地實際に訴ふべきこととなり、其材料は又宗教文學に偏せず、科學技術の如き最も實際に關係ある實科重んぜられ來り、而して訓練の如きも、唯答を以て之を罰するは不可なり、宜しく愛情を以て訓練の本とせざるべからざる意見承認せられ、學校管理の上にも、學級を其生徒の學力に應じて分つが如き組織も立てらるゝに至り、中世紀とは其面目大に改まり來れり。

第五に之を教育家の出でたる點より見るに、此世紀は最も教育家に富み、理論實際何れの方面にも偉大なる人を出せり。コメニウス、フランクは其重なる人なり。

第七章 十八世紀の教育

第一節 十八世紀教育の總説 十八世紀は、十七世紀の後を承けて、新教育が新に成立したる時代なり。此世紀に於て、ロックの思想はルーソーに傳はり、ルーソーは

更にハセダウ、カント、ベスタロッチの如き大教育家を起たしめ、新教育の理論と實際と進歩を促し、之と同時に、英佛獨諸國、皆其教育制度を立て、普通教育の基を据え、他方に近世文明の一特色なる理科學の思想は、亦大に進歩し來りて、教育界に新たな教授の材料を供給するに至れり。新教育學說の發達、新教育制度の確立、及び理科學の進歩は、此世紀の教育を進むる原動力となりしものなり。

此時代は前世紀より引き續き、英佛獨諸國、各其歴史に大變動を起し、人々皆理に依りて一切の事を判断し、極端なる個人主義を唱へ、すべて舊物を破壊して新面目を現出せむと力めたり。哲學上に於て、ヒューム(一七一—一七七六)が懷疑論を出し、宗教上に於て、ヴォルテヤ(一六九四—一七七八)が無神論を唱へ、實際の歴史に現はれは、自由平等の精神が奴隸廢止となり、米國の獨立となり、佛國革命となりて破壊せし如き、皆之が現象と見るべし。従つて教育上にも、亦此世紀に於て、すべて舊物を一洗して新なる方向に向ひ、中世紀の遺物なるシェンユット派の如き、亦此世紀に於て全く教育界より其勢力を失へり。故に此世紀を呼んで一洗時代と言ひ、又啓蒙時代とも言ふ。言ふ心は舊風を一洗して開明に入るの義なり。ルーソー(一七一

二一七七八の「エミール」は、最もよく此傾向を代表せるものにて、全く當時の教育を根底より改善せむ希望を現はしたるものなり。

第二節 此世紀の教育に對する批評 第一に此世紀の教育を時勢との關係の上より見るに、此世紀は歐洲諸國が其歴史の舞臺を一洗し、一切理に依り、科學に照して事物を處斷したる時代にして、其人生觀は、極端なる個人主義を唱へられたり。従て其教育の大體の傾は、科學的、實科的にして、個人の完全を希圖する傾向強く、教育は個人の内部より發達せしめざるべからずといふ眞理、愈々明に承認せらるゝに至れり。ウイلمان此世紀の教育を評していふ、從來の教育は基督教の主義に従ひて行はれ來りしが、今は轉じて新方向を取れり。即ち教育は一切從來の教權や歴史を離れ、單に個人其者に本づきて定むべきものにて、個人を務めて内部より發達せしめて、徳あり知ある人たらしむべしとせり。而して又當時知力を尙ひたるに應じて、教授を殊に有力の事業とし、成るべく其方法を改良して以て大なる結果を收めむことを力めたりと。適評といふべし。

第二に之を制度の點より見るに、此時代は、一洗的運動につれて、歐洲各國學制の改

革に着手し、獨逸の普魯西にては、フリードリッヒ大王普通教育法令を布きて普國國民教育の基礎を据ゑ、佛國にてはラ、シャロッテ(一七〇一—一七八五)ローラン(一七三四—一七九四)タレイラン(一七五八—一八三八)コンドルセ(一七四三—一七九四)など、前後相繼ぎて佛國の學制を議して小中學の聯絡をつけ、之を統一すべき中央機關を設くべきことを唱へ、英國には又日曜學校など起りて、下民の教育に着手するに至れり。學制は此世紀に於て小中大學と揃ひて、其間の聯絡を附くべき意見唱へられ、又文部省といふ如き學政統一の機關要求せらるゝに至り、之と同時にバセドウ、ベスタロッチの如きは、知力を以て小學校を經營し、以て小學校の模範を示せり。ベスタロッチの小學校は、瑞國、獨逸、佛蘭西、英吉利、亞米利加の小學校創立に模範を示したり。教師の職も、此世紀に及びては、俗人の中の志ある者之に當ることゝなり、其待遇も稍々改まれり。女子教育に至りては、未だ振ふに至らず。

第三に之を教育學說の上より見るに、此世紀に自然主義を本とする新教育學說はいよゝ成立し、從來の如く兒童を受身の地位に置かずして之を活動的の自發力あるものと見、從來の如く古文學と宗教とを以て人を練ることをせず、自然の材料

を以て實地觀察に訴へて教ふべきこととなり、從來の如く記憶力を練ることに重きを置かず、寧ろ判斷力を練るべき意見承認せらるゝに至れり。ペスタロッチは即ち此傾向を代表して之を實地に行へり。

第四に之を教育方法の上より見るに、右の如き新教育唱へらるゝに至りしより、教授も訓練も之を面白く、楽しく、其の力相應の度に合せざるべからざることなり、從來の如く、教育は苦しきものといふ感じは次第に拭ひ去らるゝ途を開くに至れり。しかもウイلمانが評せし如く此世紀が教育方法として切りに研究せし所は教授法にして、訓練は猶苛酷なりき。

第五に之を教育家の出でたる點より見れば、十七世紀に劣らずといふべし。ルーソーは身唯、教育的の福音と傳へしのみにて、之を教育家とは見るべからざるも、ペダラ、カント、ペスタロッチの如きは、大教育家と稱するを得べく、就中ペスタロッチが一生を普通教育の發達に捧げて、殆んと神らしき生活を爲したるは、教育史上の大紀念にして、同時に今日の教育にも此の精神の猶磅礫せるを見る。

第八章 十九世紀の教育

第一節 十九世紀教育の總説 十九世紀の教育は、十八世紀の一洗時代の後を承けて之を完成せむと試みたる時代なり。十八世紀に於て、中世紀より流れ來りたる一切の弊風を破壊せしものと見れば、十九世紀は全く其新なる面目を現出せむと試みたる時代なり。従つて此世紀は教育學說の上にも、教育方法の上にも、制度の上にも種々なる計畫行はれ、面目全く新になれり。而して其教育の舞臺も是迄は主として英佛獨に限られたる如くなりしも、此世紀に及びては、亞米利加、奧太利、伊太利、西班牙等の諸國も之に加はり、其餘波東洋諸國の教育を振起せしむることにはなれり。

此時代の思想の傾向に三つなり。第一は國民的思想の大に起りたること。第二は歴史的精神の發達したること。第三は生物學の見解の承認せられたること。是なり。教育上に於て、第一の結果として世界各國皆其國民を養成することに着眼して、其制度を立て、又昔日の如く、宗教的、博愛的の教育を主とせず。博愛的の教育は寧ろ國民的教育に加味するに過ぎず。第二の結果として、教育は歴史的發展の重なる事業となり、同時に教育の教科として、十八世紀と反し、大に歴史を重んじ來

り、第三の結果として、社會も一の有機體なれば、個人と社會との關係も、亦有機的關係を爲し居れば、個人を須らく此有機體の進歩活動を資くる如く教育すべしといふことになり、此三つの傾向教育學說の上にも、方法の上にも、制度の上にも明白に現はれ來れり。

第二節 此世紀の教育に對する批評 第一に之を時勢との關係の上より見るに、此世紀は科學的研究の精神最も旺盛にして、其結果殖産興業となりしを以て、教育に於ては、實科を重んずる傾向強く、其極教育學者の中には、一切の古文を排斥し、宗教を排し、全く科學的の教育を施さんと主張せし者すらあり。現今英のスペンサーの如き其一人なり。而して又此世紀は、歐洲各國、其國を立つるに急なりしたため、其國民を作ることに着眼し、十八世紀の個人主義の教育を施せしと反し、國家主義の教育を施したり。しかも概して言へば、此世紀は、其特色たる、科學教育に加ふるに古文學と宗教との教育を以てし、以て多方面に見童の心を開發して、知徳の圓滿なる發達を有し、以て社會に役に立つ如き人を作らむことを其理想としたり。而して歴史的研究と社會學的研究との結果に依り教育と社會と親密の關係あるこ

と承認せられ、教育を以て國家社會を改善する根本の事業と見るに至れり。これ希臘、羅馬や、中世紀などに比して、其教育の特色の頗る異なる所なり。

第二に之れを制度の上より見るに、此世紀に幼稚園、小、中、大學の連絡付き、實業學校の系統や師範學校の系統全く成り、尙不正者を教育する學校も起り、女學校も整備し、而して其を總ぶるに文部省といふが如き一大中央行政機關を設くるに至れり。教師の教も全く専門となり、其待遇次第に厚きを致すに至れり。

第三に之を學說の點より見るに、教育學は倫理學、心理學、生理學の助を得て、いよいよ一科の學となり、其學風につきては、道德の自由を得しむるを企圖するヘーゲル一派、科學的教育學を主張するヘルバルト一派、心理を本として論ずるベネトケ、デッテス一派、ベスタロッチをつげるドイツステル一派及び社會的教育學を主張する英のスペンサー獨のウイلمان、ナトリル、佛のグロ、フィーエー一派ありて各教育學思想の進歩に貢献せり。其研究の盛なる前古に其比を見ず。

第四に之を方法の上より見るに、管理法、教授法は著るく改良せられ、學校は自ら樂しき場所たるに至れり。訓練の改善に至りては、未だ教授法の研究の精なるに及

はず。

第五に之を教育家の出でたる點より見るに、ベスタロッチに比すべき熱誠家はなきも、フレイベル、ディーステルウヰヒを始めとし諸教育家輩出し、殊に教育者の出でたる點より言はゞ先づ當世紀を推さざるべらず。

第九章 教育變遷の概見

以上章を重ね筆を希臘の教育に起し、次第に年代を追ひて今日に至る迄の變遷を叙述し、以て今日の教育が如何なる變遷を経て遂に現在の面目を爲すに至りたるかを考察せり。依りて本章には結論として其變遷の大勢を抱括し、次章に今後の教育が如何なる方向に向ふべきかを一瞥すべし。

歐米今日の文明は、希臘羅馬の文化と、基督教の教義と、チートン種族の科學的精神との三要素より成れることは、歴史家の均しく唱ふる所なり。教育も絶えず其文明と終始する者ゆゑ、矢張此三要素が合體し、以て今日の教育を爲したるは、上來叙述せる所につきて之を見ることを得べし。即ち第一章と第二章とに於て、文學教育に由りて來る所を見、第三章第四章及び第五章に於て、宗教々育の生ぜし所以を

見、以下第六章より第八章に亘り、科學的教育起りて、如上の二要素を結合して、以て今日の教育を成せる所以を見たり。文學教育にては美の人を作り得べけむ、眞と善との人は作るべからず。宗教々育は、眞の人は作るを得べけむ、美と眞との人は作るべからず。科學教育は、善の人は作るを得べけむ、未だ美と善との人は作るべからず。即ち今日教育の理想として、科學、宗教、文學を以て眞善美の爲めに盡すが如き人を作らむとするに至りたる所以なり。今日の教育制度、今日の教育學說、今日の教育方法は、即ちかゝる眞善美を具して成るべく、多く社會的に活動する人を作らむことを希圖するなり。今簡單にかゝる制度、學說、方法の成りし跡を一括して見るべし。

先づ教育制度の變遷より見るに、始めは教育は希臘羅馬の後には、政府よりは格別干渉せず、寧ろ之を私人の業とし、中世紀並に十五六七世紀に至りても、諸學校は重に貴族の保護を受けて初めて成立せしが、十八世紀より十九世紀殊に十九世紀の後半に至りて、歐米諸國は齊しく之を國家の事實とするに至れり。而して其學校設立の傾向は、始めは大學にて貴族的の教育を施したるより轉じて、近世の始めに

至りては中學校を立て、十七八九世紀に至り始めて小學を立て、平民的の教育を施すに至れり。小學を立つると共に、一方には自然科學の勃興に伴ひて實業發達し、他方には如何なる民にも職を得しむべき必要あるより、各種の實業學校發達し、同時に亦女學校も漸次隆盛となるに至れり。

次に教育學の變遷より見れば、教育學は初めは他の學問の附屬、左なくば、人を教育する論又は術として見られ、主として實際實驗を離れざりしが、十九世紀に至り、諸學科の研究歩を進むると共に、教育學は倫理心理の諸學を基礎學とするの傾を帶び、遂にヘルベルトに至り、一箇の科學的組織を得ることとなり、猶他の社會、生理、病理諸學の研究は、愈之が確實なる基礎を供せむとする運に向へり。而して其研究の傾向より云へば、初めは唯個人の修養につき、之を知徳美の諸方面より論究せしに過ぎざりしが、近時は個人を社會團體の一分子と見、之をして社會の進歩に役立たしむる上より論究するに至り、大に社會的、實利的の傾向を帶び來れり。

第三に之を教育方法の變遷より見るに、希臘のソクラテスは流石に、教授の眞諦を捉へしも、其後其精神を繼ぐ者なく、中世紀にありては、全く兒童の能力をば顧念せ

ず、重に記憶力に訴へて學習せしむるを教育の能事としたりしが、近世に至り、ペーコンの歸納法唱へられ、同時にラベレイ、モンテイン、ラトケ、コメニウス諸氏の自然主義唱へられ、猶ロック、ルーソーを經、ベスタロッチに至り、教授は一に兒童の自己活動に訴へ、其心意自然の發達を顧みることとなり、ヘルベルト、ディステルウヰヒに至りては、此論一層精密となり、教授は切に之を教育の目的に統合すべきこととなり、各科の精密なる教授細目規定せらるゝに至れり。而して其教科は、希臘羅馬にありては主に文學、中世にありては神學なりしも、近世に至り、自然科學之に加はることとなり、教科は文學的のもの、宗教倫理的のものと自然學科的のものとを含み、之を實際に役立つやう教授すべきこととなり。

而して是等の制度、學說、方法の確立して今日に至りたるは、即ち教育に盡し、先人の賜なり。吾等はソクラテス、プレトリー、アリストートル、クインチリヤン、クリスト、ペーコン、コメニウス、ロック、ルーソー、ベセダウ、カント、ベスタロッチ、フレール、ヘルベルト、ディステルウヰヒなどに十分の感謝を表せざるべからず。十分の感謝を表すと共に、是等先人の思想の今日猶活きつゝあるものを、一層顯彰する責任を感ぜ

ざるべからず。

第十章 今後の教育

上來言へる如くにして、今日の教育は、希臘羅馬の文學教育、中世の宗教々育、近世の科學教育を一緒に統合して、之を社會的事業となし、之を以て個人の修養と爲すは勿論、社會改善の根柢とせむとするものなり。之を以て今後の趨勢を案ずるに、社會は愈教育事業を重大のものとして各種の學校制度を立て、之を以て如何なる下級のものにも及ぼすに至るべく、教育學は諸學科の助を得て愈其の確なる基礎を得て、個人の開發、社會進歩の指針となるべく、從つて教育方法は個人の特質を重んじ、其自然の發達を追ひ、兒女の人品を爲すと共に、其世に立つに要する至當の職務を與ふる準備を爲して、其個人の自由及び社會の安寧を得しむることとなるべし。言葉を換へて之を云はば、今後に生ひ立つ兒女は、無理せず、其人品を爲し、其技能を得、かくて社會に立ち、其自由を實現し、社會は之に依りて其進歩を爲し、個人は社會に依りて活き、社會は個人に依りて進み、斯くて世は益々自由開明の域に進むべし。人品と技能と離れず、個人と社會と衝突せず、道德的の意志より技能を働か

す如き人が、社會に立つに當り、一身に取りては其自由を實現し、社會にしては其進歩を促すが如くなるに至らむこと、これ今後の教育の指して行くべき道ならむ。

附言、本講義中世紀迄は、稍々精密に講むたりしも、紙數の制限あるため、已むなく文藝復興時代よりは、單に大勢を叙することに止めたり。偏に讀者の諒恕を乞ふ。

西洋教育史

62
385

文
五
一

終

